令和4(2022)年度

鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

睦逢所在遺跡
大桷遺跡
用瀬所在遺跡
海士所在遺跡
佐貫所在遺跡
青谷上寺地遺跡
善田傍示ヶ崎遺跡
上町所在遺跡
下味野古墳群
会下・郡家遺跡
良田所在遺跡
常松所在遺跡
広岡古墳群・祢宜谷所在遺跡
六部山古墳群
松原谷田遺跡
松上所在遺跡
善田所在遺跡

2023
鳥取市教育委員会

鳥取市文化財調査報告書　第36集　令和4(二〇二二)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書　二〇二三　鳥取市教育委員会

序

この報告書は、開発事業計画に伴い、国庫補助金及び県補助金を受けて、実施した市内遺跡の発掘調査の記録です。

鳥取市内の平野部や丘陵上には数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していかなければならない市民の貴重な財産です。

近年は、社会の進展に伴って、各種開発事業が計画・実施され、さらに増加する傾向にあります。文化財保護を推し進めている私共といたしましては、こうした開発事業と文化財の共存を図るべく関係諸機関と協議を重ね、円滑に文化財行政を進めているところです。

本書をまとめるにあたり関係機関をはじめ、地元関係者の方々には多大なるご助言・ご協力をいただきました。ここに深く感謝を申し上げる次第であります。

本報告書が私たち郷土の歴史の解明や今後の調査研究の一助となれば幸いです。

令和５年３月

鳥取市教育委員会

教育長　尾室　高志

例　言

1．本書は平成31年度（令和元年度）から令和２年度に国・県補助金を得て、鳥取市教育委員会が実施した発掘調査の記録である。

2．平成31年度（令和元年度）に実施した調査は睦逢所在遺跡、大桷遺跡、用瀬所在遺跡、海士所在遺跡、青谷上寺地遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡、上町所在遺跡、下味野古墳群、会下・郡家遺跡、良田所在遺跡である。

3．令和２年度に実施した調査は佐貫所在遺跡、青谷上寺地遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡、上町所在遺跡、良田所在遺跡、常松所在遺跡、広岡古墳群。祢宜谷所在遺跡、六部山古墳群、松原谷田遺跡、松上所在遺跡、善田所在遺跡である。

4．平成31年度（令和元年度）から令和２年度にかけて調査した遺跡のトレンチ番号は通し番号を使用している。また海士所在遺跡のトレンチ番号は平成29年度から通し番号を使用している。大桷遺跡のトレンチ番号は平成30年度から通し番号を使用している。

5．本書における遺構図はすべて磁北を示し、レベルは基本的に海抜標高である。

6．発掘調査によって作成された記録類及び出土遺物は鳥取市教育委員会で保管している。

7．発掘調査から本書の作成にあたっては、多くの方々からご指導・ご助言並びにご協力をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

　鳥取県埋蔵文化財センター　鳥取県地域づくり推進部文化財局

本　文　目　次

序
例言
第１章　発掘調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
第２章　調査の結果 …… 5
　第１節　睦逢所在遺跡 …… 5
　第２節　大桷遺跡 …… 8
　第３節　用瀬所在遺跡 …… 10
　第４節　海士所在遺跡 …… 12
　第５節　佐貫所在遺跡 …… 16
　第６節　青谷上寺地遺跡 …… 20
　第７節　善田傍示ヶ崎遺跡 …… 24
　第８節　上町所在遺跡 …… 31
　第９節　下味野古墳群 …… 35
　第10節　会下・郡家遺跡 …… 37
　第11節　良田所在遺跡 …… 39
　第12節　常松所在遺跡 …… 41
　第13節　広岡古墳群・祢宜谷所在遺跡 …… 43
　第14節　六部山古墳群 …… 46
　第15節　松原谷田遺跡 …… 51
　第16節　松上所在遺跡 …… 53
　第17節　善田所在遺跡 …… 54

挿　図　目　次

第１図　調査遺跡位置図 …… 3
第２図　睦逢所在遺跡　調査トレンチ位置図 … 5
第３図　睦逢所在遺跡　第１トレンチ実測図 … 7
第４図　睦逢所在遺跡　第２トレンチ実測図 … 7
第５図　大桷遺跡　調査トレンチ位置図 …… 8
第６図　大桷遺跡　第３トレンチ実測図 …… 9
第７図　大桷遺跡　第４トレンチ実測図 …… 9
第８図　用瀬所在遺跡　調査トレンチ位置図 … 10
第９図　用瀬所在遺跡　第１トレンチ実測図 … 11
第10図　用瀬所在遺跡　第２トレンチ実測図 … 11
第11図　海士所在遺跡　調査トレンチ位置図 … 12
第12図　海士所在遺跡　第２トレンチ実測図 …… 13・14
第13図　海士所在遺跡　出土遺物実測図 …… 15
第14図　佐貫所在遺跡　調査トレンチ位置図 … 16
第15図　佐貫所在遺跡　第１トレンチ実測図 … 17
第16図　佐貫所在遺跡　第２トレンチ実測図 … 17
第17図　佐貫所在遺跡　第３トレンチ実測図 … 18
第18図　佐貫所在遺跡　第４トレンチ実測図 … 18
第19図　佐貫所在遺跡　第５トレンチ実測図 … 19
第20図　青谷上寺地遺跡　調査トレンチ位置 … 20
第21図　青谷上寺地遺跡　第１トレンチ実測 … 21
第22図　青谷上寺地遺跡　第２トレンチ実測 … 22
第23図　青谷上寺地遺跡　出土遺物実測図 …… 23
第24図　善田傍示ヶ崎遺跡　調査トレンチ位置図 …… 24
第25図　善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ実測図 …… 25
第26図　善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ実測図 …… 27
第27図　善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ実測図 …… 27
第28図　善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ実測図 …… 28
第29図　善田傍示ヶ崎遺跡　出土遺物実測図 … 29
第30図　上町所在遺跡　調査トレンチ位置図 … 31
第31図　上町所在遺跡　第１トレンチ実測図 … 33
第32図　上町所在遺跡　第２トレンチ実測図 … 33
第33図　上町所在遺跡　令和２年度調査区土層図 …… 34
第34図　下味野古墳群　調査トレンチ位置図 … 35
第35図　下味野古墳群　第１トレンチ実測図 … 35
第36図　下味野古墳群　第２トレンチ実測図 … 36
第37図　下味野古墳群　第３トレンチ実測図 … 36

第38図　会下・郡家遺跡　調査トレンチ位置図37
第39図　会下・郡家遺跡　第１トレンチ実測図38
第40図　会下・郡家遺跡　出土遺物実測図……38
第41図　良田所在遺跡　調査トレンチ位置図…39
第42図　良田所在遺跡　第１トレンチ実測図…40
第43図　良田所在遺跡　第２トレンチ実測図…40
第44図　常松所在遺跡　調査トレンチ位置図…41
第45図　常松所在遺跡　第１トレンチ実測図…42
第46図　広岡古墳群　調査トレンチ位置図１…43
第47図　祢宜谷所在遺跡　調査トレンチ位置図44
第48図　広岡古墳群　第１トレンチ実測図……45
第49図　祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ実測図45
第50図　祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ実測図45
第51図　祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ実測図45
第52図　六部山古墳群　調査トレンチ位置図…46
第53図　六部山古墳群　第１トレンチ実測図…47
第54図　六部山古墳群　第２トレンチ実測図…47
第55図　六部山古墳群　第３トレンチ実測図…48
第56図　六部山古墳群　第４トレンチ実測図…48
第57図　六部山古墳群　第５トレンチ実測図…48
第58図　六部山古墳群　第６トレンチ実測図…48
第59図　六部山古墳群　第７トレンチ実測図…49
第60図　六部山古墳群　第８トレンチ実測図…49
第61図　六部山古墳群　出土遺物実測図……50
第62図　松原谷田遺跡　調査トレンチ位置図…51
第63図　松原谷田遺跡　第１トレンチ実測図…52
第64図　松原谷田遺跡　出土遺物実測図……52
第65図　松上所在遺跡　調査トレンチ位置図…53
第66図　松上所在遺跡　第１トレンチ実測図…53
第67図　善田所在遺跡　調査トレンチ位置図…54
第68図　善田所在遺跡　第１トレンチ実測図…54

図　版　目　次

図版１

睦逢所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況(南から)
睦逢所在遺跡　第１トレンチ西壁断面(東から)
睦逢所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況(西から)
睦逢所在遺跡　第２トレンチ東壁断面(西から)
大桷遺跡　第３トレンチ掘下げ状況(南西から)
大桷遺跡　第３トレンチ北壁断面(南から)
大桷遺跡　第４トレンチ調査後(南西から)
大桷遺跡　第４トレンチ横断面(南西から)

図版２

用瀬所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況
(北東から)
用瀬所在遺跡　第１トレンチ西壁断面(東から)
用瀬所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況
(南東から)
用瀬所在遺跡　第２トレンチ西壁断面(東から)
海士所在遺跡　第２トレンチ完掘状況(東から)
海士所在遺跡　第２トレンチ北壁断面(南西から)

図版３

佐貫所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況
(北東から)
佐貫所在遺跡　第１トレンチ北壁断面(東から)
佐貫所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況
(南西から)
佐貫所在遺跡　第２トレンチ北壁断面(南から)
佐貫所在遺跡　第３トレンチ掘下げ状況
(南西から)
佐貫所在遺跡　第３トレンチ北壁断面(南東から)
佐貫所在遺跡　第４トレンチ掘下げ状況
(北東から)
佐貫所在遺跡　第４トレンチ北壁断面(東から)

図版４

佐貫所在遺跡　第５トレンチ掘下げ状況（南西から）
佐貫所在遺跡　第５トレンチ北壁断面（南から）
青谷上寺地遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（北西から）
青谷上寺地遺跡　第１トレンチ南東壁断面（北から）
青谷上寺地遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（北東から）
青谷上寺地遺跡　第２トレンチ北西壁断面（南東から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ南壁断面（北東から）

図版５

善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ西壁断面（東から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（北から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ西壁断面（東から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ調査後（東から）
善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ北断面（南から）
上町所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）
上町所在遺跡　第１トレンチP01 断面（西から）

図版６

上町所在遺跡　第１トレンチ南壁断面（東北から）
上町所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南から）
上町所在遺跡　第２トレンチ東壁断面（西から）
上町所在遺跡　令和２年度調査区東壁（西から）
上町所在遺跡　令和２年度調査区南壁（北から）
下味野古墳群　第１トレンチ掘下げ状況（東から）
下味野古墳群　第１トレンチ南壁断面（北東から）
下味野古墳群　第２トレンチ掘下げ状況（北から）

図版７

下味野古墳群　第２トレンチ西壁断面（北東から）
下味野古墳群　第３トレンチ掘下げ状況（北東から）
下味野古墳群　第３トレンチ北壁断面（東から）
会下･郡家遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（東から）
会下･郡家遺跡　第１トレンチ西壁断面（東から）
会下･郡家遺跡　第１トレンチSK01掘下げ状況（北から）
会下･郡家遺跡　第１トレンチSK02掘下げ状況（北から）
良田所在遺跡　第１トレンチ遠景（北東から）

図版８

良田所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（南東から）
良田所在遺跡　第１トレンチ北壁面（南から）
良田所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（東南東から）
良田所在遺跡　第２トレンチ北壁断面（南東から）
常松所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）
常松所在遺跡　第１トレンチ東壁断面（西から）
広岡古墳群　第１トレンチ掘下げ状況（東から）
広岡古墳群　第１トレンチ南壁断面（北西から）

図版９

祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南東から）
祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ南西壁断面（東から）
祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（東から）
祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ南壁断面（北西から）
祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ掘下げ状況（西から）
祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ北壁断面（南から）
六部山古墳群　第１トレンチ調査後（東から）
六部山古墳群　第１トレンチ断面（北から）

図版10

六部山古墳群　第２トレンチ完掘状況(南から)
六部山古墳群　第２トレンチ断面(西から)
六部山古墳群　第２トレンチ石棺状遺構検出(西から)
六部山古墳群　第３トレンチ断面(北東から)
六部山古墳群　第３トレンチ掘下げ状況(北から)
六部山古墳群　第４トレンチ完掘状況(南から)

図版11

六部山古墳群　第４トレンチ西断面(東から)
六部山古墳群　第５トレンチ調査後(北から)
六部山古墳群　第５トレンチ南側調査後(北から)
六部山古墳群　第５トレンチ土壙(南東から)
六部山古墳群　第６トレンチ調査後(西から)
六部山古墳群　第６トレンチ断面(北から)
六部山古墳群　第７トレンチ調査後(西から)

図版12

六部山古墳群　第７トレンチ断面(北西から)
六部山古墳群　第８トレンチ調査後(西から)
六部山古墳群　第８トレンチ断面(南から)
松原谷田遺跡　第１トレンチ調査後(東から)
松原谷田遺跡　第１トレンチ断面(南から)
松上所在遺跡　第１トレンチ調査後(南東から)
松上所在遺跡　第１トレンチ断面(南から)
善田所在遺跡　第１トレンチ完掘状況(北から)

図版13

善田所在遺跡　第１トレンチ断面(北から)
海士所在遺跡　出土遺物２
海士所在遺跡　出土遺物１
青谷上寺地遺跡(第１トレンチ)　出土遺物
青谷上寺地遺跡(第２トレンチ)　出土遺物１

図版14

青谷上寺地遺跡(第２トレンチ)　出土遺物２
善田傍示ヶ崎遺跡(第１トレンチ)　出土遺物１
善田傍示ヶ崎遺跡(第１トレンチ)　出土遺物２
善田傍示ヶ崎遺跡(第１トレンチ)　出土遺物３
善田傍示ヶ崎遺跡(第３トレンチ)　出土遺物

図版15

善田傍示ヶ崎遺跡(第２トレンチ)　出土遺物１
善田傍示ヶ崎遺跡(第２トレンチ)　出土遺物２

図版16

会下･郡家遺跡　出土遺物
会下･郡家遺跡(SK01)　出土遺物
六部山古墳群(第５トレンチ)　出土遺物
六部山古墳群(第１トレンチ)　出土遺物１
松原谷田遺跡(第１トレンチ)　出土遺物

第１章　発掘調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

鳥取市は面積765.31㎢、人口約18万人を擁する山陰地方最大級の都市であり、古墳、集落跡、散布地等の埋蔵文化財包蔵地は5,000か所以上所在している。また近年では各種開発事業に伴い、遺跡の数は増加の一途をたどっている。このような中、近年では大型公共事業は減少傾向にあるものの、民間事業者による開発事業計画は増加しており開発事業との調整を図る試掘調査の件数も増加している。

今回報告する試掘調査は平成31年度（令和元年度）から令和２年度に実施したものである。平成31年度（令和元年度）は高圧送電線の鉄塔建設計画に伴って実施した睦逢所在遺跡、下味野古墳群、携帯電話基地局建設に伴って実施した会下・郡家遺跡、道路事業に伴って実施した大桷遺跡、佐貫所在遺跡、良田所在遺跡、個人住宅建設に伴って実施した青谷上寺地遺跡、個人開発に伴って実施した海士所在遺跡、河川改修計画に伴って実施した善田傍示ヶ崎遺跡、庭園整備に伴って実施した上町所在遺跡の10遺跡である。令和２年度は青谷上寺地遺跡史跡公園整備に伴って実施した青谷上寺地遺跡、河川改修計画に伴って実施した善田傍示ヶ崎遺跡、庭園整備に伴って実施した上町所在遺跡、道路整備事業に伴って実施した良田所在遺跡、常松所在遺跡、善田所在遺跡、高圧送電線の鉄塔建設計画に伴って実施した広岡古墳群、祢宜谷所在遺跡、松上所在遺跡、個人開発に伴って実施した六部山古墳群、建物建設計画に伴って実施した松原谷田遺跡の11遺跡である。

試掘調査はトレンチ掘削による遺構・遺物の包含状況の確認に主眼を置いて実施し、層ごとに遺構の確認と包含遺物の把握を行いながら掘り下げを行った。トレンチの掘削は基本的に人力によって実施したが、平成31年度に実施した青谷上寺地遺跡、令和２年度に実施した善田傍示ヶ崎遺跡、松原谷田遺跡は重機を用いて表土除去を行い、その後人力による掘り下げを行った。図面や出土遺物の整理作業は主に調査終了後から行い、本格的な報告書作成は令和４年12月から実施した。また各調査遺跡のトレンチ数、調査面積、現地調査期間は次のとおりである。

遺跡名	トレンチ数	調査面積（㎡）	調査期間
1　睦逢所在遺跡	2	40.0	2019（H31・R1）/4/15～5/10
2　大桷遺跡	2	17.5	2019（R1）/5/10～16、11/27～29
3　用瀬所在遺跡	2	38.5	2019（R1）/5/27～6/4
4　海士所在遺跡	1	31.8	2019（R1）/6/11～20
5　佐貫所在遺跡	5	80.0	2020（R2）/11/4～2/13
6　青谷上寺地遺跡	2	50.41	2020（R2）/2/4～14、4/23～5/8
7　善田傍ヶ崎遺跡	4	64.0	2020（R2）/1/20～3/6、2021（R3）/3/11～24
8　上町所在遺跡	3	10.5	2020（R2）/2/25～3/12、11/17
9　下味野古墳群	3	11.04	2020（R2）/3/17～19
10　会下・郡家遺跡	1	25.0	2020（R2）/3/17～19
11　良田所在遺跡	1	13.4	2020（R2）/3/23～24、5/14～15
12　常松所在遺跡	1	13.0	2020（R2）/5/21～27
13　広岡古墳群	1	8	2020（R2）/6/8～7/1
14　祢宜谷所在遺跡	3	17.5	2020（R2）/6/8～7/1
15　六部山古墳群	8	52.85	2020（R2）/9/8～28、12/1～11
16　松原谷田遺跡	1	23.92	2021（R3）/1/18～2/1
17　松上所在遺跡	1	10.0	2021（R3）/1/26～2/12
18　善田所在遺跡	1	10.35	2021（R3）/2/12～3/4

第２節　調査体制

発掘調査及び報告書作成時の組織体制等は以下の通りである。

１．試掘調査

平成31（令和元）年度（2019）

教育長　尾室高志

文化財課　教育委員会事務局次長兼文化財課長兼保存整備係長（～７月）：冨田恵子
教育委員会事務局次長兼文化財課長（８月～）：冨田恵子
参事兼保存整備係長（８月～）：佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員：細田隆博、技師：岡垣頼和

保存整備係　主査：松原雅彦、主幹兼文化財専門員：加川崇、主任兼文化財専門員：坂田邦彦

鳥取市埋蔵文化財センター　所長：山田真宏、調査員：谷口恭子・神谷伊鈴・横山聖

令和２年度（2020）

教育長　尾室高志

文化財課　課長：佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員：細田隆博、技師：岡垣頼和
会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係　係長兼文化財専門員：加川崇、主任兼文化財専門員：坂田邦彦
主事：寺西和代・田野詩織、会計年度任用職員：田中瞳（１月～）

鳥取市埋蔵文化財センター　所長：山田真宏、調査員：谷口恭子・横山聖

令和３年度（2021）

教育長　尾室高志

文化財課　課長：佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員：細田隆博、技師：岡垣頼和
会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係　係長兼文化財専門員：加川崇、主任兼文化財専門員：坂田邦彦
主事：寺西和代・田野詩織、会計年度任用職員：田中瞳

鳥取市埋蔵文化財センター　所長：野際章人、副所長：谷口恭子、調査員：横山聖

２．報告書作成

令和４年度（2022）

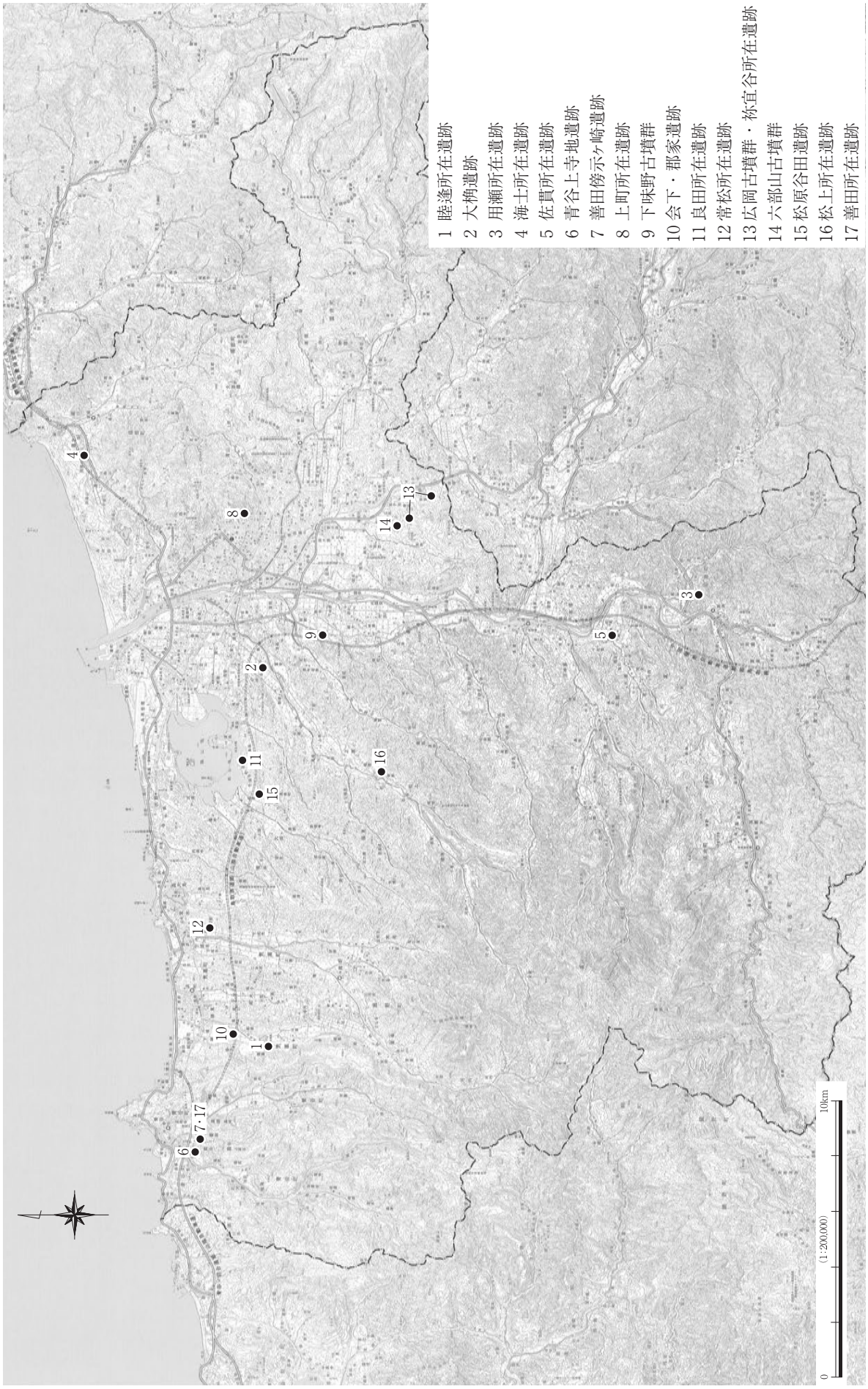
教育長　尾室高志

文化財課　課長：佐々木敏彦
課長補佐兼鳥取城整備推進係長兼文化財専門員：佐々木孝文

鳥取城整備推進係　主任兼文化財専門員：細田隆博、技師：岡垣頼和
会計年度任用職員：長谷早紀・松本幸子

保存整備係　係長兼文化財専門員：加川崇、主任兼文化財専門員：坂田邦彦
主事：寺西和代、椿保奈瀬

鳥取市埋蔵文化財センター　所長：野際章人、副所長：谷口恭子、調査員：横山聖


1 睦逢所在遺跡
2 大桝遺跡
3 用瀬所在遺跡
4 海士所在遺跡
5 佐貫所在遺跡
6 青谷上寺地遺跡
7 善田傍示ヶ崎遺跡
8 上町所在遺跡
9 下味野古墳群
10 会下・郡家遺跡
11 良田所在遺跡
12 常松所在遺跡
13 広岡古墳群・祢宜谷所在遺跡
14 六部山古墳群
15 松原谷田遺跡
16 松上所在遺跡
17 善田所在遺跡
0
(1:200,000)
10km

第１図　調査遺跡位置図

平成16年(2004)の大合併以前、９つの旧市町村ではそれぞれ文化財調査報告書が刊行され、青谷町、気高町、鹿野町、福部村、国府町、河原町、用瀬町、佐治村ではそれぞれ通し番号が付されていたものの、旧鳥取市については、その初期においては番号が付けられ、第32集までは確認できるが、以降の報告書には表記が無く、合併後も未記載のままであった。これにより、整理作業や説明の際に混乱を生じたことから、合併時に遡り通し番号を付すこととした。このため、鳥取市教育委員会発行の報告書には昭和期に刊行した旧番号「鳥取市文化財報告書○」と、第25集以降に記載のある新番号「鳥取市文化財調査報告書　第○集」との２種類が存在する。

集	書　名	副　書　名	発　行　日
1	縁山４号墳発掘調査報告書		平成16年(2004)12月24日
2	平成16(2004)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成17年(2005)３月15日
3	内海中寺ノ谷遺跡	県営内海中地区ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	平成17年(2005)３月15日
4	鳥取市内遺跡発掘調査報告書	上原遺跡・山宮阿弥陀森遺跡	平成17年(2005)３月19日
5	鳥取市内遺跡発掘調査報告書		平成17年(2005)３月18日
6	平成17(2005)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成18年(2006)３月23日
7	平成18(2006)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成19年(2007)３月23日
8	大坪イカウ松遺跡(第２冊)	県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	平成19年(2007)３月23日
9	史跡栃本廃寺跡発掘調査報告書		平成20年(2008)３月26日
10	平成19(2007)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成20年(2008)３月26日
11	大坪大縄手遺跡(第２冊)	県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	平成21年(2009)３月26日
12	平成20(2008)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成21年(2009)３月26日
13	平成20(2008)年度史跡鳥取城跡太鼓御門跡発掘調査報告書		平成21年(2009)３月26日
14	平成21(2009)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成22年(2010)３月26日
15	平成22(2010)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成23年(2011)３月24日
16	平成24(2012)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成25年(2013)３月28日
17	史跡栃本廃寺跡環境整備報告書		平成25年(2013)３月29日
18	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書	第21・26・27・28次発掘調査	平成25年(2013)３月29日
19	平成25(2013)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成26年(2014)３月28日
20	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅱ	第22・30次発掘調査	平成26年(2014)３月28日
21	平成27(2015)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成28年(2016)３月30日
22	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅲ	第34次発掘調査	平成28年(2016)３月31日
23	平成28(2016)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成29年(2017)３月28日
24	平成29(2017)年度亀井茲矩墓調査報告書		平成29年(2017)10月２日
25	鳥取市倭文６号墳出土遺物の研究	出土品再整理報告書	平成30年(2018)３月23日
26	平成29(2017)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		平成30年(2018)３月31日
27	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅳ	第31・39・40次発掘調査	平成30年(2018)３月31日
28	福田家住宅調査報告書		平成30年(2018)３月31日
29	平成31/令和１(2019)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		令和２年(2020)３月31日
30	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅴ	第40・41次発掘調査	令和２年(2020)３月31日
31	令和２(2020)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書	鳥取城下町遺跡第６～14次調査	令和３年(2021)３月31日
32	令和３(2021)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書	布勢遺跡	令和４年(2022)３月31日
33	史跡鳥取城跡附太閤ヶ平発掘調査報告書Ⅵ	第41～53次発掘調査	令和４年(2022)３月31日
34	布勢遺跡	個人住宅建設事業に係る発掘調査報告書	令和５年(2023)３月17日
35	因幡東照宮別当寺院大雲院資料調査報告書		令和５年(2023)３月31日
36	令和４(2022)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書		本報告

※集は「鳥取市文化財調査報告　第○集」の略、 第25集以降には記載あり

第2章　調査の結果

第１節　睦逢所在遺跡

調査期間　平成31・令和元年(2019) ４月15日～５月10日

調査地が所在する逢坂谷は、ＪＲ山陰本線浜村駅の南西に位置し、旧河内川によって形成された東西約１km、南北約６kmの細長い河谷平野で河岸段丘が明瞭に遺存する地域である。

周辺では旧石器時代の遺物は確認されておらず、気高町の八束水砂丘から有舌尖頭器が出土していることから、縄文時代草創期までは遡る可能性が推測される。縄文時代は、沿岸部の砂丘や河岸段丘等で狩猟採集を中心とする生活が営まれたと想定されており、落とし穴や炉跡等が検出されている。弥生時代に入り、逢坂谷の周辺地域では、住居域や墓域に伴う遺構や遺物が発掘調査によって確認されている。古墳時代も継続し、山麓や尾根上に多くの古墳が展開し、段丘上に集落遺跡が確認されている。律令体制下では因幡国気多郡に属し、郡衙は上原遺跡群(山宮阿弥陀森遺跡、上原西遺跡、上原遺跡、上原南遺跡)と考えられている。遺構は、Ｌ字型の配置をとる大型掘立柱建物跡や二面庇付掘立柱建物跡を中心とする掘立柱建物群、礎石建物跡、区画溝等が検出されている。さらに、調査地周辺を古代山陰道が東西に走っていたと想定されている。中世の各時期の争乱を経て、調査地周辺は天正９(1581)年に亀井武蔵守茲矩が鹿野城主として治め、藩内の産業振興や新田開発、朱印船貿易等が行われている。以上のように逢坂谷の周辺地域は、古くから人々が生活の場として利用されていたことがわかっている。

今回の試掘調査は電力会社の高圧送電線鉄塔移設計画に伴うもので、三王尻遺跡から睦逢古墳群にかかる水田耕作地及び丘陵裾付近が対象となり、鉄塔移設予定地のうちそれぞれ１ヶ所ずつの計２ヶ所(Ｔｒ１・２)で調査を実施することとした。なお、調査は遺構・遺物の有無に主眼を置いて実施した。

第２図　睦逢所在遺跡　調査トレンチ位置図

第１トレンチ(Tr1)　〔第３図、図版１〕

調査地は市立逢坂小学校の北約650m、大堤池の南約150mの水田部分にあたる。調査地は河岸段丘上に立地し、旧地形ではやや入り組んだ三王尻遺跡の北東側境界付近に位置する。昭和61(1986)年度に、南西約50mの耕作地の発掘調査が実施され、竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土壙、溝、多くのピットが検出され、弥生土器や土師器、須恵器等が出土している。調査地の標高は31.15m程度で、設定した5.0×5.0mのトレンチを地山とみられる明黄褐色パミス層(標高30.70～30.60m付近)まで掘下げを行った。

調査の結果、厚さ20㎝程度の耕土(第１・２層)以下はほ場整備時の客土とみられる黒褐色～黒色粘質土(第３層)、黄褐色粘質土(第４層)、暗灰黄色粘質土(第５・７層)が続き、地表面下50㎝前後で地山とみられる明黄褐色パミス(第９層)に至る。遺物は第１～４層から土師器、須恵器、陶磁器片等が出土しているが、第９層直上の第５層からはナイロンゴミも検出されており、いずれもほ場整備時の混入遺物と判断される。また、第９層上面にはほ場整備時のものとみられる重機のキャタピラー痕状のものも認められ、調査地周辺はほ場整備時に削平された可能性が考えられる。

第２トレンチ(Tr2)　〔第４図、図版１〕

調査地は第１トレンチの西側約300m、睦逢集落西側後背の丘陵裾にあたる。周辺の丘陵上には石室を主体とする睦逢古墳群が展開し、睦逢11号墳は鳥の絵等が線刻された横穴式石室としられる。かつて対象地は宅地として使用されていたとみられ、建物基礎等も現存することから基礎の前面の平坦地に3.0×5.0mのトレンチを設定して最深地表面下２m(標高41.40m)程度まで掘下げを行った。なお、現況の標高は43.50m前後である。

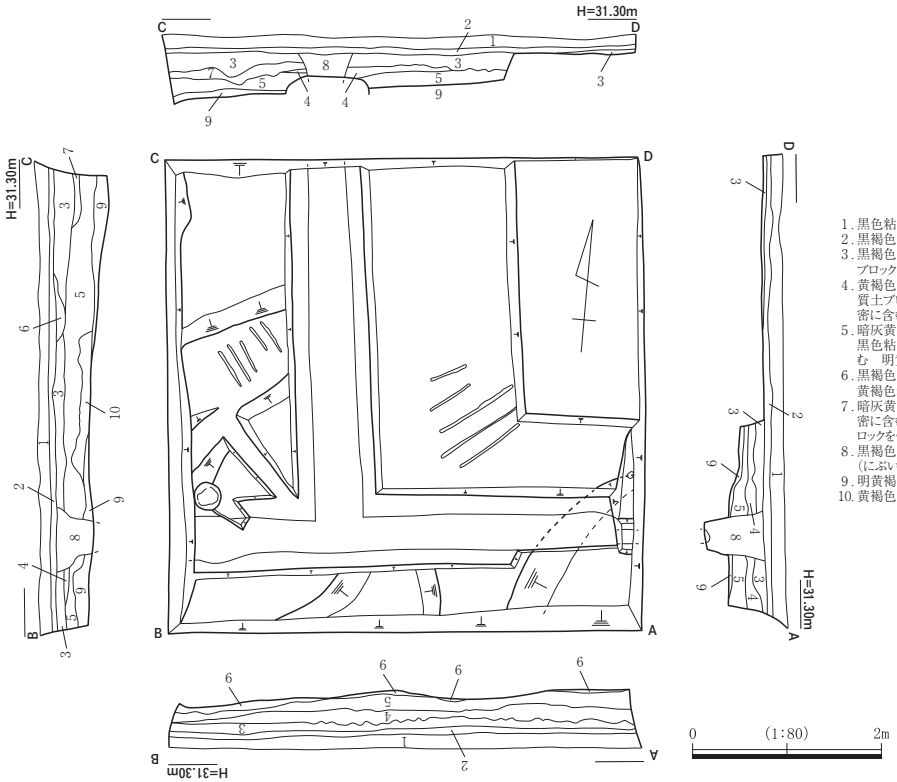
調査の結果、表土除去面(地表面下約10㎝)から現代のものとみられる礫石を検出するとともに現代の擂鉢片や土師器細片等を包含した第２層(黒褐色粘質土層)除去面付近(地表面下約20㎝)からは10～40㎝大の割石を検出した。しかしながらそれ以下からはブロックの入り具合から人為的な客土とみられる地表面下50㎝（標高43.0m)前後の第15層(黄褐色粘質土層)の存在以外に明瞭な遺構は検出されなかった。また遺物についてはこの第15層を挟む形で検出した第５・６層(黒褐色粘質土層)から磁器片が、さらにこの第６層の下の第７層(黒色粘質土層)から土師器片がいずれもごく僅かに出土したのみで、第８層(黒褐色粘質土層)以下は無遺物層とみられる。

小結

今回の調査は上述のとおり遺構・遺物の有無確認を目的として実施した。その結果、第１トレンチではかつてのほ場整備によるとみられる削平を受けていることが判明し、同一レベルのほ場付近では遺構が遺存していない可能性が高いものとみられる。次に、第２トレンチは現地表面付近に現代に近い時期の改変が認められるものの、当該期の遺構は認められなかった。ただし、調査地の付近では、昭和56(1981)年度以降に三王尻遺跡・山宮茶山畑遺跡・山宮13号墳の発掘調査が実施されている。遺構は竪穴建物跡や掘立柱建物跡、土壙、溝等が検出され、遺物は弥生土器や土師器、須恵器等が多く出土している。検出された遺構は、計画性が希薄で一般農民層の集落跡と想定されている。今後も調査地周辺地域の開発にあたっては、きめの細かい確認調査が必要であると言える。

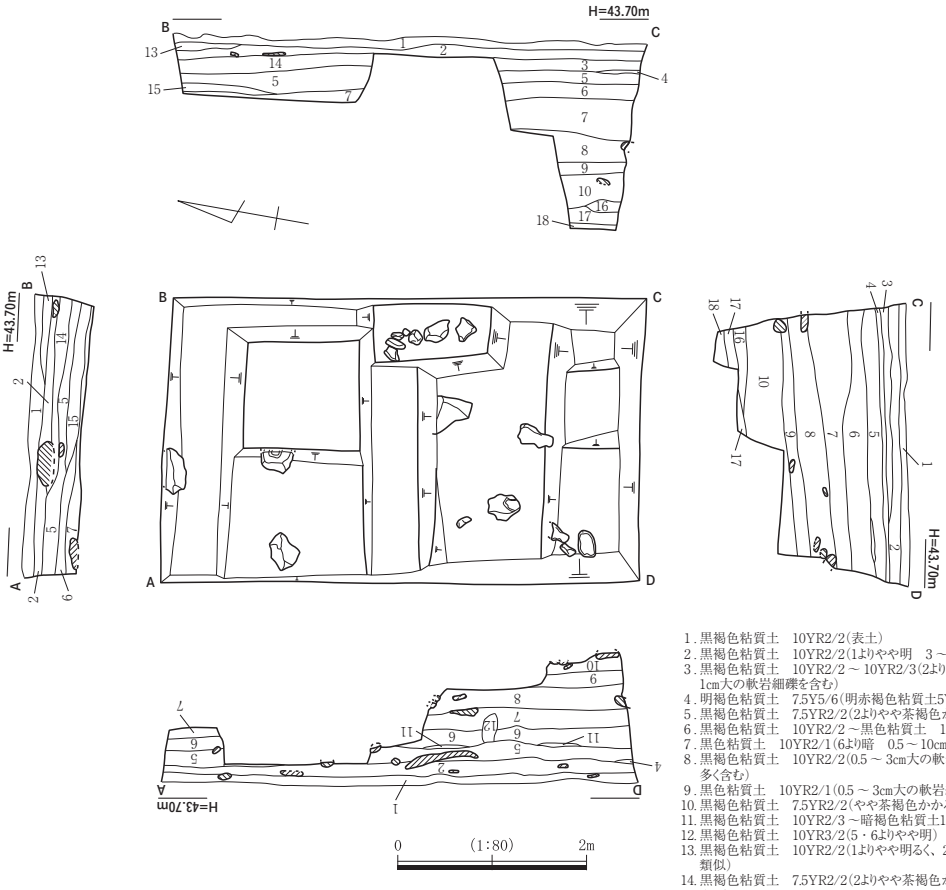
参考文献

気高町教育委員会『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書 三王尻遺跡・山宮茶山畑遺跡・山宮13号墳』1988年
㈲平凡社地方資料センター『鳥取県の地名』1992年
鳥取県埋蔵文化財センター『会下・郡家遺跡』2018年
鳥取県『新鳥取県史(資料編）考古３飛鳥・奈良時代以降』2018年
鳥取県埋蔵文化財センター『乙亥正屋敷廻遺跡』2019年



1. 黒色粘質土　10YR2/1(耕土)
2. 黒褐色粘質土　10YR3/1(耕土)
3. 黒褐色粘質土　10YR3/1 ～黒色粘質土　10YR2/1(黒色粘土ブロック及び黄褐色粘質土ブロックを多く含む　ナイロン紐を含む)
4. 黄褐色粘質土　2.5Y5/3(にぶい黄橙色粘土ブロック及び黒色粘質土ブロックを含む灰黄褐色粘質土及び黄褐色粘質土ブロックを密に含む)
5. 暗灰黄色粘質土　2.5Y5/2 ～ 2.5Y4/2(にぶい黄橙色粘土及び黒色粘質土ブロックを含む　　灰黄褐色粘質土ブロックを密に含む　明黄褐色パミスブロックを多く含む　ナイロンゴミを含む)
6. 黒褐色粘質土　10YR3/1(2よりやや明　黒色粘土ブロック及び黄褐色粘質土ブロックを含む)
7. 暗灰黄色粘質土　2.5Y4/2(5よりやや暗　黒色粘質土ブロックを密に含む　黄褐色粘質土ブロックを含む　にぶい黄橙色粘土ブロックを僅かに含む)
8. 黒褐色粘質土　10YR3/1・明黄褐色パミス　10YR6/8の混合(にぶい黄橙色粘土ブロックを含む)
9. 明黄褐色パミス　10YR6/8(地山)
10. 黄褐色粘質土　10YR5/8(にぶい黄褐色土を含む)

第３図　睦逢所在遺跡　第１トレンチ実測図



1. 黒褐色粘質土　10YR2/2(表土)
2. 黒褐色粘質土　10YR2/2(1よりやや明　3 ～ 10cm大の角礫を含む　陶器片を含む)
3. 黒褐色粘質土　10YR2/2 ～ 10YR2/3(2よりやや明　1 ～ 2cm大の細角礫を多く含む　0.5 ～ 1cm大の軟岩細礫を含む)
4. 明褐色粘質土　7.5Y5/6(明赤褐色粘質土5YR5/8を含む)
5. 黒褐色粘質土　7.5YR2/2(2よりやや茶褐色かかる　0.5 ～ 3cm大の軟岩細礫を密に含む)
6. 黒褐色粘質土　10YR2/2 ～黒色粘質土　10YR2/1(0.5 ～ 2cm大の軟岩細礫を含む)
7. 黒色粘質土　10YR2/1(6より暗　0.5 ～ 10cm大の軟岩礫を多く含む　30cm大の軟岩片を含む)
8. 黒褐色粘質土　10YR2/2(0.5 ～ 3cm大の軟岩細礫を密に含む　5 ～ 50cm大の軟岩板状片を多く含む)
9. 黒色粘質土　10YR2/1(0.5 ～ 3cm大の軟岩細礫を多く含む　10 ～ 30cm大の岩片を含む)
10. 黒褐色粘質土　7.5YR2/2(やや茶褐色かかる　15cm大の軟岩片を含む)
11. 黒褐色粘質土　10YR2/3 ～暗褐色粘質土10YR3/3(5・6より明)
12. 黒褐色粘質土　10YR3/2(5・6よりやや明)
13. 黒褐色粘質土　10YR2/2(1よりやや明るく、2よりやや暗　0.5 ～ 3cm大の軟岩礫を含む　3に類似)
14. 黒褐色粘質土　7.5YR2/2(2よりやや茶褐色かかる、5よりやや明　0.5 ～ 5cm大の軟岩細礫を含む)
15. 黄褐色粘質土　10YR5/6
16. 黒褐色粘質土　7.5YR3/2(3 ～ 6cm大の軟岩礫を多く含む)
17. 黒色粘質土　7.5YR2/1
18. 黒褐色粘質土　7.5YR2/2(2 ～ 7cm大の軟岩礫を含む)

第４図　睦逢所在遺跡　第２トレンチ実測図

第２節　大桷遺跡

調査期間　令和元年(2019) ５月10日～16日・11月27日～29日

大角遺跡は鳥取市大桷、嶋に所在する縄文時代晩期から中世までの各時代の遺物が出土する複合遺跡として知られ、昭和50年に実施された「団体営高草地区ほ場整備事業」の工事中に多数の土器片が出土したことによって確認された遺跡である。鳥取西道路建設に伴い実施された大規模な発掘調査によって、平野中央部は弥生時代から古代にかけての遺構・遺物が集中することが確認された。

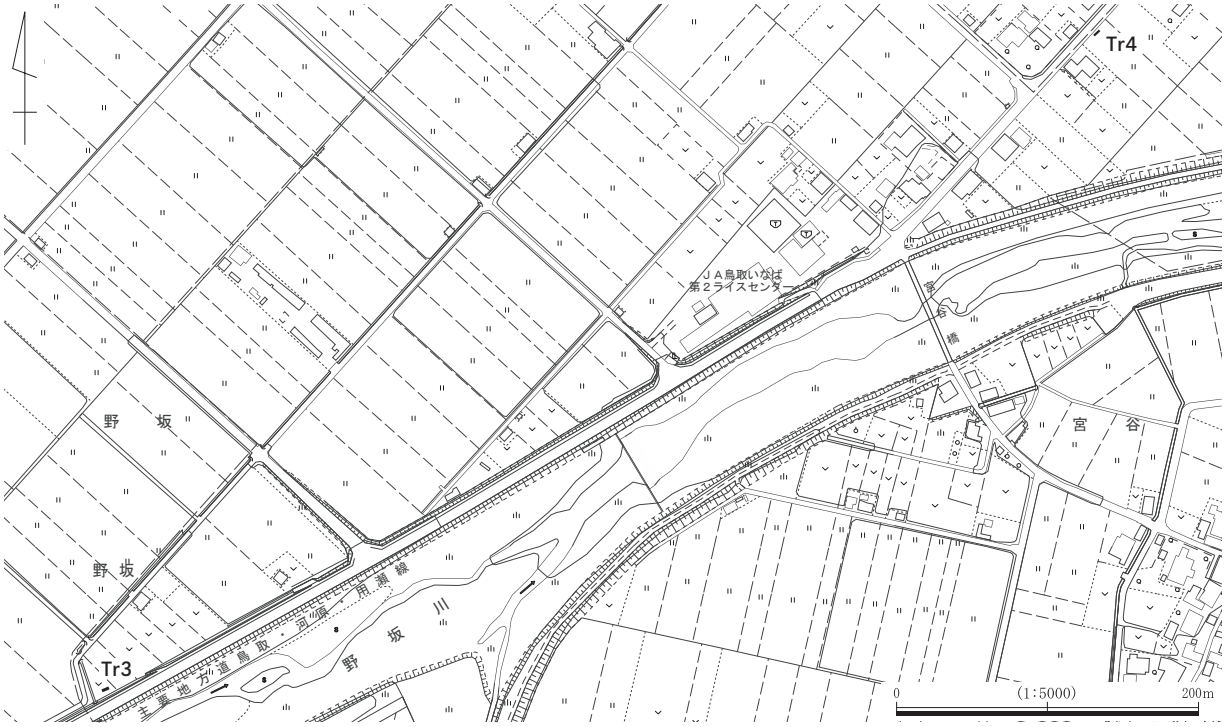
今回の調査対象地は県道拡幅整備事業に伴い実施したもので、遺跡の広がりとその性格を知ることを目的とした。遺構・遺物の有無の確認に主眼を置き、野坂川北側土手を東西に走る県道鳥取河原用瀬線沿いの法裾付近に東西方向に長いトレンチを２ヶ所設定した。なお、各トレンチについては、2018年度調査との混乱を避けるために第３トレンチ(Tr３)と第４トレンチ(Tr４)と続けた。

第３トレンチ(Tr3)　〔第６図、図版１〕

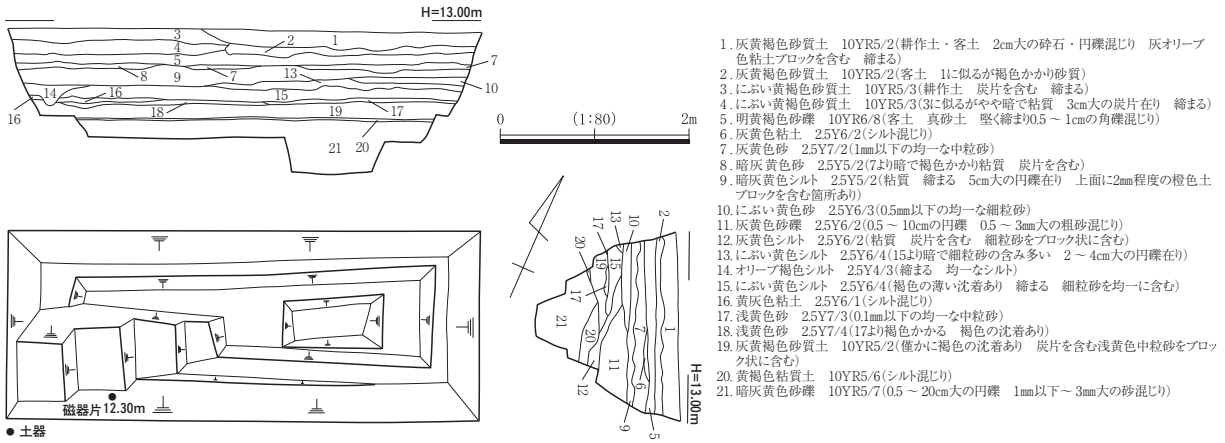
今回の調査地第３トレンチ(Tr３)は、県道鳥取河原用瀬線の宮谷橋から野坂橋の中間部の県道土手下の北側水田部にあたる。現況では畑地として利用されているが元々は水田であったとみられる。周辺は一見して野坂川の氾濫原と推測される。調査はこの平地に、県道土手軸に沿って幅2.0m×長さ5.0mのトレンチを設定した。現況標高12.94mを測る。現地表下20～28cmの第１～４層は耕作土および客土で、その下第５層は真砂土を叩き締めた厚さ10cm程の床土である。以下、第７・８層砂層が広がりその下に陶磁器細片を含む第９層暗灰黄色シルトが堆積する。第９層下は北東側への砂礫層の落ち込み(第11･12層)が確認され、さらに標高12.05mで第21層砂礫層が広がる。第21層砂礫層上面には薄く褐灰色粘土(第20層)が広がり、それから上は順層で、第15層上面、第19層上面が沈着の様子などから遺構面の可能性も考えられる。第21層砂礫層は標高11.39mまで確認。礫は下位ほど大きくなる傾向があり、湧水層である。第９層で土師器および近世磁器細片、第11層で肥前系陶器細片１点が出土している。

第４トレンチ(Tr4)　〔第７図、図版１〕

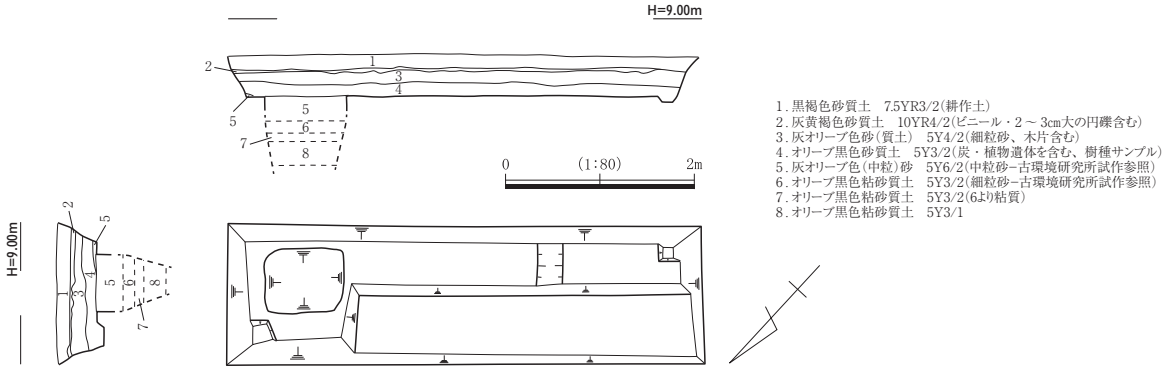
第４トレンチ(Tr４)調査地は、2008～2010年度にかけて(公財)鳥取市文化財団が行った道路拡幅に



第５図　大桷遺跡　調査トレンチ位置図



第６図　大桙遺跡　第３トレンチ実測図



第７図　大桙遺跡　第４トレンチ実測図

よる調査地から 南西約220mに位置し、現在水田として利用されている耕作地に1.5×5.0mのトレンチを設定、掘削を行った。標高8.60m付近の地表面下約20cmが耕土の第１層(黒褐色砂質土)、第２層(灰黄褐色砂質土)は２～８cmの厚さでビニール片、２～３cm大の円礫を含み、第３層(灰オリーブ色細粒砂質土)、第４層(オリーブ黒色砂質土)がそれぞれ10～15cmの堆積で続く。第５層は灰オリーブ色(中粒)砂が約25cmの厚さで堆積し、上位で湧水が認められた。この砂層からの湧水で崩落の危険が生じたため急遽一部分の深堀で対応、以下は安定した第６・７・８層(オリーブ黒色粘砂質土)が続き、写真と簡易記録で標高7.40mまでを確認した。

遺構は検出されなかった。遺物は第３層除去面で染付皿細片１点を検出した。(江戸前期後半)

小結

今回の調査では明瞭な遺構は検出されず、遺物もわずかな出土にとどまった。しかし、調査対象地の周辺は、野坂川の流域にあたり、小規模な微高地状に遺構などが遺存する可能性があり、今後も開発工事等にあたってはきめの細かい確認調査が必要である。

参考文献

公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室『大角遺跡Ⅳ』2018年
鳥取市教育委員会『平成31／令和元年度鳥取市市内遺跡発掘調査概要報告書』2020年

第３節　用瀬所在遺跡

調査期間　令和元年(2019)５月27日～６月４日

用瀬所在遺跡は鳥取市用瀬長用瀬、景石城跡の西側山麓に所在する。北東上位には城山谷筋に沿って階段状の曲輪郡や石垣が確認されており、「磯部氏居館跡」と呼ばれている。

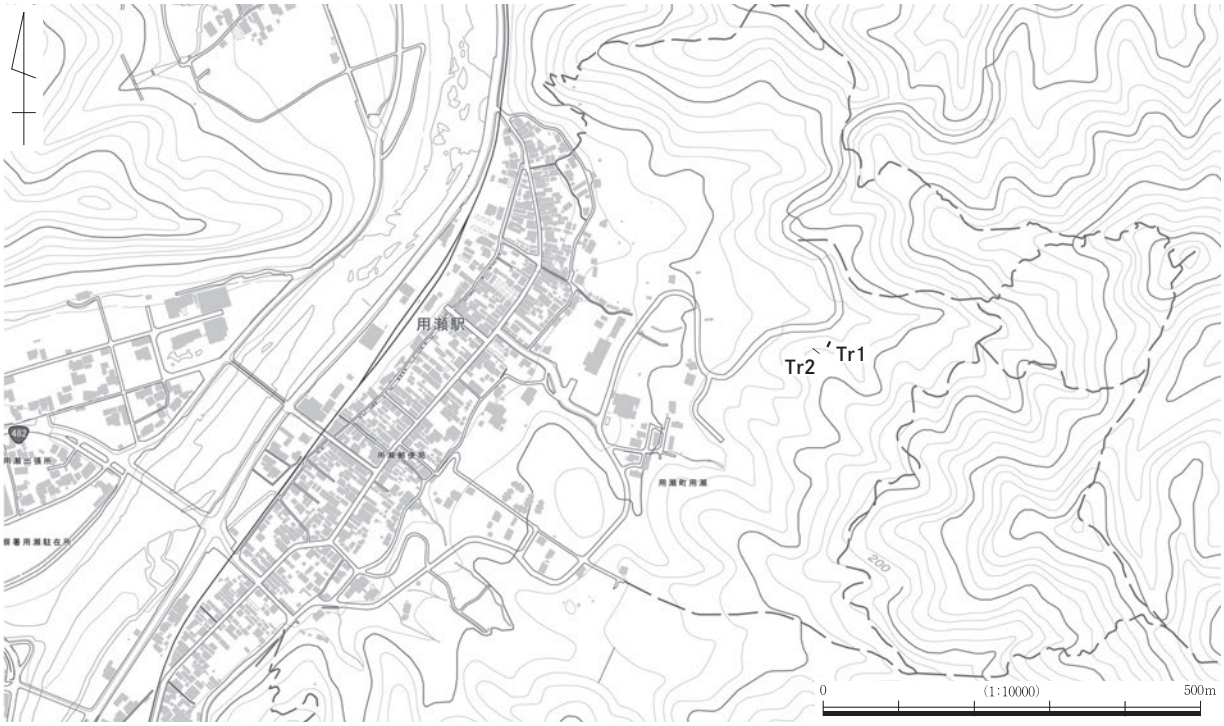
今回の調査は鳥取市水道局による水道施設建設に伴うもので、磯部氏居館跡入口にあたる農免農道用瀬線南沿いの曲輪状の平坦地と、その上の尾根斜面にトレンチを計２本設定した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第９図、図版２〕

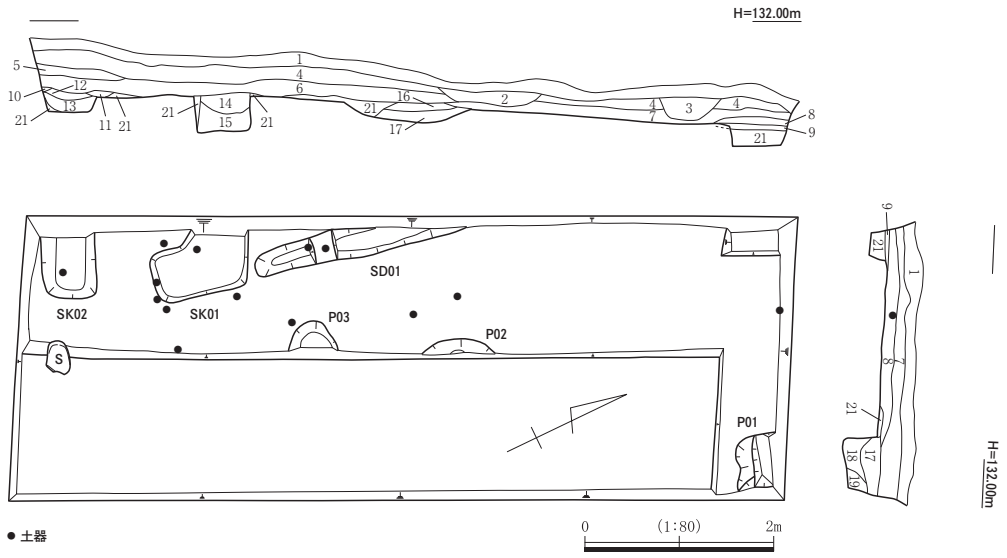
調査地は磯部氏居館跡の谷筋向かいの北東へ延びる丘陵のうち、農免道路沿いの北面する平坦になった畑地である。この標高131.1～131.8mの平坦地に尾根軸に沿って、幅３m、長さ8.1mのＴｒ１を設定した。第１層～第４層まではナイロン片などを含む耕作土および畑作の撹乱層である。第６層は遺物包含層で、土師器片や瀬戸･美濃丸皿、肥前染付を含む陶磁器片、鉄器片を含む。その下層、第７層を挟んでトレンチ北側に広がる第８層褐灰色粘質土は炭片・焼土ブロックを含みその下層の第21層上面は褐色の沈着が観察される。また、第21層上面で、土坑(SK)２基、溝状遺構(SD)１条、ピット(P)３基を検出した。これらの遺構はトレンチ南側に集中し完結する状態の検出ではないが、遺構の深さがSK01は40㎝、SK02は21㎝、SD01は20㎝、P01は40㎝、P02は22㎝、P03が14㎝を測り、比較的深い掘り込みである。このうちSK01とP01は底部からの壁面の立ち上がりが直線的である。また、SK01の下層第15層から白磁細片、SD01下層第17層から染付細片が出土している。第６層で出土した瀬戸・美濃陶器丸皿は径10.8㎝、所謂おけ底で16世紀後半期とみられる。

第２トレンチ(Tr2)　〔第10図、図版２〕

調査地は磯部氏居館跡の谷筋向かいの北東方向へ延びる丘陵である。この丘陵は果樹園に利用後植林されスギ林となっている。この丘陵の尾根筋、標高436.2～439.1mのスギ林斜面に、幅1.0m、長さ11.5mのＴｒ２を設定した。周辺は設定したトレンチ範囲を含め、地表面に陶磁器片散在が観察された。トレンチは厚さ５㎝程度の第１層腐葉土・表土を除くと第２層明黄褐色粘質土が広がった。表面に腐朽し

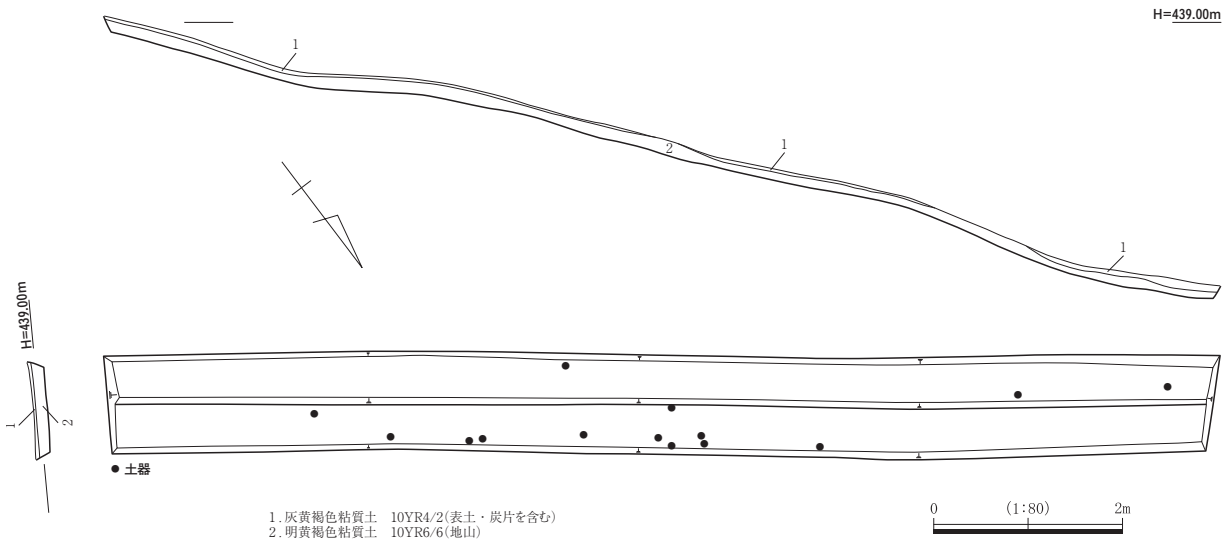


第８図　用瀬所在遺跡　調査トレンチ位置図



1.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(表土・耕作土　1～3mm大の礫を含む)
2.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(1よりやや暗　3mm大の礫を含む　締まり弱い)
3.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(1よりやや暗で粘質　締まり弱い)
4.灰黄褐色粘質土　10YR5/2(1よりやや明で締まる　旧耕作土)
5.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(炭片を含む　粘質強)
6.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(炭片を含む　5より締まり弱い　1～5cm大の明黄褐色土ブロックを含む)
7.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(6より明で明黄褐色土ブロックの含み多い　4より締まる)
8.褐灰色粘質土　10YR4/1(1～3mm大の砂礫を含む　焼土ブロックを含む　炭片を含む　灰色かかる)
9.灰黄褐色粘質土　10YR6/2(粘質強い　明黄褐色土を含む)
10.にぶい黄橙色粘質土　10YR7/2(粘質強い　2mm大の砂礫を含む)
11.にぶい黄褐色粘質土　10YR6/6(灰白色土混じり　粘質強)
12.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(僅かに明黄褐色土混じり　SK02)
13.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(炭片を含む　12より暗で締まる　SK02)
14.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(炭片を含む　締まり弱い　2～3cm大の明黄褐色土ブロックを含む　SK01)
15.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(14より暗で締まる　SK01)
16.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(炭片を含む　2cm大の褐色土ブロックを含む　SD01)
17.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(16より締まる　炭片を含む　SD01)
18.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(1～3cm大の明黄褐色土ブロックを含む　締まり弱い　P01)
19.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(18より明黄褐色土ブロックの含み少　P01)
20.にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(18・19より暗で締まる　P01)
21.黄褐色粘質土　10YR5/6(1～3mm大の砂礫を含む　地山)

第９図　用瀬所在遺跡　第１トレンチ実測図



1.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(表土・炭片を含む)
2.明黄褐色粘質土　10YR6/6(地山)

第10図　用瀬所在遺跡　第２トレンチ実測図

た根の痕跡など凹凸が部分的に見られることから南側２分の１を掘り下げて確認したが地山であった。掘下げの際に第１層より土師器片、陶磁器片、瓦片、ガラス片などが出土している。

小結

以上、今回の調査対象地のうち、第１トレンチから複数の土坑状の落ち込みを検出し、瀬戸・美濃などの陶磁器が出土した。この他にも、周辺には遺構が遺存している可能性が考えられ、今後の開発工事等にあたっては十分注意が必要である。

第４節　海士所在遺跡

調査期間　令和元年(2019)６月11日～20日

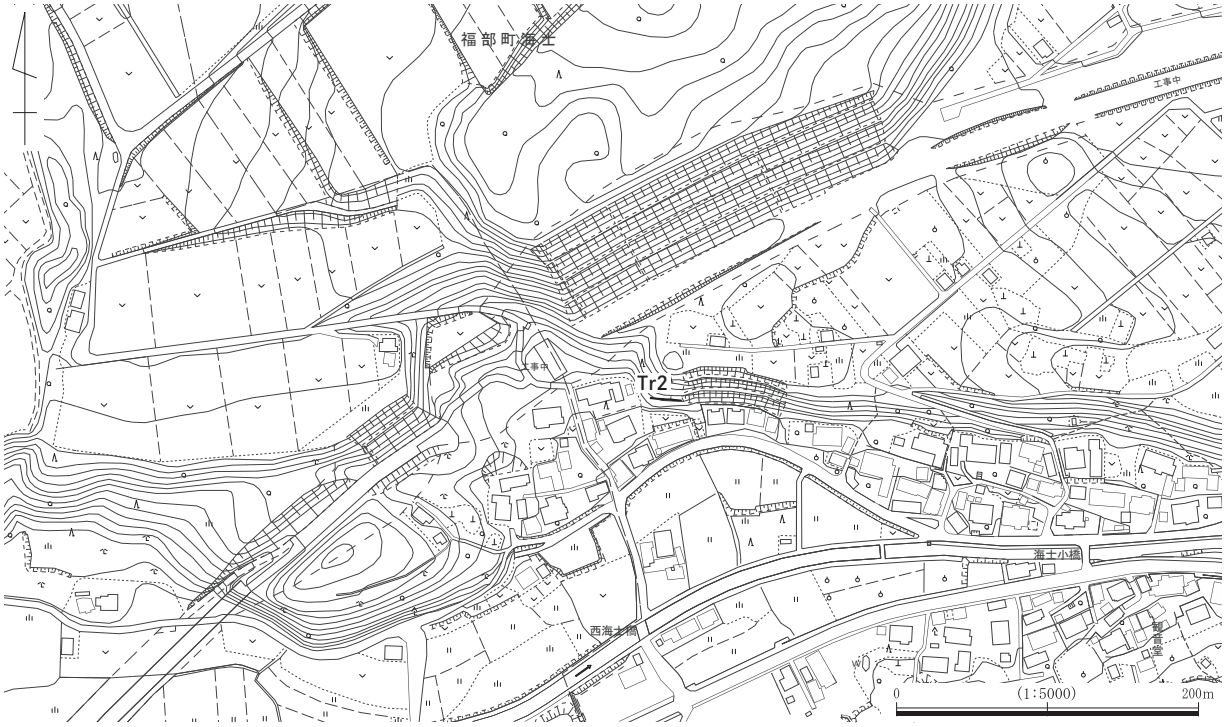
海士所在遺跡は鳥取市福部町海士に所在している。北には日本海の沿岸が広がり、南側には湯山池があったとされ、江戸時代以降の干拓で水田となり、現在はラグーン地形が広がっている。調査対象地は、東西に延びる山陰海岸国立公園の鳥取砂丘の東端部、但馬往来に沿って細長く形成された海士集落西端の微高地上に位置している。

今回の調査は、個人で耕作等に利用する溜池を掘削中に遺物が出土したとの届出があり、平成29(2017)年度に実施した試掘調査の追加調査である。調査対象地は福部町西海士に位置し、砂丘地裾付近の微高地上の北から南に下る緩斜面に作られた耕作地で2017年度行われた試掘調査地の北西約１ｍに1.3～1.5ｍ×21.20ｍのトレンチを設定した。

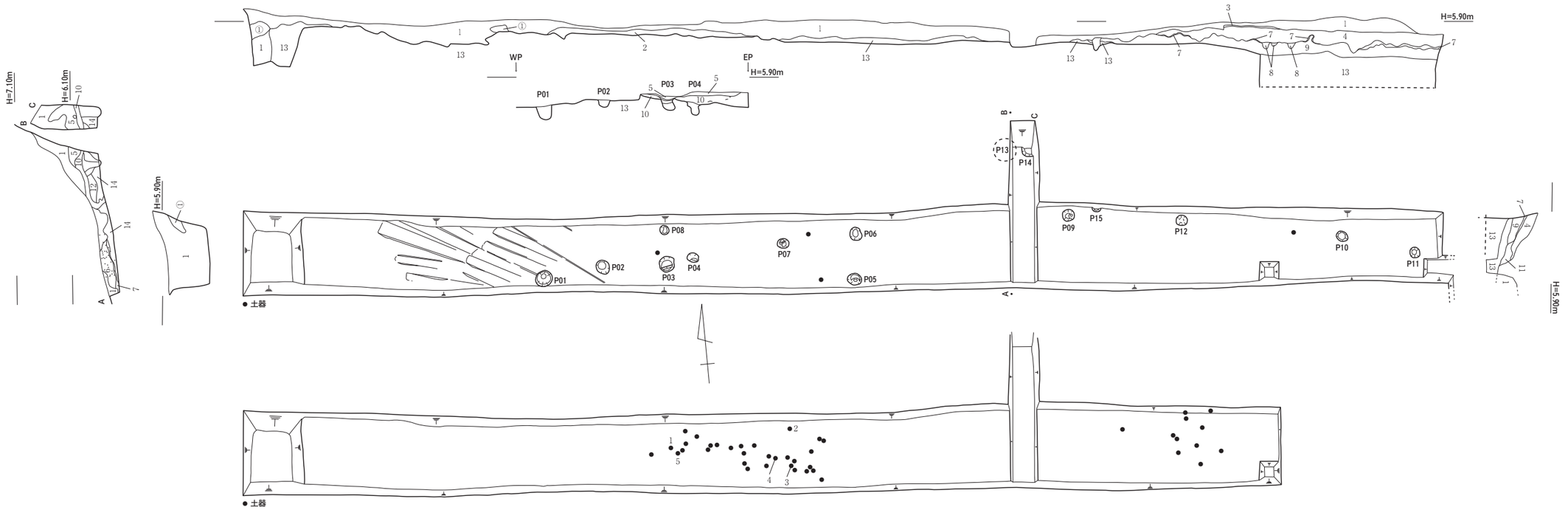
第２トレンチ(Tr2)　〔第12・13図、図版２・13〕

表土(砂層)は約５～40㎝の堆積がみられ、砂層除去面では第４・５・６層(黄褐色土ブロック・灰色土ブロックを含む黒褐色粘質土)を検出し土師器(壺・甕・底部糸切り)・須恵器等の遺物が包含される。調査地西側は後世の攪乱により地山を掘り込む重機の爪跡が顕著に残り、遺物を包含する黒褐色粘質土層は大きく削平されているものと思われる。この黒褐色粘質土(遺物包含層①)下位には、サブトレンチ東側で第７層(鉄分沈着層―褐鉄鉱)が鬼板状に広がりを持つ。第７層下位は灰色土ブロックを含む第９層(褐色粘質土)・第10層(黒褐色粘質土)が約８～20㎝の厚みで堆積し、土師器(甕(第13図２・３))・椀(第13図５)・高坏)、須恵器(椀・蓋(第13図１))・甕・坏(第13図４))、鉄製品(鎌(第13図６))等が含まれる(遺物包含層②)。以下は地山(明褐色粘質土)が続く。

遺構は、ピット15基を検出した。第10層下面からの掘り込みでピット４基を検出したが、他は後世の掘削により地山からの検出となるため遺構検出面の層序関係を確認することは出来なかった。検出したピットには軸の方向性が見られ建物等の可能性も考えられたが調査区外へと延びるものと思われ、その性格は不明である。



第11図　海士所在遺跡　調査トレンチ位置図



1.にぶい黄橙色　10YR7/4(砂層)
2.にぶい黄橙色　10YR7/4(砂層　1より暗)
3.黒褐色粘質土　10YR3/2
4.黒褐色粘質土　10YR2/2
5.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄色土ブロック、土器を含む−遺物包含層①)
6.黒褐色粘質土　10YR2/2(灰色土ブロックを含む、土器を多く含む−遺物包含層②)
7.明黄褐色粘質土　10YR6/8(鉄分沈着層)
8.にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(明黄褐色土ブロックと混在)
9.褐色粘質土　7.5YR4/6(灰色土ブロックを含む)
10.黒褐色粘質土　10YR2/2(灰色土ブロックを含む、土器を多く含む−遺物包含層)
11.褐色粘質土　7.5YR4/6(黄褐色土ブロックを含む)
12.にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(明黄褐色ブロックと混在)
13.明褐色粘質土　7.5YR5/6(地山　ブロック状に砂層に入る)
14.褐色粘質土　7.5YR4/6

P01.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土ブロックを多く含む)

P02.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土ブロックを含む)
2.黒褐色粘質土　10YR2/2(黄褐色土ブロックを多く含む)

P03.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2
2.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土ブロックを多く含む)
3.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土地山ブロックを多く含む)

P04.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土地山ブロック・灰色土ブロックを多く含む)

P05.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土地山ブロックを僅かに含む)
2.黄褐色粘質土　10YR5/8
3.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土ブロックを多く含む)

P06.
1.黒褐色粘質土　10YR3/2
2.黄褐色粘質土　10YR5/8
3.明褐色粘質土　7.5YR5/6(地山)

P07.
1.黒褐色粘質土　10YR2/3

P08.
1.黒褐色粘質土　10YR2/3
2.黄褐色粘質土　10YR5/8

P09.
1.黒褐色粘質土　10YR2/3(黄褐色土ブロックを含む)
2.黒褐色粘質土　10YR2/3(黄褐色土ブロックを僅かに含む)
3.黄褐色粘質土　10YR5/8
4.黄褐色粘質土　10YR5/8

P10.
1.黒褐色粘質土　10YR2/2

P11.
1.黒褐色粘質土　10YR2/2

P12.
1.黒褐色粘質土　10YR2/2

0　(1:80)　2m

第12図　海士所在遺跡　第２トレンチ実測図

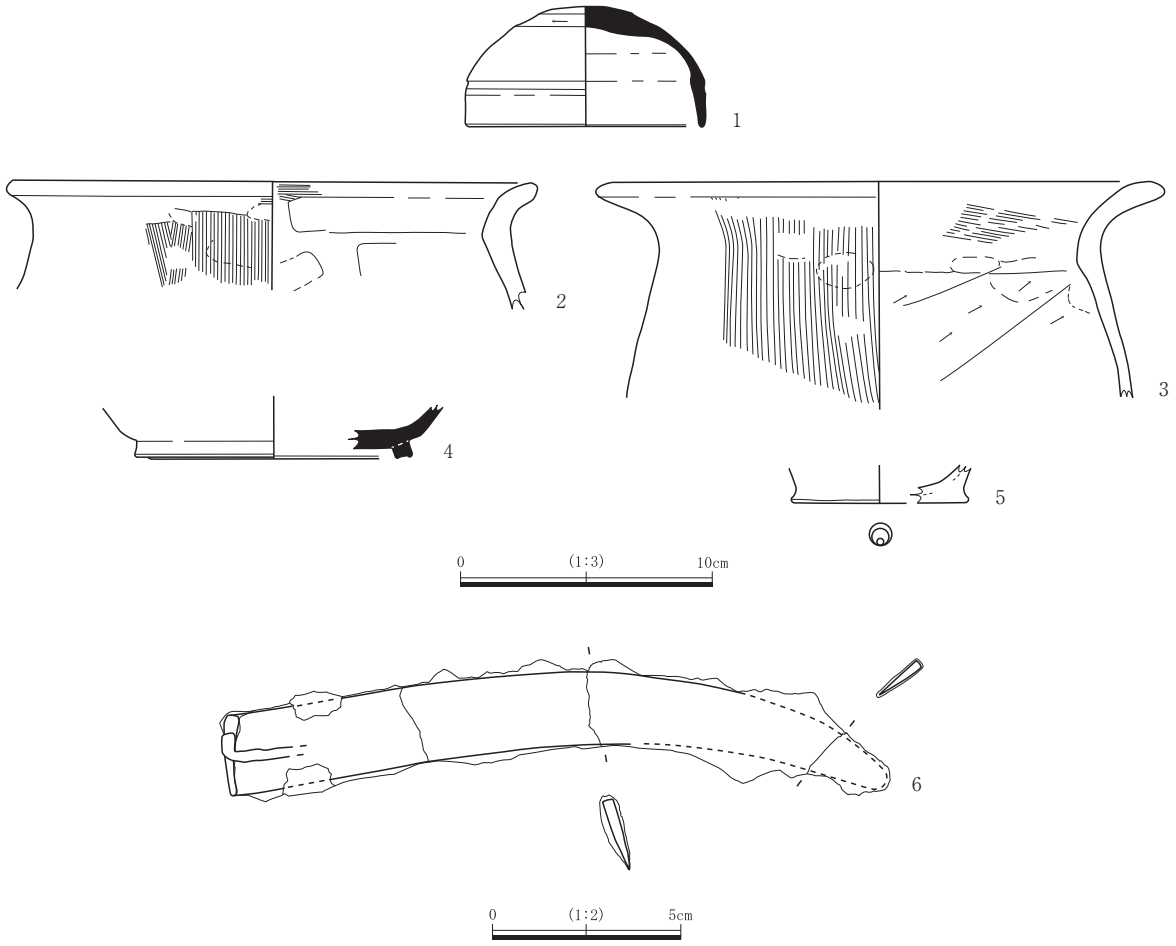
小結

以上、平成29年度と令和元年度に、福部町海士集落の砂丘後背に広がる微高地の遺構・遺物の有無確認のための試掘調査を実施した。多くが遺物包含層からの出土であるが、遺物数は両年度を合わせてコンテナ１箱分(38×59×20㎝)である。さらに、遺構が確認されたことから、この調査対象地周辺には、古墳時代後期から古代を中心とする遺跡が広がる可能性が想定される。

調査地の周辺では旧石器時代の遺構・遺物は確認されていないが、調査地の東西には鳥取県の縄文遺跡を代表する栗谷遺跡と直浪遺跡などの集落遺跡が展開している。さらに、南側の丘陵上には海士古墳群が展開し、墳長約37.5mの前方後円墳である海士25号墳が築造されている。今後も調査対象地周辺の開発工事等にあたっては、きめの細かい確認調査が必要であると言える。

参考文献

福部町教育委員会『栗谷遺跡発掘調査報告書Ⅰ』1988年
近藤義郎『前方後円墳集成 中国四国編』1991年
鳥取県『新鳥取県史 考古１ 旧石器・縄文・弥生時代』2017年
鳥取市教育委員会『平成31/令和元(2019)年度鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』2020年



第13図　海士所在遺跡　出土遺物実測図

第５節　佐貫所在遺跡

調査期間　令和２年(2020)１月14日～２月13日

佐貫所在遺跡は鳥取市河原町佐貫に所在する。讃岐小学校背後の独立丘陵(標高98m)北西裾に通る農道脇の水田および畑地に所在する。調査地周辺には、平成24(2021)年に発掘調査が行われ溝状遺構から弥生時代中期の土器や土師器・陶磁器が出土した佐貫山ノ後遺跡、段丘状の果樹園内に遺物散布地である佐貫遺跡、横穴式石室を主体とする須恵器や鉄製品、馬具などが出土している佐貫古墳群７基が点在する。

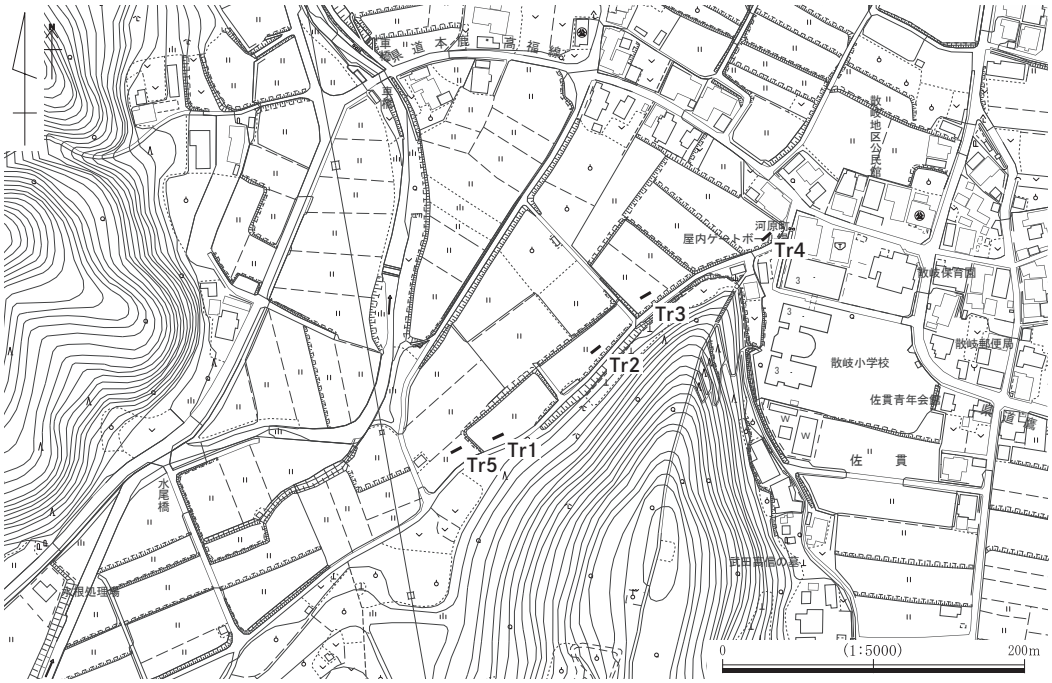
今回の調査は県道本鹿高福線(佐貫工区)道路改良事業に伴うもので、事業計画の路線上の水田部に２×８ｍの試掘トレンチを５ヶ所設定した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第15図、図版３〕

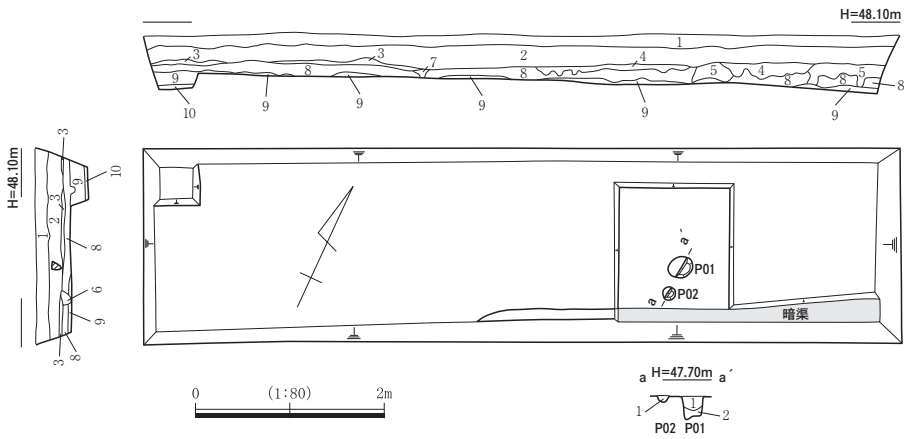
第１トレンチは丘陵北西裾部の水田部、現地標高47.94～47.97ｍの畑地に、段丘の傾斜に対し直交方向の東西軸をとる幅２ｍ、長さ８ｍの第１トレンチ(Ｔｒ１)を設定した。表土の第１層黒褐色粘質土は耕作土、第２層締まった黒褐色粘質土は床土、第３層黒色粘質土および第４・５層黒褐色粘質土は遺物包含層と考えられる。第３層下の第６・７層は平面で確認できなかったが、ピットの可能性がある。第８・９･10層は地山とみられ、特に遺構基盤層となる第８層は黄褐色土に黒褐色の沈着がみられる。トレンチ東南寄りで第８層上面よりピットP01・P02を検出し、半裁した。P01は径23㎝、深さ24㎝を測りしっかりした掘り込みである。埋土は２層に分かれる。P02は径13㎝、深さ6㎝を測る。遺物は第１・２層に集中し、土器や陶磁器片、ビー玉なども出土している。第３層では土師器細片が出土している。

第２トレンチ(Tr2)　〔第16図、図版３〕

第２トレンチは丘陵北裾部の水田部、現地標高47.70～47.72ｍの水田に、段丘の傾斜に対し直交方向の東西軸をとる幅２ｍ、長さ８ｍのＴｒ１を設定した。表土の第１層黒褐色粘質土は耕作土、第２層および第３～８層締まった灰褐色粘質土は床土である。第９層黒色粘質土は遺物包含層と考えられるが、トレンチ西側を中心に重機のキャタピラによる攪乱を受けており、第13･14層と層序はそのままながら原形を保っていない可能性が大きい。第９層下の第10･11･12層、P01、P02についてはピットの可能性



第14図　佐貫所在遺跡　調査トレンチ位置図

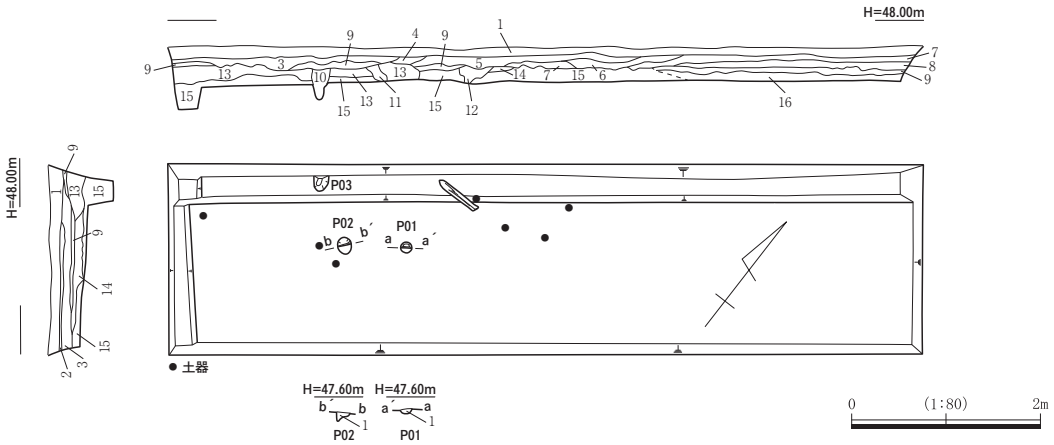


1.黒褐色粘質土　10YR3/1(表土・耕作土　締まり弱い)
2.黒褐色粘質土　10YR3/2(床土　僅かに2～4㎜大の橙色土ブロック・礫を含む　締まる　炭片を含む)
3.黒色粘質土　10YR2/1(1～4㎜大の橙色土ブロック・礫を含む　粘質強)
4.黒褐色粘質土　10YR2/2(3より褐色かかる)
5.黒褐色粘質土　10YR3/2(黒色かかる　崩れた橙色土ブロックを含む　6・7に似る　締まりやや弱い)
6.黒褐色粘質土　10YR2/2(炭片を含む　崩れた橙色土ブロックを含む　締まりやや弱い)
7.黒色粘質土　10YR2/2(炭片を含む　僅かに2～4㎜大の橙色土ブロックを含む　締まりやや弱い)
8.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(僅かに2～4㎜大の橙色土ブロックを含む　締まる　全体に黒褐色の沈着)
9.明黄褐色粘質土　10YR6/6(上面に僅かに褐色の沈着　地山)
10.にぶい黄橙色粘質土　10YR7/4(9より黄色かかる　地山)

P01
1.黒褐色粘質土　10YR3/1
2.黒褐色粘質土　10YR3/2(0.3～1㎝大の黄褐色土ブロックを含む)

P02
1.黒褐色粘質土　10YR3/1(僅かに0.3㎝大の黄褐色土ブロックを含む)

第15図　佐貫所在遺跡　第１トレンチ実測図



1.黒褐色粘質土　10YR3/1(表土・耕作土　締まり弱い)
2.黒褐色粘質土　10YR3/1(1より暗　3㎜大の黄褐色土ブロックを含む)
3.褐灰色粘質土　10YR4/1(炭片を含む　0.2～2㎝大の明黄褐色土ブロックを含む)
4.褐灰色粘質土　10YR5/1(炭片を含む　締まり弱い)
5.褐灰色粘質土　10YR5/1(炭片を含む　4・6より締まり弱い)
6.褐灰色粘質土　10YR4/1(黒褐色土を筋状に含む)
7.褐灰色粘質土　10YR5/1(炭片を含む　黒褐色土をブロック状に含む　1.5㎝大の明黄褐色土ブロックを含む)
8.褐灰色粘質土　10YR5/1(7より明で粘質)
9.黒色粘質土　10YR2/1(0.5～1㎝大の明黄褐色土ブロックを含む)
10.黒褐色粘質土　10YR3/1(3～5㎝大の明黄褐色土ブロックを含む)
11.黒褐色粘質土　10YR3/1(2㎝大の崩れた明黄褐色土ブロックを含む)
12.黒褐色粘質土　10YR3/1(1㎝大の崩れた明黄褐色土ブロックを含む)
13.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(1～5㎝大の明黄褐色土ブロックを含む)
14.明黄褐色粘質土　10YR7/6(黒褐色の沈着あり　黄色かかる)
15.明黄褐色粘質土　10YR7/6(シルト混じり　地山)
16.黄橙色粘質土　10YR7/8(15より橙色かかり粘質　地山)

P01
1.黒褐色粘質土　10YR3/1(0.3㎝大の黄褐色土ブロックを含む)

P02
1.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土混じり)

第16図　佐貫所在遺跡　第２トレンチ実測図

があるが、形状が不安定で明確でない。第15･16層は明らかに地山であり、僅かながら北東方向への傾斜が確認される。遺物は第１層、第３～７層の耕作土や床土から、土器や陶磁器片、鉄製品、板状木製品が出土している。

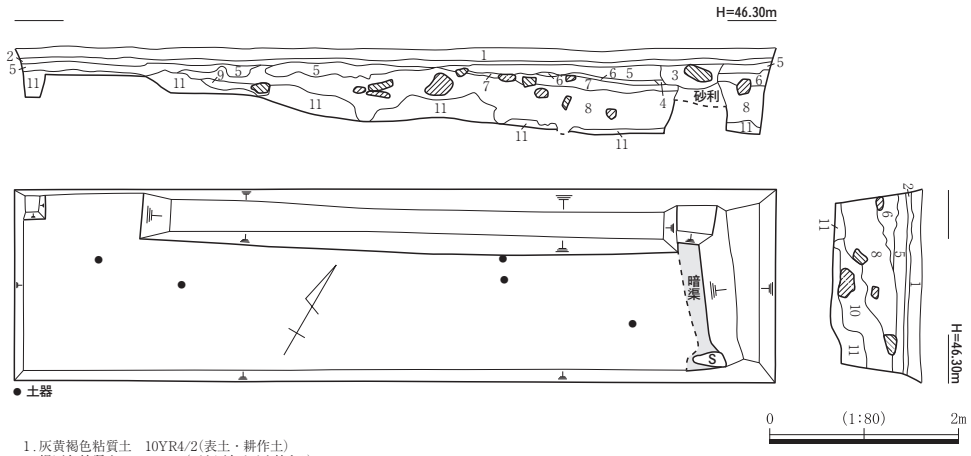
第３トレンチ(Tr3)　〔第17図、図版３〕

第３トレンチは丘陵北裾部の水田部、現地標高45.98～46.02ｍの水田に、段丘の傾斜に対し直交方向

の東西軸をとる幅２ｍ、長さ８ｍのＴｒ３を設定した。表土の第１層灰黄褐色粘質土は耕作土、第２層および第５層締まった灰黄褐色粘質土は床土である。トレンチ東側で検出した暗渠は第５層を掘り込む。第２・５層下で重機キャタピラ痕がトレンチ全体で観察された。北壁面の断面状況から、水田面を平坦にするため、トレンチ西側の高位側では、Ｔｒ１・２で確認された黒色の遺物包含層およびその下層の黒褐色沈着がある軟質な地山を削平し、礫とともにトレンチ北東の低位側へ埋め立てた状況が認められる。遺物は第１層耕作土、第２・５層床土から、僅かながら土器や陶磁器片が出土している。

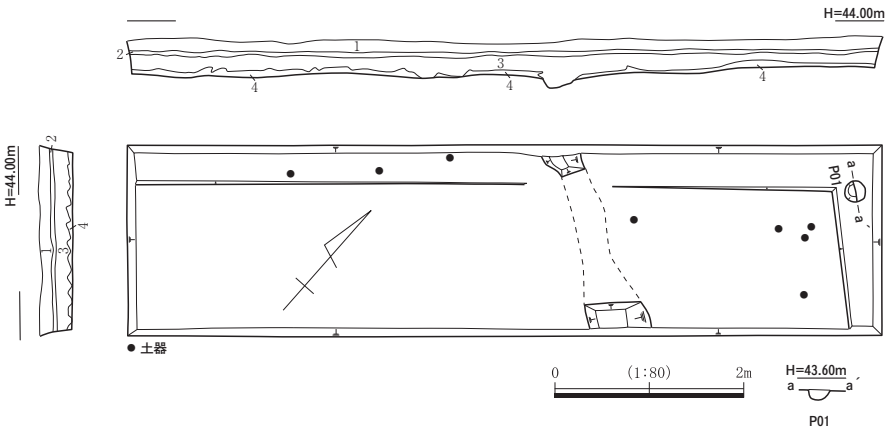
第４トレンチ(Tr4)　〔第18図、図版３〕

第４トレンチは県道231号線沿い散岐地区公民館南西に位置し、Ｔｒ１～５のうち、郵便局や小学校など散岐地域中心域に最も近接するトレンチである。北西方向へ舌状に伸びる丘陵裾の水田部、現地標高43.76～43.83mの水田に、段丘の傾斜に対し直交方向の東西軸をとる幅２ｍ、長さ８ｍのＴｒ４を設定した。表土の第１層灰黄褐色粘質土は耕作土、第２層は床土、さらに締まった第３層にぶい黄褐色粘質土は大きめの地山ブロックを含む床土、埋立て土である。第３層下は第４層黄橙色の地山面で、トレンチ



1.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(表土・耕作土)
2.褐灰色粘質土　10YR5/1(1より灰色かかり締まる)
3.灰黄褐色粘質土　10YR5/2(締まり弱い　黄褐色土・黒色土をブロック状に含む　暗渠埋土)
4.灰黄褐色粘質土　10YR5/2(締まる　黄褐色土の含みなし)
5.灰黄褐色粘質土　10YR5/2(2よりシルト質で締まる　0.3cm大の黄褐色土ブロックを若干含む)
6.黒褐色粘質土　10YR3/2(黄褐色土を筋状に含む)
7.褐灰色粘質土　10YR4/1(黒色土混じり　3～10cm大の礫を含む)
8.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(黒色土・黄褐色土ブロックを部分的に含む　締まりやや弱い　5～15cm大の礫を含む)
9.黒褐色粘質土　10YR3/1(黄橙色かかる)
10.黒褐色粘質土　10YR3/1(8より締まる　黄褐色土ブロックを筋状に含む　15cm大の礫あり)
11.黄橙色粘質土　10YR7/8(黄色かかる　地山)

第17図　佐貫所在遺跡　第３トレンチ実測図



1.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(表土・耕作土)
2.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3(僅かに0.3～1cm大の明黄褐色土ブロックを含む　締まる)
3.にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(2より締まる　0.5～8cm大の明黄褐色土ブロックを含む　黒褐色土を部分的に含む)
4.黄橙色粘質土　10YR7/8(3僅かに砂粒混じり　地山)

P01
1.黒褐色粘質土　10YR3/1(0.1～0.3cm大の黄褐色土ブロック・礫を含む)

第18図　佐貫所在遺跡　第４トレンチ実測図

全体に重機のキャタピラ痕の激しいくい込みをはじめとする凹凸が観察された。トレンチ東端では地山面はやや平滑で、北東隅でP01を検出した。P01は径21㎝、深さ10㎝を測り比較的しっかりした掘り込みである。遺物は第１層耕作土、第２・３層床土から、僅かながら土器や陶磁器片、瓦片、プラスチック片などが出土している。

第５トレンチ(Tr5)　〔第19図、図版４〕

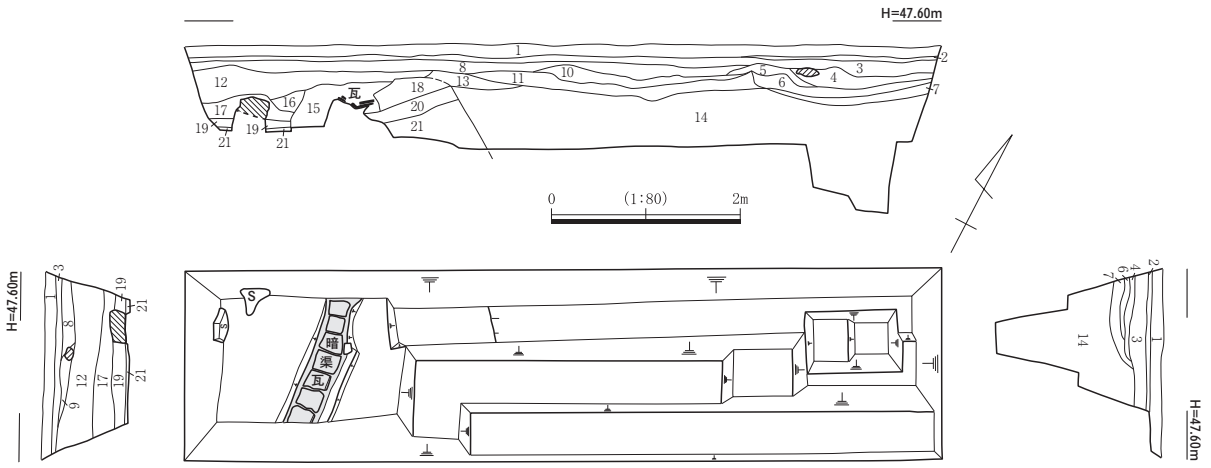
第５トレンチは丘陵北西裾部、現地標高47.35ｍの旧水田に、段丘の傾斜に対し直交方向の東西軸をとる幅２ｍ、長さ８ｍのＴｒ５を設定した。表土の第１層灰黄褐色粘質土は耕作土、第２、第３層褐灰色粘質土は床土、第４～11・13・14・17層は埋め立て土、第15・16・18層は瓦を用いた暗渠埋土である。30㎝大の礫を含む第19層締まったにぶい黄褐色礫層の直下の第21層明緑灰色粘土は所謂地山で、黄色の沈着がみられる第20層灰白色粘土も地山の可能性がある。トレンチ西側の標高46.50～46.78ｍで検出された地山はトレンチ中央付近で急激に東側へ落ち込んでおり、トレンチ東端で標高45.57ｍまで掘り下げたが地山は確認されなかった。またトレンチ西側の地山面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。遺物は第１～３層に集中し、第８～11層ではビニール片、ガラス片、陶磁器片が出土している。なお、地山上層の第19層砂利層で叩き目のある須恵器体部片が出土している。

小結

以上、今回の調査対象地のうち、第１トレンチと第２トレンチ、第４トレンチから複数のピット状の遺構を検出し土師器などの遺物が出土した。この他にも、調査対象地南西側を平成24(2012)年に実施された佐貫山ノ後遺跡の発掘調査で中世と考えられる溝状遺構が検出されている。以上のことから、独立丘陵の北西側の地域には遺構や遺物が遺存している可能性が考えられ、今後の開発工事等にあたっては十分注意が必要である。

参考文献

財団法人鳥取市文化財団『佐貫山ノ後遺跡』2012年



1.灰黄褐色粘質土　10YR4/2(表土・耕作土)
2.褐灰色粘質土　10YR4/1(1よりシルト質　8より明　灰色かかる)
3.褐灰色粘質土　10YR4/1(0.3㎝大の黄褐色土ブロックを若干含む　締まる)
4.黒褐色粘質土　10YR3/2(1～3㎝大の黄橙色土ブロック・黒色土ブロックを含む)
5.黒褐色粘質土　10YR3/2(1～3㎝大の黄橙色土ブロックを含む)
6.明黄褐色粘質土　10YR6/8(黄橙色土ブロックに黒褐色土が僅かに混じる)
7.黒色粘質土　10YR2/1(1㎝大の黄褐色土ブロックを僅かに含む)
8.黒褐色粘質土　10YR3/1(0.3～5㎝大の黄褐色土ブロックを含む　締まる)
9.黒褐色粘質土　10YR3/1(崩れた黄褐色土ブロックを多く含む)
10.黒褐色粘質土　10YR3/2(にぶい黄橙色土ブロックを多く含む　締まる)
11.黒褐色粘質土　10YR3/1(2㎝大の灰黄褐色土ブロックを含む　黄褐色土ブロックの含みなし　締まる)
12.黒褐色粘質土　10YR3/2(崩れた黄褐色土ブロックを8・9より多く含む)
13.黒褐色粘質土　10YR3/2(3～4㎝大の均一な黄褐色土ブロックを多く含む　締まる)
14.明黄褐色粘質土　2.5Y7/6(3～10㎝大の明黄褐色土ブロック　黒褐色土を含む　締まる)
15.黒褐色粘質土　10YR2/2(黄褐色土ブロックの含みごく僅か　締まり弱い　暗渠埋土)
16.黒褐色粘質土　10YR2/2(15より締まる)
17.黒褐色粘質土　10YR3/2(2～3㎝大の礫を若干含む　締まり弱いが粘質強)
18.黒褐色粘質土　10YR3/1(1～10㎝大の黄褐色土ブロックを含む　よく締まる)
19.にぶい黄褐色礫　10YR4/3(0.3～5㎝大の砂礫　黒褐色土を含む　締まる)
20.灰白色粘土　5Y7/1(黄色の沈着あり　黒褐色土をブロック状に含む　締まる)
21.明緑灰色粘土　10GY7/1(シルト混じり　地山)

第19図　佐貫所在遺跡　第５トレンチ実測図

第６節　青谷上寺地遺跡

調査期間　令和２年(2020)２月４日～２月14日・４月23日～５月８日

今回の調査対象地である国史跡『青谷上寺地遺跡』は、鳥取市西部の鳥取市青谷町・吉川に所在し、JA青谷駅から南西約300m、海岸線から南へ約1.2km離れた青谷平野の西寄りに位置している。

青谷上寺地遺跡は縄文時代から古代にかけての遺構、遺物が確認される複合遺跡として知られ、弥生時代から古墳時代前期初頭が集落遺跡の最盛期と考えられている。弥生人の脳をはじめとする多彩な遺物が出土することから「弥生の地下博物館」とも呼ばれ、土器や木器、石器、骨角器などをはじめとする多様な生活用具が密に出土するほか、木製容器や骨角器、玉類などの素材や未成品なども多数存在し、製作に使用した鉄器などの工具類の存在も確認されていることから、このエリアで活発な生産活動が行われていたことがわかっている。

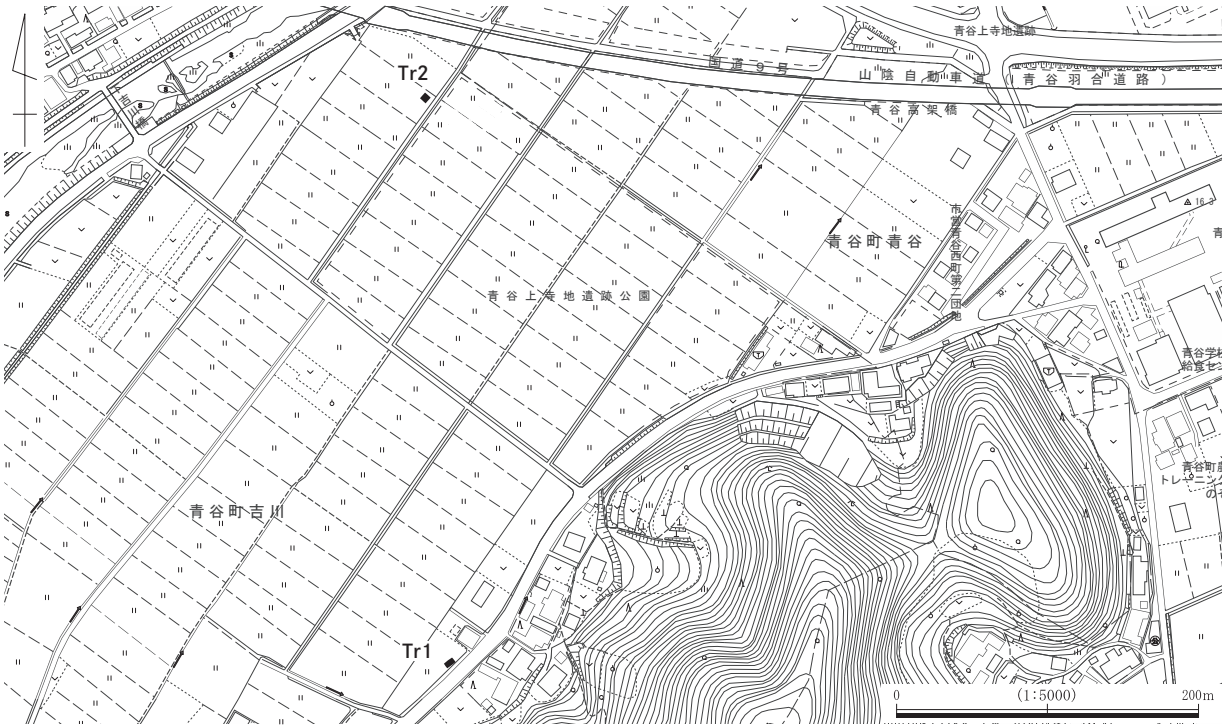
律令体制下、青谷町は因幡国気多郡に属し伯耆国境に位置している。この時代、調査対象地の周辺は平野が広がっていたと想定されており、この平野部には古代の耕作遺構等が遺存すると想定されている。また、古代山陰道が東西方向に走っていると考えられ、青谷平野の古代山陰道については、近年の発掘調査や研究の経過によって、青谷上寺地遺跡や青谷横木遺跡、善田傍示ヶ崎遺跡で道路遺構が検出され、丘陵部で養郷遺跡群(養郷宮之脇遺跡・養郷新林遺跡・養郷狐谷遺跡)のつづら折り道路や青谷大平遺跡の切土(オープンカット)工法などの大規模な道路遺構が検出されている。

今回の調査は、令和元(2019)年度に個人住宅建設に伴う試掘調査と令和２(2020)年度に青谷上寺地遺跡史跡整備事業に伴う調査の２回実施している。令和元年度は、ＪＲ山陰本線青谷駅の南西約１km、ＪＡ鳥取いなば青谷ライスセンターの所在する小谷から平野につながる谷口部分に位置し、令和２年度は、ＪＲ山陰本線青谷駅の南西約600m、市立青谷中学校の西約400mの勝部川に近い平野部に位置している。

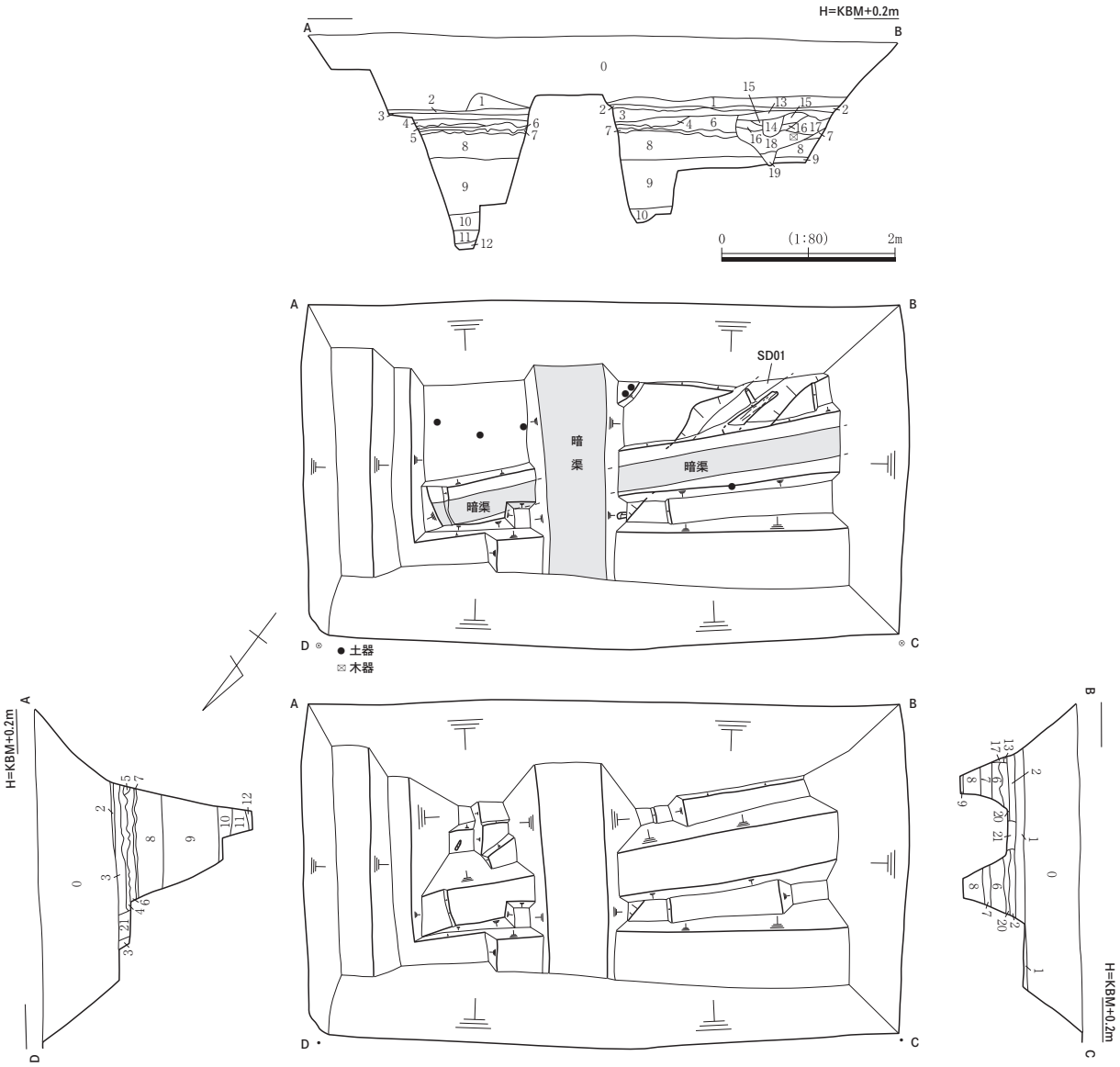
令和元(2019)年度の調査

第１トレンチ(Tr1)　〔第21・23図、図版４・13〕

調査対象地は丘陵裾の小谷口の北東、丘陵裾から平野部となった旧水田の埋め立て盛土整地部にあた



第20図　青谷上寺地遺跡　調査トレンチ位置図

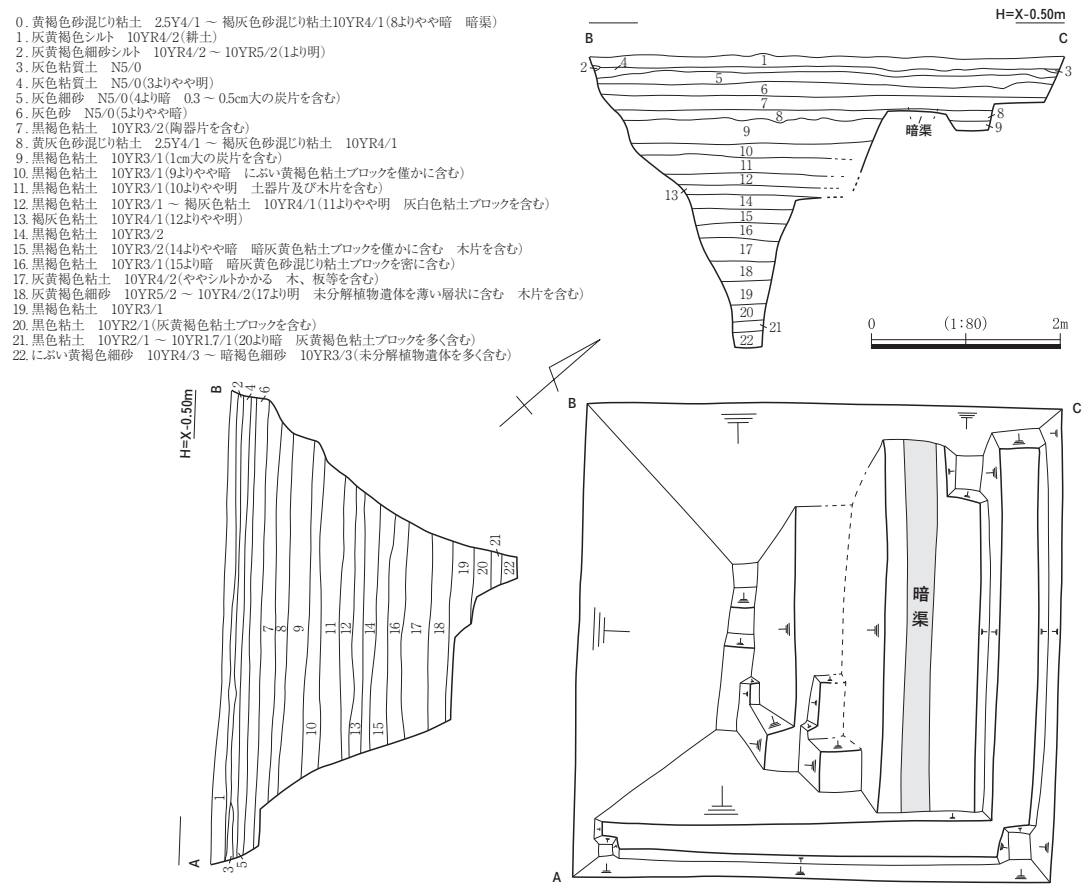


0.にぶい黄褐色真砂土　10YR5/4(砕石ガラを含む　客土)
1.暗褐色粘土　10YR3/3
2.黒褐色粘土　10YR3/1
3.黒褐色粘土　10YR3/2(2より明)
4.黒褐色粘土　10YR3/2(3よりやや明るく、やや灰黄色かかる)
5.灰黄褐色粘土　10YR4/2
6.褐灰色粘土　10YR4/1
7.黒褐色粘土　10YR2/2(にぶい黄褐色粘土・礫を多く含む)
8.黒褐色粘土　10YR2/2(7よりやや明)
9.黒褐色粘土　10YR3/2～暗褐色粘土　10YR3/3(8より明　未分解植物遺体を含む)
10.黒褐色粘土　10YR2/1
11.褐灰色粘土　10YR4/1
12.褐灰色粘土　10YR6/1(11より明)
13.黒褐色粘質土　10YR3/1(2よりやや明るく、3よりやや褐灰色かかる　やや砂質かかる)
14.黄灰色粘土　2.5Y4/1
15.黄灰色粘土　2.5Y5/1(14より明)
16.黄灰色粘土　2.5Y5/1(14より明るく、やや黄色かかる)
17.黄灰色粘土　2.5Y5/1～暗灰黄色粘土　2.5Y5/2(15・16よりやや黄色かかる)
18.黄灰色粘土　2.5Y4/1(14～17より暗)
19.黄灰色粘土　2.5Y4/1(18よりやや暗く、あまり締まっていない)
20.褐灰色細砂　10YR5/1と灰黄褐色細砂　10YR6/2のラミナ(混合)
21.黒褐色粘土　2.5Y3/1(暗渠埋土)

第21図　青谷上寺地遺跡　第１トレンチ実測図

る。当初から１m近くの客土が見込まれたため、客土部分の除去を重機で行い、その後人力掘削を行った。調査面積は3.85×6.6mの26.18㎡で、現況の客土上面から最深2.5m付近まで掘下げを行った。

調査の結果、約0.9m程度の客土直下に整地時の暗渠が認められ、旧耕土とみられる部分的に残る第１層(暗褐色粘土)下にこぶし大の礫を詰めた暗渠が認められた。厚さ20㎝程度の黒褐色粘土(第２・３)層下面(現地表面下約0.95m)が遺構面で幅約0.6m、長さ2.8m以上、深さ約0.5mの南北方向に走る溝状遺構(SD01)を検出した。西側肩部付近からは径15㎝程度の自然木が杭止めされたような状態で出土している。この遺構面下の黒褐色粘土(第３・４層)から板状の小木片や須恵器片が、また、褐灰色粘土(第６層)から近世以降とみられる陶器片が出土していることから、SD01の時期は近世以降と考えられる。この第６層の下には礫を多く含んだ厚さ４～10㎝程度の黒褐色粘土(第７層／地表面下約1.1m)が続き、



第22図　青谷上寺地遺跡　第２トレンチ実測図

以下順層でそれぞれ木片が検出された黒褐色粘土(第８～10層)、褐灰色粘土(第11・12層)が堆積する。なお、現代の暗渠とSD01以外に明瞭な遺構は検出されておらず、遺物もSD01の木器以外には上述の第４層の須恵器片と第６層の陶器片のほか第３層の板状小木片、第４・８～10層の木片が検出された。また、調査対象地から出土した土師器の杯身を図化した(第23図１)。(１)は摩滅が顕著であるが、底面に糸切りがみられ、赤彩が施されている可能性が推察される。

令和２(2020)年度の調査

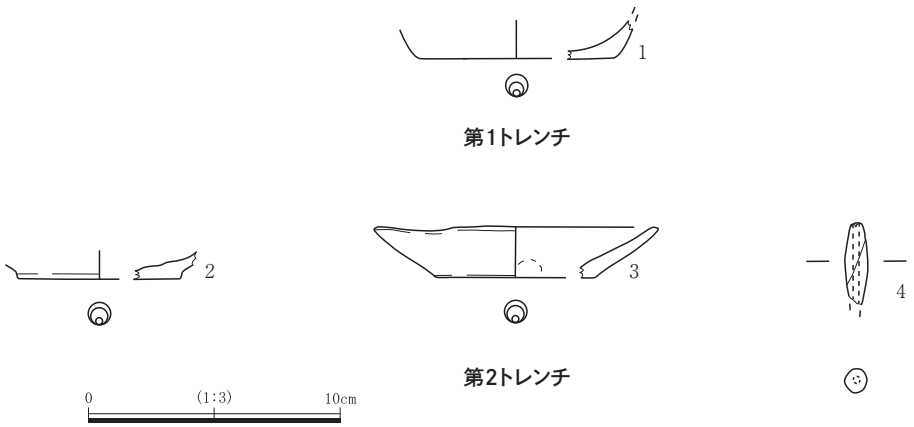
第２トレンチ(Tr2)

調査対象地は中国山〔第22・23図、図版４・13・14〕　　地から北に派生した山地から日本海に向けて北流する勝部川によって形成された小谷平野が小規模な沖積平野である青谷平野に接続する付近にあたり、現在は地表面標高約３m程度の水田耕作地が広がる地域である。調査面積は５×５mの25㎡で現地表面から最深3.1m付近まで基本的に１層ごとの掘下げと平面精査を行った。

調査の結果、地表面下60cm程度の暗渠検出面(第８層：黄灰色～褐灰色の砂混じり粘土上面)以上は出土陶磁器類等から現代及びそれに近い時期の耕土・客土と考えられる。その下の第８層、９層(黒褐色粘土)からも擂鉢等の陶器片が検出され、地表面下0.9～１m強の第10層(黒褐色粘土)からは中世とみられる瓦質土器片や須恵器片や薄板状木製品が出土している。それに続く地表面下1.1～1.3m程度の第11層(黒褐色粘土)からは古代後半頃とみられる土師器皿片が木片とともに検出されている。

地表面下1.6～1.8m付近の第15層(黒褐色粘土)から古墳時代中期頃とみられる土師器甕片が出土し、その下の第16層(黒褐色粘土)には暗灰黄色の砂混じり粘土ブロックが密に含まれており人為的な撹拌の可能性も考えられる。またその下の第17層(灰黄褐色粘土)からは板状の木製品が出土している。

地表面下2.2～2.4m程度には未分解植物遺体を薄い層状に含むことなどから自然堆積層とみられる第



第23図　青谷上寺地遺跡　出土遺物実測図

18層(灰黄褐色細砂)が堆積する。その下の地表面下2.6～2.9m付近には黒色粘土層(第20、21層)が認められ、特に地表面下2.8m～2.9m程度の第21層には灰黄褐色粘土ブロックが多く含まれる。地表面下約2.9m以下には未分解植物遺体を多く含んで自然堆積層とみられる第22層(にぶい黄褐色細砂)が続く。このうち第21層については、2002年度に青谷町教育委員会が本トレンチの南東約130mで実施した調査時の第３トレンチ第10層(黒色粘土:褐色ブロックを多く含む)が非常に類似しているとの教示を得た。この第10層についてはプラントオパール分析が実施されており、それによるとイネのプラントオパールは検出されておらず、本21層も同様の可能性が考えられる。

堆積層は基本的に順層でほぼ乱れがなく出土遺物が少ないもの地表面下60～70㎝程度までは現代及びそれに近い時期、1.1～1.3m付近に古代～中世、1.6～1.8m付近に古墳時代の堆積層が遺存する可能性が考えられるが、それ以前に遡る土器類は検出されておらずそれら以前の時期は不明である。なお、調査対象地から出土した土師器の椀(第23図２)と皿(第23図３)、土製品の土錘(第23図４)を図化した。(２)は底端部に段を有し、底面は糸切りが施される。(３)は底面が糸切りで、立ち上がりは僅かに内湾する。(４)は管状を呈する。

小結

今回の調査では、令和元年度の調査で近世以降と考えられる溝状遺構が検出されたのみで、明瞭な遺構を示す変化は認められなかった。ただし、前述のとおり調査地周辺の平野部は古代の耕作遺構等が遺存する可能性が想定される地域である。さらに時代を遡ると、縄文時代から弥生時代前期頃には調査対象地の周辺は、氾濫平野となり三角州が発達すると想定され、この時期から人々の痕跡が顕著に確認される。また、調査対象地の東側丘陵上には古墳群が展開しており、今後も調査対象地周辺の開発等を行う際には注意が必要であると言える。

参考文献

㈲平凡社地方資料センター『鳥取県の地名』1992年
鳥取県埋蔵文化財センター『青谷上寺地遺跡13』2013年
鳥取県埋蔵文化財センター『青谷横木遺跡』2018年
鳥取県埋蔵文化財センター『青谷上寺地遺跡15』2020年
公益財団法人鳥取市文化財団『善田傍示ヶ崎遺跡』2022年

第７節　善田傍示ヶ崎遺跡

調査期間　令和２年(2020)１月20日～３月６日
令和３年(2021)３月11日～３月24日

今回の調査対象地である善田傍示ヶ崎遺跡は鳥取市青谷町善田に所在する。青谷町は鳥取県東部の西端に位置し、南部にそびえる飯盛山や鉢伏山などの標高500m以上の山地から日本海側に向かって標高300m前後の溶岩台地が延びている。この遺跡は町内北側の青谷平野を貫流する勝部川水系日置川の支流である露谷川下流域の善田集落北側、標高１～３m付近の水田地帯に展開している。

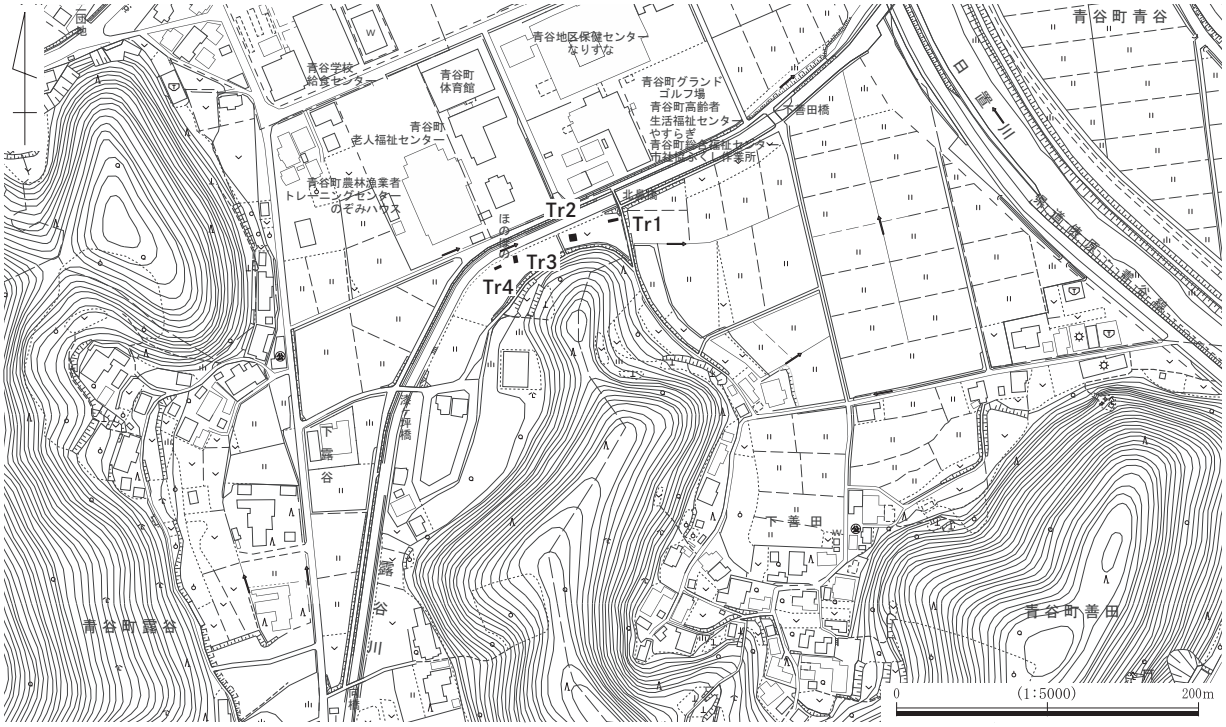
善田傍示ヶ崎遺跡は、既存調査で縄文時代後期から中世以降まで遺物包含層と土坑や溝、杭列等が検出され、人形や馬形、斎串等の祭祀具が多く出土することで知られていた。しかし、令和３年度に実施された発掘調査で古代山陰道と想定される道路遺構の盛土を確認され注目された。周辺には、「弥生の地下博物館」ともいわれる国史跡の『青谷上寺地遺跡』や条理遺構が検出された青谷横木遺跡が所在し、両遺跡からも古代山陰道とみられる道路遺構が検出されている。さらに、青谷平野周辺の丘陵部に所在する養郷遺跡群(養郷宮之脇遺跡・養郷新林遺跡・養郷狐谷遺跡)のつづら折り道路や青谷大平遺跡の切土(オープンカット)工法などの古代山陰道と想定される大規模な道路遺構が確認され、近年も調査・研究が進められている。

今回の調査は現在も続いている露谷川の河川改修によるもので、これまでの調査地の上流部分にあたる河川右岸の丘陵裾付近が対象となり、令和元(2019)年度に２ヶ所にトレンチを設定(Tr１・２)して調査を行い、令和２(2020)年度にはその上流部分にあたる河川右岸の丘陵裾付近にトレンチを２ヶ所設定(Tr３・４)して調査を行うこととなった。なお、調査は遺構・遺物の有無に主眼を置いて実施した。

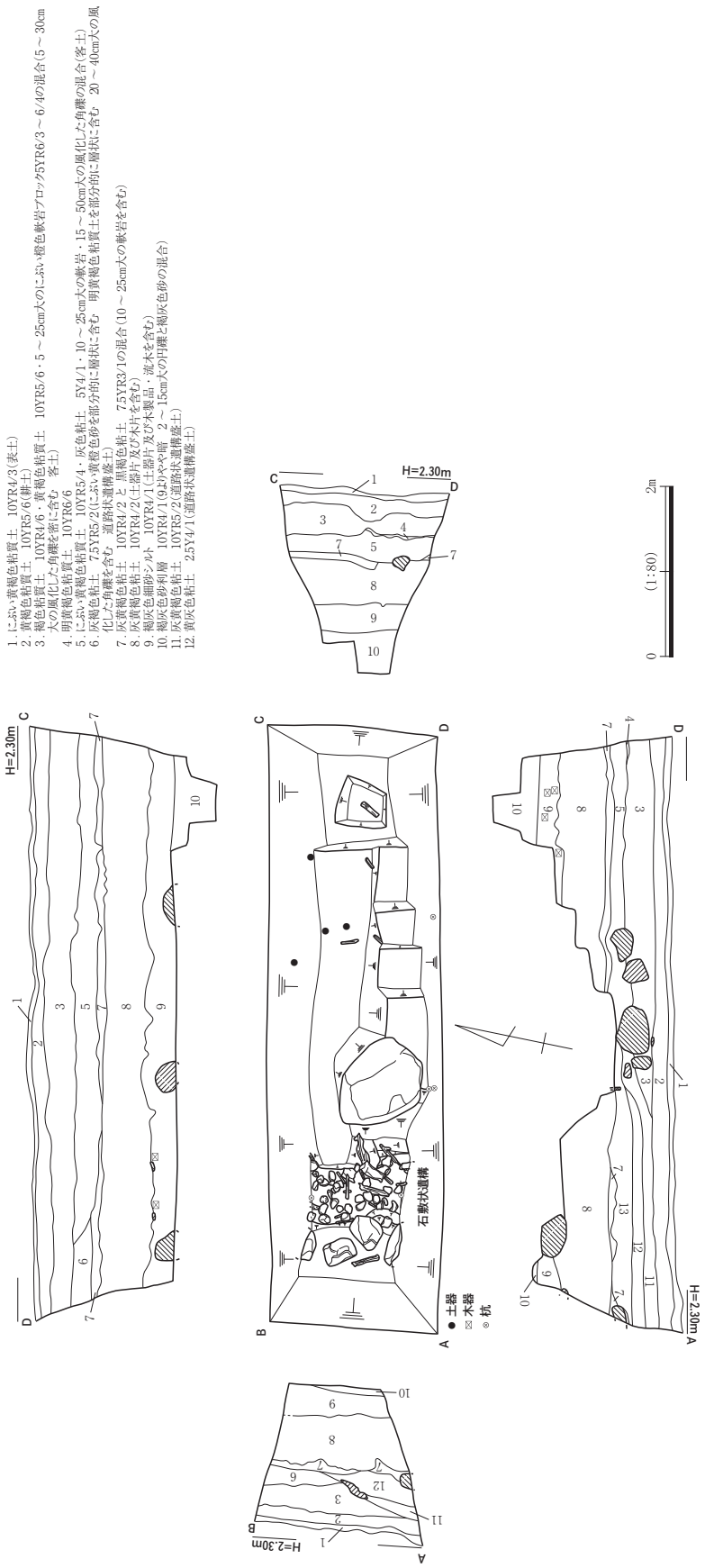
令和元(2019)年度の調査

第１トレンチ(Tr1)　〔第25・29図、図版４・14〕

調査対象地は2013(平成25)年度に実施された本発掘調査地と農道を挟んだ約６m以西が対象地で、南側には丘陵が迫り、現在は荒地となっている。調査地の標高は約2.2mで、河川に平行で東西方向に長い2.0



第24図　善田傍示ヶ崎遺跡　調査トレンチ位置図



第25図　善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ実測図

×7.0mのトレンチを設定し、湧水量が多くなる標高0.0m付近まで掘下げを行った。

調査の結果、厚さ約５㎝の現在の表土（第１層）下には厚さ約20㎝の旧耕土とみられる黄褐色粘質土（第２層）が続き、その除去面が第１遺構面と考えられる。標高は２m弱で、断面観察ではトレンチの西側で北西隅付近から南壁中央付近にかけて西から東に40～50㎝程度下る傾斜が想定され、盛土とみられる風化した角礫等を含む灰褐色粘土（第６層）や灰黄褐色・黄灰色・黒褐色～黒色・黒褐色～褐灰色の各粘土層（第11～14層）が堆積する。これらの堆積土上にはかぶるように陶磁器類や瓦片を包含した客土とみられる褐色粘質土・黄褐色粘質土・にぶい橙色軟岩ブロックの混合層（第３層）やにぶい黄褐色粘質土・灰色粘土・10～25㎝大の軟岩ブロック・15～50㎝大の角礫ブロックの混合層（第５層）が堆積する。調査地の100m程度南東で鳥取県が実施中の古代山陰道確認のための試掘調査状況等と合わせて、本遺構は道路状遺構の一部の可能性が考えられる。

これらの堆積層の下には、標高1.3～1.5m付近に厚さ約10㎝の灰黄褐色粘土と黒褐色粘土の混合層（第７層）が認められ、以下順層で厚さ50㎝程度の灰黄褐色粘土（第８層）、厚さ40㎝程度の褐灰色細砂シルト（第９層）、厚さ50㎝以上の褐灰色砂利（第10層）と続く。このうち標高0.7m付近の第８層除去面が第２遺構面で、トレンチ西橋近くから東西方向幅約70㎝、南北方向130㎝以上の範囲に10～15㎝程度の扁平な川原石を敷き詰めた石敷き状遺構を検出した。

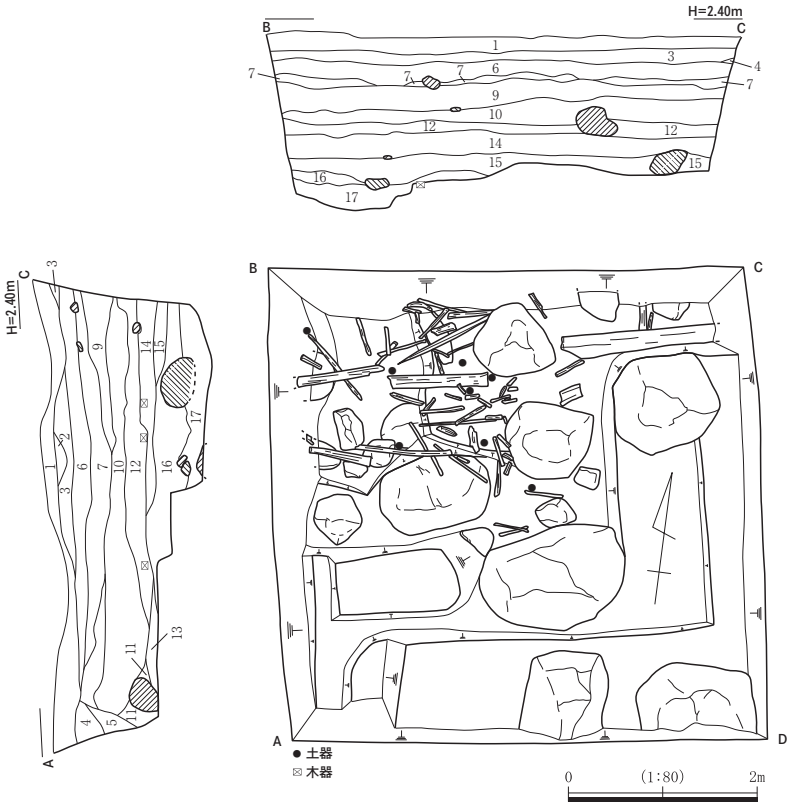
なお、2013年度の調査結果と出土遺物から、杭木や土師器片・須恵器片が出土している第８層が古代の遺物包含層、上面から土師器片や板状木製品が出土している第９層が古代以前～弥生時代の対応層、第９層との境界付近から板状木製品が出土している第10層が弥生時代～縄文時代の対応層と考えられる。また、調査対象地から出土した土師器（第29図１）と板状木製品（第29図２）、木杭（第29図３）を図化した。（１）は土師器で、赤彩がみられミガキが施される。（２）は板状を呈し、穿孔が２ヶ所確認できる。（３）は一方の枝を切り落とし、対する一方は切り尖らせている。その他に調整はみられない。

第２トレンチ（Tr2）　〔第26・29図、図版５・15〕

第１トレンチの西約21m、丘陵裾から３m程度の旧耕作地で現在の荒地に設定した東西、南北それぞれ５mのトレンチである。標高は第１トレンチとほぼ同じ2.2m程度である。丘陵からの転石とみられる径１m以上の巨石が検出される中、湧水量が多くなる標高0.4m付近まで掘下げを行った。

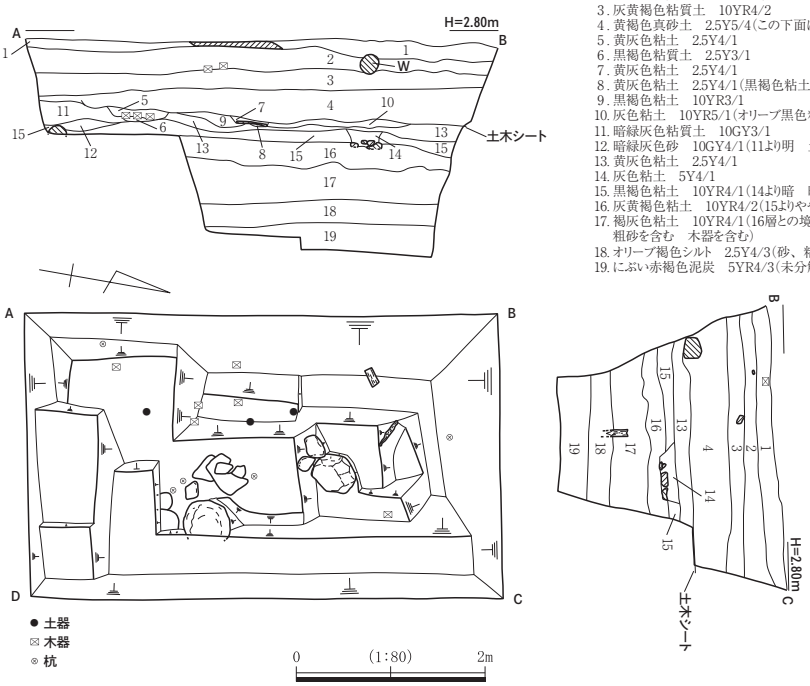
調査の結果、旧耕作土とみられる暗褐色粘質土（第１層）除去面でトレンチ南西隅から深さ60㎝以上の落ち込みを検出した。埋土中からは現代の陶器皿片が検出されており、2013年度の調査結果と合わせると当時検出された現代溝の延長線上の遺構の可能性が考えられる。

以下、標高1.3m付近まで現代遺物の包含等から客土と考えられる灰黄褐色粘質土（第３層）、褐灰色粘土（第６層）、黒褐色粘土（第７層）、褐灰色粘土（第８・９層）、暗灰黄色粘土（第10層）が堆積し、その下は黒褐色～褐灰色、暗灰黄色、黒褐色～黄灰色の各粘土層（第11～14層）が続く。このうち第12・14層は遺物包含層で、土師器片とともに薄板や板状・角棒状といった多くの木製品が出土している。標高１m程度以下は主として砂層となり、未分解の植物遺体を含む黒褐色細砂（第15層）、明黄褐色粗砂と黒褐色粘土のラミナ状互層（第16層）、明褐色粗砂（第17層）が続く。このうち第15層からは長さ2.4m以上、幅約24㎝の木製の大板が巨石の上に乗った状態で検出された他、第16層からは土師器片や弥生土器片が、さらに第17層からは摩滅した状態の縄文土器・弥生土器・土師器の破片が検出されている。また、調査対象地から出土した縄文土器（第29図４）と弥生土器（第29図５～８）、土師器（第29図９）を図化した。（４）は深鉢である。体部はやや外反気味に立ち上がり、口縁部で内湾し、口縁端部に刻み目が施される。（５）は口縁部がわずかに内湾し、外面に３条の凹線が廻る。口縁端部に刻み目が施される。（６）は複合口縁を有し、口縁部は外反する。内外ともにハケ目調整が施される。（７）は内面に成形時の指頭圧痕がみられ、外面には縦方向のミガキが施される。（８）は低脚杯の底部で調整は不明瞭である。（９）は中央に穿孔が３ヶ所確認でき、３孔の田下駄の可能性が推測される。



1. 暗褐色粘質土　10YR3/4(耕土)
2. 灰黄褐色粘質土　10YR4/2(0.5 ～ 1cm大の炭片を多く含む)
3. 灰黄褐色粘質土　10YR4/2 ～ 10YR5/2(2よりやや明　0.5cm大の炭片を含む)
4. 明黄褐色真砂土　10YR6/8(染付片を含む)
5. 褐灰色粘質土　7.5YR4/2 と 褐色軟岩ブロック　10YR4/4 と にぶい黄褐色砂　10YR5/3の混合
6. 褐灰色粘土　10YR4/1(黄褐色無機質分を密に含む)
7. 黒褐色粘土　10YR3/1(褐灰色粘土ブロック及び5 ～ 15cm大の軟岩を多く含む)
8. 褐灰色粘土　7.5YR4/1(6よりやや橙色かかる)
9. 褐灰色粘土　10YR4/1
10. 暗灰黄色粘土　2.5Y4/2(5 ～ 40cm大の軟岩を密に含む)
11. 暗褐色粘土　7.5YR3/1 ～褐灰色粘土　10YR4/1(8より暗)
12. 灰色粘土　7.5Y4/1(ややオリーブ灰色かかる)
13. 黒褐色粘土　2.5Y3/1 ～黄灰色粘土　2.5Y4/1
14. 黒褐色粘土　2.5Y3/1 ～黄灰色粘土　2.5Y4/1
15. 黒褐色細砂　10YR3/1(14より褐色かかる　未分解植物遺体及び中砂を含む)
16. 明黄褐色粗砂　10YR6/6 と 黒褐粘土　2.5Y3/1の互層(木片、未分解植物遺体を含む　摩滅した土器片を含む)
17. 明褐色粗砂　7.5YR5/8(10 ～ 30cm大の礫を多く含む)

第26図　善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ実測図



1. 灰黄褐色粘質土　10YR5/2
2. 褐灰色粘質土　10YR5/1(木、竹、プラスチック片を含む)
3. 灰黄褐色粘質土　10YR4/2
4. 黄褐色真砂土　2.5Y5/4(この下面に土木シート)
5. 黄灰色粘土　2.5Y4/1
6. 黒褐色粘質土　2.5Y3/1
7. 黄灰色粘土　2.5Y4/1
8. 黄灰色粘土　2.5Y4/1(黒褐色粘土ブロックを含む)
9. 黒褐色粘土　10YR3/1
10. 灰色粘土　10YR5/1(オリーブ黒色粘土を含む)
11. 暗緑灰色粘質土　10GY3/1
12. 暗緑灰色砂　10GY4/1(11より明　土器片、木器片を含む)
13. 黄灰色粘土　2.5Y4/1
14. 灰色粘土　5Y4/1
15. 黒褐色粘土　10YR4/1(14より暗　暗灰黄色土ブロックを多く含む)
16. 灰黄褐色粘土　10YR4/2(15よりやや明　黒褐色粘質土ブロックを多く含む　未分解植物遺体を含む)
17. 褐灰色粘土　10YR4/1(16層との境界付近に漆器椀を、18層との境界付近に部分的に土器を含む　粗砂を含む　木器を含む)
18. オリーブ褐色シルト　2.5Y4/3(砂、粘土ブロックを含む)
19. にぶい赤褐色泥炭　5YR4/3(未分解植物遺体を含む　下位に層状に砂層を含む)

第27図　善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ実測図

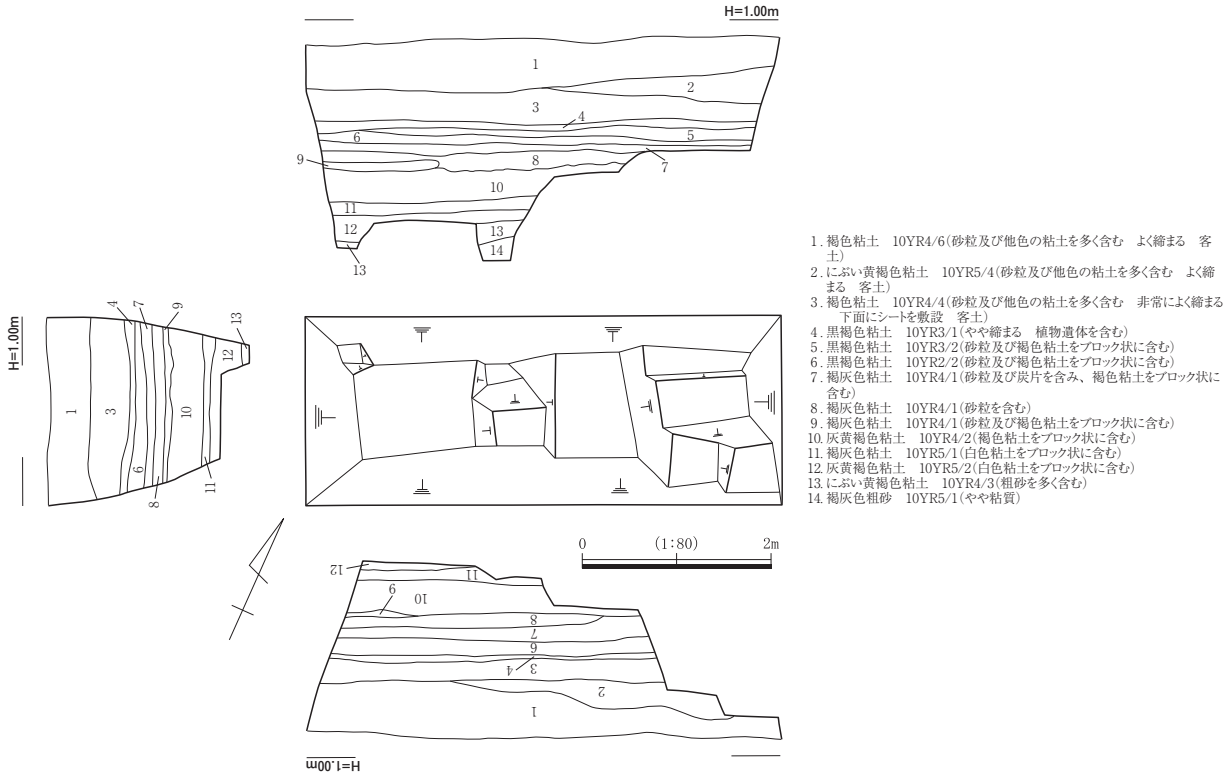
令和２(2020)年度の調査

第３トレンチ(Tr3)　〔第27・29図、図版５・14〕

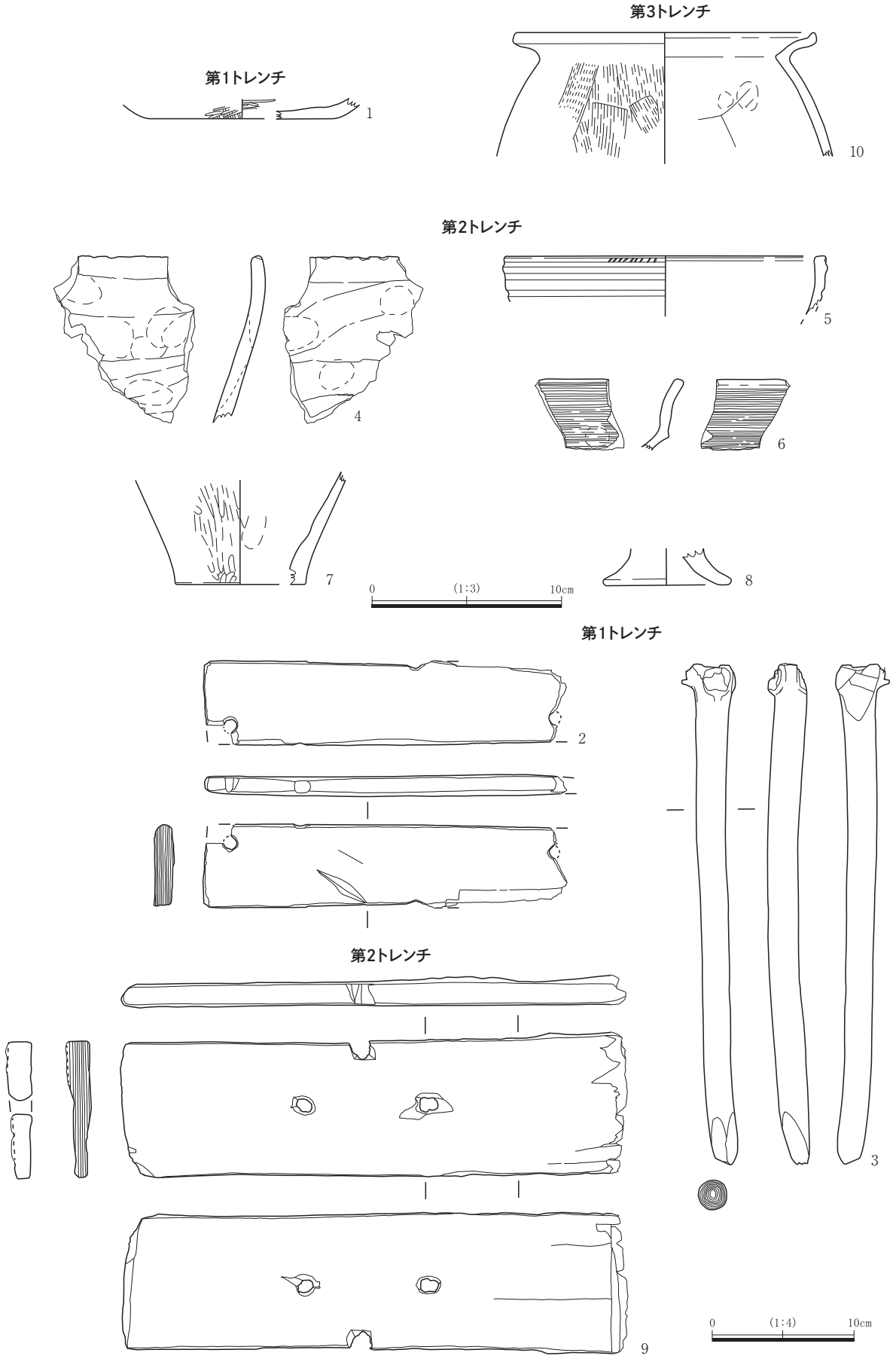
調査は令和元(2019)年度に実施した試掘第２トレンチの西約40mの細い小道以西が対象地で、南側には丘陵が迫り、現代の仮置き状の盛土がなされていた。このためもともとの耕作土面付近まで重機による盛土除去を行った後に人力によるトレンチ掘削を実施した。調査地の標高はこの推定旧耕作土面の標高約2.7m程度で、河川に直交方向で南北に長い3.0×5.0mのトレンチを設定し、湧水量が多くなる自然流路の堆積層とみられる層を30cm程度掘り込んだ標高0.4m付近まで掘下げを行った。

調査の結果、厚さ10～20cm程度の旧表土(第１層)下には厚さ60～80cmにわたって客土がなされており(第２～４層)、その下面には土木シートが敷設されている(標高1.8～2.0m付近)。この土木シート下には部分的に薄く黒褐色や灰色の粘土層が遺存し(第９・10層)、その下にトレンチの南端部付近では暗緑灰色粘質土(第11層)が堆積し、それ以外は黄灰色粘土(第13層)が堆積する。これらの上面からは現代のものとみられる板で蓋をした暗渠が掘り込まれる。このうち第11層下には南西～北東方向に帯状に暗緑灰色砂層が幅60cm程度で堆積し、陶器片や木片が含まれると共に径３～４cm程度の自然木に近い杭が認められる。これらの下位には黒褐色粘土(第15)層が厚さ10～20cmで堆積し、この上面からは10～20cm程度の石を入れた状態の暗渠が掘り込まれている。

以下は南から北に緩やかな傾斜をもって下がる順層で、標高1.5～1.7m付近に未分解植物遺体を含む灰黄褐色粘土(第16層)、標高1.3～1.5m付近に褐灰色粘土(第17層)、標高0.7～1.0m付近にオリーブ褐色シルト(第18)層、標高0.7m以下0.4m付近まではにぶい赤褐色泥炭土(第19層)が堆積する。このうち第17層からは、第16層との境界近くから漆器椀が出土したほか、部分的に粗砂を含む第18層との境界付近からは土器(弥生土器甕片)や木器片が検出土している。さらにこの層の上面付近から打ち込まれた可能性が考えられる径10cm弱の角杭が１本ながら立った状態で検出されている。また第18層中には細かな砂や粘土ブロックが認められ、あるいは人為的な踏み込み痕の可能性も考えられる。第19層には未分解植



第28図　善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ実測図



第29図　善田傍示ヶ崎遺跡　出土遺物実測図１

物遺体を含むとともに下位には層状に砂層を含み、上述の通り自然流路の堆積層の可能性が考えられる。なお、第17層の下位より弥生土器（第29図10）が出土しており図化した（10）の頸部は「く」の字状に屈曲され、口縁端部で上方に僅かに拡張される。

第４トレンチ（Tr4）　〔第28図、図版５〕

第３トレンチから南西に約10mの地点、露谷川の南岸に2.0×5.0mの東西に細長いトレンチを設定した。調査対象地は盛土が行われており、試掘調査着手前に１m程度の重機掘削を行っている。

地表面直下、約１mは盛土（第１～３層）が続き、第３層下面にシートが敷設されている。第４層はややしまり植物遺体が含まれる。第５層～第７層は砂粒及び褐色粘土をブロック状に含み、第７層は炭片も含まれる。第８層は砂粒を含み下面が乱れ、土器の細片が出土している。第９層は第４トレンチ西側に堆積し、砂粒及び褐色粘土をブロック状に含んでおり下面がやや乱れる。第10層は白色粘土をブロック状に含み、第11・12層は白色粘土をブロック状に含み、第12層から木片や板片等が出土している。第13層は細砂を多く含み、第14層は細砂でやや粘質である。なお、明瞭な遺構は検出されなかった。

小結

今回の試掘調査は、前述のとおり周辺の調査を参考にしながら、遺跡の範囲を確認するために遺構・遺物の有無に主眼を置いて実施した。その結果、当初想定していた古代の木製祭祀具の出土はみられなかったものの、第１トレンチは標高約２mから古代山陰道の可能性が推定される道状遺構とみられる盛土部分が検出され、また標高約0.7m付近からも石敷き状の遺構が検出された。次に、第２トレンチでは当該期の明瞭な遺構は検出されなかったものの、標高1.3m以下には多量の木製品を含む遺物包含層が検出されており遺跡の範囲がさらに西方へ広がったものと判断される。第３トレンチでは標高１m前後の第17・18層付近から人為的に打設された可能性が考えられる木杭と人為的に踏み込まれた可能性の考えられる堆積層を認めた。しかしながらこれら以外に明瞭な遺構は確認されなかった。遺物としては漆器椀や板材、陶器、弥生土器等の出土はあったものの、木製祭祀具の出土は認められなかった。また、第４トレンチからは明瞭な遺構は検出されず、遺物もわずかな出土にとどまった。

今回の結果から善田傍示ヶ崎遺跡の西側の境界は、第２トレンチから第３トレンチの周辺になることが想定される。さらに、近年の発掘調査成果から、古代山陰道が本遺跡を通過している可能性が考えられており、祭祀遺跡だけでなく道路遺跡としても、当時の様相を検討していくうえで非常に重要な遺跡であることが言える。河川改修等の事業の進展の際には慎重な対応が必要である。

参考文献

公益財団法人鳥取市文化財団『善田傍示ヶ崎遺跡』2014年
鳥取県『新鳥取県史（資料編）考古３飛鳥・奈良時代以降』2018年
鳥取県埋蔵文化財センター『青谷横木遺跡』2018年
鳥取県埋蔵文化財センター『青谷古代山陰道』2021年
公益財団法人鳥取市文化財団『善田傍示ヶ崎遺跡』2020年
鳥取県『青谷上寺地遺跡15』2020年

第８節　上町所在遺跡

調査期間　令和２年(2020)2月25日～３月12日
令和２年(2020)11月17日

調査地の所在する観音院は、寛永９年(1632)国替により鳥取藩主となった池田光仲に伴い、岡山から鳥取へと移り、寛永16年(1639)には現在の上町の地に移建されたとされる。国指定名勝地である観音院庭園はこの時に築造されたものと考えられており庭の約半分を池に、残り半分を築山としている。

平成30年(2018)７月の豪雨により多量の水を含んだ築山部分に亀裂が発生、これ以上の崩壊を防ぐため整備の必要性が生じた。令和元年度の試掘調査は庭園築山裏側に暗渠施設が可能かどうかの資料を得ることを目的として庭園斜面上部の平坦部に東・西２ヶ所のトレンチを設定して調査を実施することとした。なお調査は遺構・遺物の有無及び湧水状況の把握に努めて実施した。続いて令和２年度には、整備計画に基づいて着工された池岸の整備工事(蛇篭設置)に合せ築山内の堆積状況の確認の為の試掘調査を実施した。

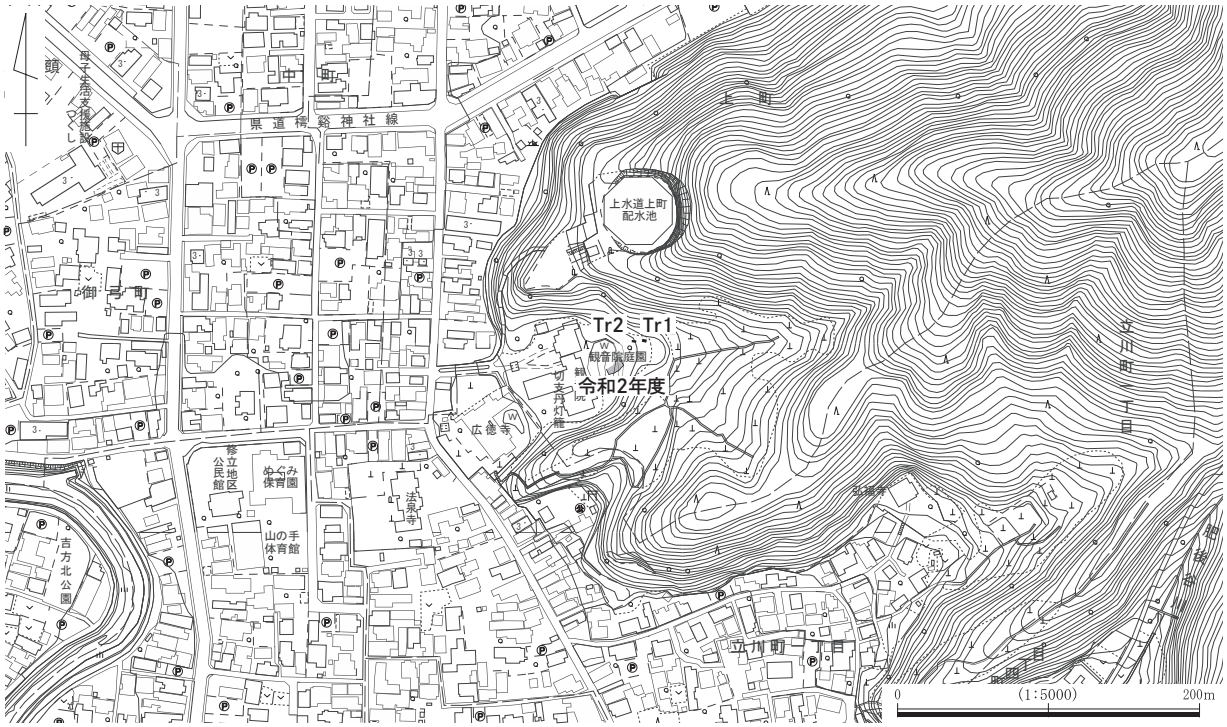
令和元年度調査

第１トレンチ(Tr1)　〔第31図、図版５・６〕

調査対象地は東西約16m、南北約16m程度の平坦地で、その東西方向中央付近の東端部に東西方向に長い2.0×3.0mの第１トレンチ(Tr１)を設定した。標高は20.3～20.5m程度である。

調査の結果、厚さ５cm程度の現在の表土(第１層)下に現代の陶器片や瓦片、ナイロン片等の含まれる20～30cm程度の客土(第２・３層)が認められる。その下は順層でにぶい黄褐色粘質土(第５層)、褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(第６層)、褐色粘質土(第７・８層)と続き、第８層には僅かに土師器片が含まれる。

標高19.6m付近の第８層除去面が遺構面であり、ピット状遺構１基(P01)と東壁断面から土坑１基(SK01)を検出した。このうちP01は径約30cm、深さ10cm程度で、埋土中から土師器片が検出された。またSK01の規模は検出長60cm以上、深さ約45cmである。時期は堆積状況や出土遺物から、観音院庭園



第30図　上町所在遺跡　調査トレンチ位置図

がこの地に造営される以前のものとみられる。第８層以下には東から西へ傾斜する堆積層の暗褐色粘質土(第14層)・褐色粘質土(第15層)・黒褐色粘質土(第16層)が認められ、土師器片が検出されている。またその下の標高19.3m以下も東から西へ傾斜する順層の暗褐色粘質土(第17層)、黒褐色粘質土(第18層)、暗褐色粘質土～黒褐色粘質土(第19層)と続き、いずれからも土師器片が検出されているが第17層からは弥生土器片も検出されている。なお、第18層付近を地下水が流れる可能性が考えられ、その下の第19層付近で湧水が認められた。標高は18.3m程度である。

第２トレンチ(Tr2)　〔第32図、図版６〕

調査地は第１トレンチの西側約７ｍで平坦部から庭園の斜面に変わる平坦部の西端部に東西方向に長い1.5×3.0mの第２トレンチ(Tr２)を設定した。標高は東端部で19.7m、西端部で19.2m程度である。

調査の結果、第１トレンチと同様に厚さ５㎝程度の現在の表土(第１層)下に現代から近代頃とみられる客土(第２～19層)が標高17.8m付近まで認められ、ナイロン片、植木鉢や染付椀・瓦片等が検出されている。第19層より下位にも層序に若干乱れが認められ、細かい礫の包含状況等から、近世以前の客土の可能性も考えられる褐色粘質土(第20・21層)が堆積し、以下にぶい黄褐色粘質土(第22・23層)、暗褐色粘質土(第24層)、黒褐色粘質土(第25層)と続く。このうち第24・25層からは僅かに土師器片が検出されている。また、17.8m以下の厚さ40㎝程度の第24層は第１トレンチの第17層に、標高17.4m以下の第25層が第１トレンチの第18層に対応する層序とみられ、第24層と25層の境界付近から降雨後に多くの湧水が認められた。なお、遺構は検出されなかった。

令和２年度調査　〔第33図、図版６〕

平成30年(2018)７月の豪雨により多量の水を含んだ築山部分に亀裂が発生した。災害復旧を目的とした整備計画では築山部を階段状に掘り下げ蛇篭を設置し、崩落を防止することとした。今回の調査は、築山の築造過程を明らかにするために実施した。整備工事の施工状況に併せ階段状に掘り下げた時点で着手し、土層断面の確認に務めた。工事範囲は第30図の通りであるが、調査範囲としてはこのうちの壁面部分のみである。

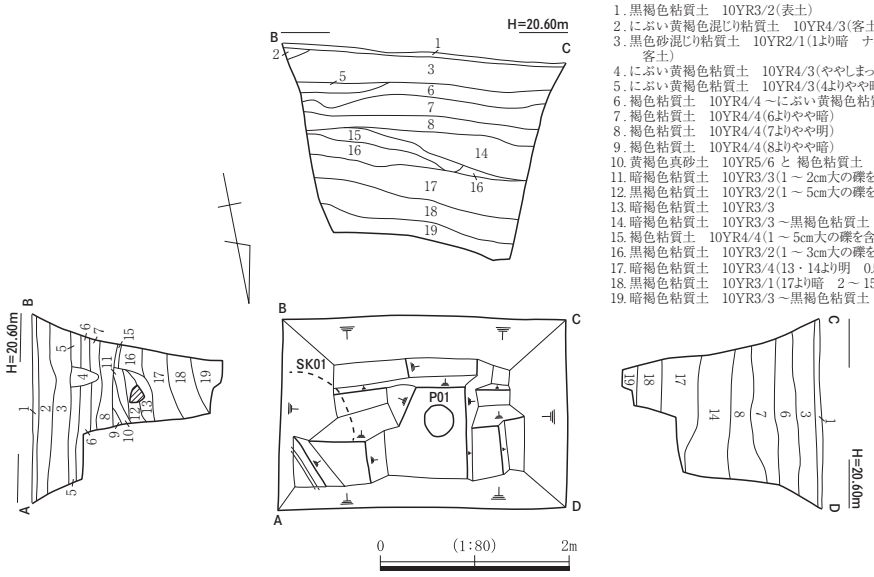
池に沿い扇状に広がる段掘りの工区のうち、東面左方については上方から下方まで築山表土を形成する褐色の近現代土が広がるため調査の対象外とし、正面右方には旧層の堆積が確認できるため、こちらを中心として調査を進めた。標高18.0m付近の頂部より続く段掘りは、池岸水面付近の標高14.0mまで５段が設けられた。

第１層は表土、第２・３層は現代の植栽や護岸工事による掘削層とみられ、第４層は現代の真砂土整地層、第５層は第４層に伴う層とみられる。第９層以下は近世層とみられるが、第６～８層については遺物がないため、近世、近代どちらに属するかは判断できない。第６層は地山由来とみられる軟岩ブロックを含む層で東面右方より左方へ向い下降する。ブロック土を用いる点は下層でも同様であり、南面でより顕著となる。第７層はブロックを含まない整地層で、第８層は掘削層とみられる。

第９層以下の層は、土質や整地状況から第９・10層、第11～14層、第15～17層の３つの整地層群に大別され、それぞれの表面部分は旧表土と考えられ、上層から順に旧表土１～３とした。

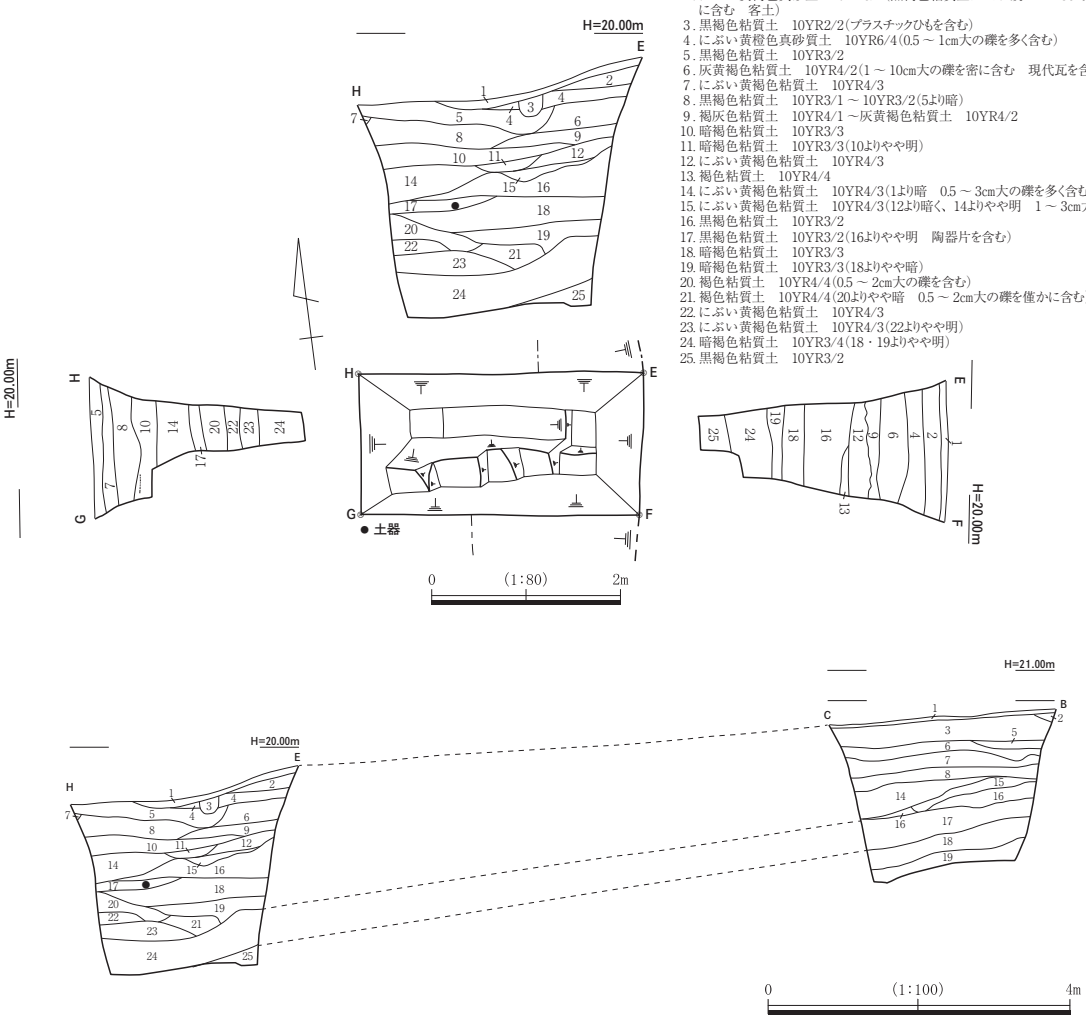
第９・10層は旧表土１を構成する一連の層である。第９層は締まりのある整地層である。第10層は南面で50㎝、東面では100㎝を超えるを超える厚い整地層で、地山由来とみられる細かな軟岩ブロック土で構成された明るい色調の層である。南面側では池に向い水平方向に伸びるが、東面については上面の凹凸が激しい。

第11～14層は旧表土２を構成する一連の層である。第11層は地山由来の軟岩ブロックを含む土で、第12・13層は第10層と同様で地山由来の軟岩ブロックで構成された土である。第14層は第15層以下の粘質土に由来するシルトブロックである。第11・12層の上面は３～５㎝にわたり黒変し、帯状に長く続くことからこれを旧表土とした。東面をみると第12・13層は左方へ向い下降する。第11層中より須恵器片、



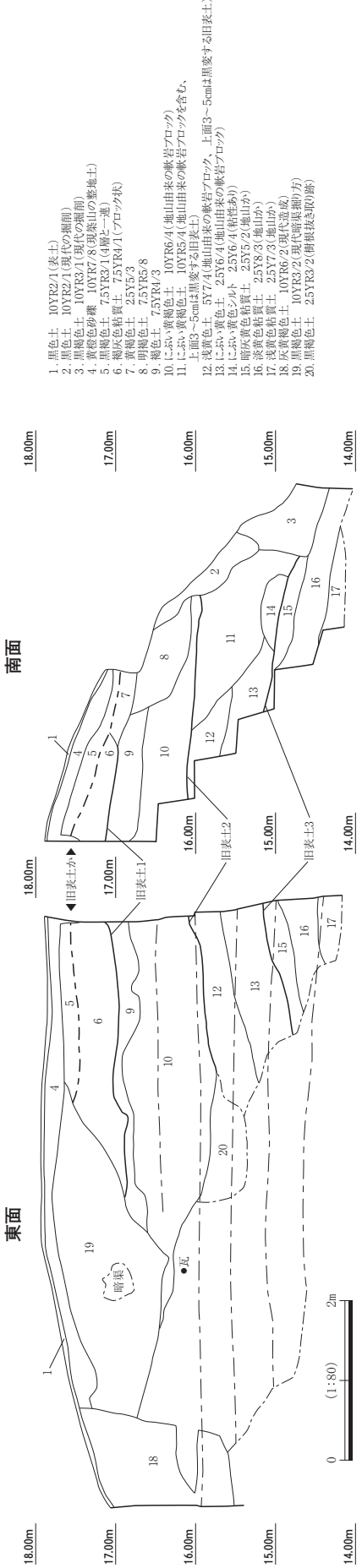
1. 黒褐色粘質土　10YR3/2(表土)
2. にぶい黄褐色混じり粘質土　10YR4/3(客土)
3. 黒色砂混じり粘質土　10YR2/1(1より暗　ナイロン・陶器・ガラス等現代ごみを多く含む　客土)
4. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(ややしまっている)
5. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(4よりやや暗)
6. 褐色粘質土　10YR4/4 ～にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(5よりやや明)
7. 褐色粘質土　10YR4/4(6よりやや暗)
8. 褐色粘質土　10YR4/4(7よりやや明)
9. 褐色粘質土　10YR4/4(8よりやや暗)
10. 黄褐色真砂土　10YR5/6 と 褐色粘質土　10YR4/4の混合
11. 暗褐色粘質土　10YR3/3(1 ～ 2cm大の礫を含む)
12. 黒褐色粘質土　10YR3/2(1 ～ 5cm大の礫を含む)
13. 暗褐色粘質土　10YR3/3
14. 暗褐色粘質土　10YR3/3 ～黒褐色粘質土　10YR3/2
15. 褐色粘質土　10YR4/4(1 ～ 5cm大の礫を含む)
16. 黒褐色粘質土　10YR3/2(1 ～ 3cm大の礫を含む)
17. 暗褐色粘質土　10YR3/4(13・14より明　0.5 ～ 3cm大の礫を含む)
18. 黒褐色粘質土　10YR3/1(17より暗　2 ～ 15cm大の角礫を多く含む)
19. 暗褐色粘質土　10YR3/3 ～黒褐色粘質土　10YR3/2(1 ～ 7cm大の礫を密に含む)

第31図　上町所在遺跡　第１トレンチ実測図



1. 黒色粘質土　10YR1.7/1(焼却灰跡)
2. にぶい黄褐色真砂土　10YR5/4(黒褐色粘質土ブロック及び1 ～ 3cm大の小礫を密に含む　客土)
3. 黒褐色粘質土　10YR2/2(プラスチックひもを含む)
4. にぶい黄橙色真砂質土　10YR6/4(0.5 ～ 1cm大の礫を多く含む)
5. 黒褐色粘質土　10YR3/2
6. 灰黄褐色粘質土　10YR4/2(1 ～ 10cm大の礫を密に含む　現代瓦を含む)
7. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
8. 黒褐色粘質土　10YR3/1 ～ 10YR3/2(5より暗)
9. 褐灰色粘質土　10YR4/1 ～灰黄褐色粘質土　10YR4/2
10. 暗褐色粘質土　10YR3/3
11. 暗褐色粘質土　10YR3/3(10よりやや明)
12. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
13. 褐色粘質土　10YR4/4
14. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(1より暗　0.5 ～ 3cm大の礫を多く含む)
15. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(12より暗く、14よりやや明　1 ～ 3cm大の礫を含む)
16. 黒褐色粘質土　10YR3/2
17. 黒褐色粘質土　10YR3/2(16よりやや明　陶器片を含む)
18. 暗褐色粘質土　10YR3/3
19. 暗褐色粘質土　10YR3/3(18よりやや暗)
20. 褐色粘質土　10YR4/4(0.5 ～ 2cm大の礫を含む)
21. 褐色粘質土　10YR4/4(20よりやや暗　0.5 ～ 2cm大の礫を僅かに含む)
22. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
23. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3(22よりやや明)
24. 暗褐色粘質土　10YR3/4(18・19よりやや明)
25. 黒褐色粘質土　10YR3/2

第32図　上町所在遺跡　第２トレンチ実測図



第33図　上町所在遺跡　令和２年度調査区土層図

12層付近とみられる層より瓦片が出土し、一部は被熱がみられた。

第15～17層は旧表土３を構成する一連の層である。土質は上層とは大きく異なりシルト～粘質土となり、混じり気のない堆積のため、地山とみられる。南面をみるといずれも池側へ、東面では左方へ向い下降する。第15層はこれらの表面部分にあたり濁りがみられることからこれを旧表土とした。第16・17層の色調は明るく、池岸～池底に広がると推定される。

遺物の出土が少ないため明確なことは言えないが、旧表土を比較すると、旧表土３は築山造成以前の面で、旧表土１と２は近世期の築山造成に伴う面である。築山の築造開始をいつとするかで、旧表土３の時期も下るとみられる。

小結

令和２年度の築山の調査では、３つの旧表土を確認した。上層は地山由来の軟岩ブロック土を多様する点が特徴であり、その良質な土にはその他の土を含まず均一な層であることから、それほど遠くない場所で採土され、築山築造のために敷かれた土と想定される。また、３つの旧表土の比高差は２ｍに達することから、段階的にかなりの盛土が行われたことがわかる。

12層付近より出土した瓦には、17世紀の前半代にみられる中心部が生焼けで黒変する軟質焼成の平瓦片も入ることから、創建時より瓦葺きの建物であった可能性も想定される。本堂は、享保５年(1720)の石黒火事、文化７年(1810)の矢津火事により焼失していることから、焼瓦の存在は、その痕跡とも考えられる。

第９節　下味野古墳群

調査期間　令和２年(2020)３月17日～３月19日

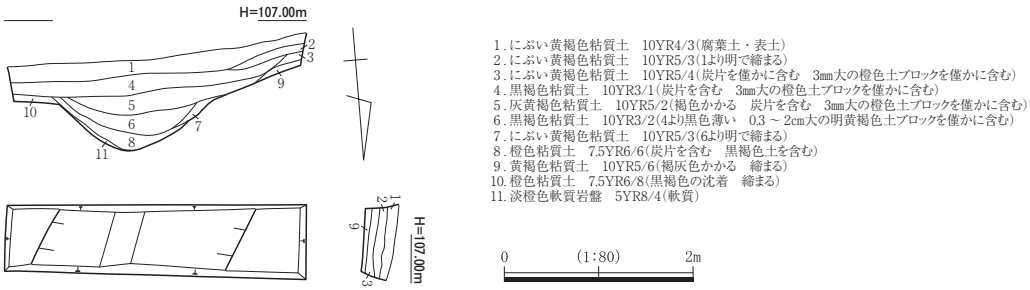
下味野古墳群は鳥取市下味野や北村、篠坂の標高40～160mに展開する古墳群である。とくに、標高100～160mの主稜線は平野部との比高差が90～150mほどあり、千代川を眼下に見据え鳥取平野を南西から一望できる。各所に鞍部や頂部など起伏を富む微地形が連続しており、23号墳(全長73.5m)をはじめ前方後円墳４基を含む各種大小様々な古墳が分布している。

今回の調査は送電用の鉄塔建設に伴い実施されたもので、古墳などの遺構・遺物の有無を確認するため、主稜線上にトレンチを３ヶ所設定した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第35図、図版６〕

開発予定地は標高105m余りの頂部手前に位置し、古墳とみられる高まりの裾部に周溝有無の確認を主眼に、幅0.8m、長さ3.2mの第１トレンチを設定した。地表面の標高106.8mを測る。地表下0.35mで幅２m、深さ0.57mを測る周溝の一部を検出した。横断面椀状で、橙色および淡橙色の地山および軟質の岩盤を掘り込んでおり、第５～８層が周溝埋土である。表土下は古墳状の高まりからの流土で、第４層については周溝埋土の可能性をもつ。出土遺物はみられなかった。

第34図　下味野古墳群　調査トレンチ位置図



第35図　下味野古墳群　第１トレンチ実測図

第２トレンチ(Tr2)　〔第36図、図版６・７〕

開発予定地は標高105m余りの頂部手前に位置し、古墳とみられる高まりの裾部に周溝有無の確認を主眼に、幅0.8m、長さ3.6mの第２トレンチを設定した。地表面の標高107.3mを測る。古墳状の高まりから下ったトレンチ南端で流土とみられる第４層黒褐色粘質土を検出したが、周溝状の地山の掘削などは確認されなかった。第10～13層は地山とみられる。出土遺物はなかった。

第３トレンチ(Tr3)　〔第37図、図版７〕

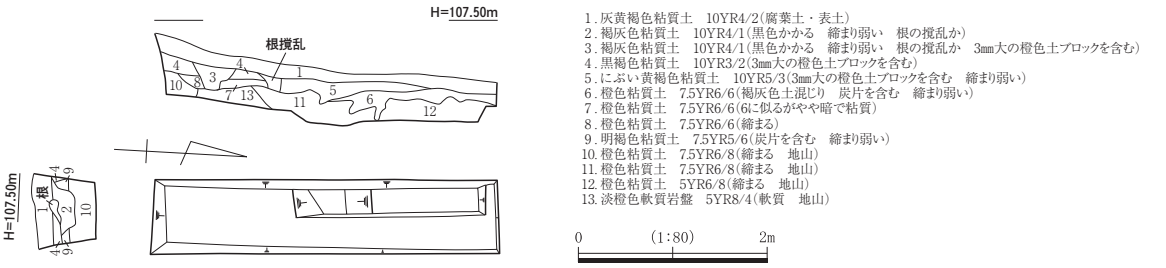
下味野23号墳は後世に城郭として利用され竪堀などが確認されている。中世開発予定地は標高105m余りの頂部手前に位置する。古墳とみられる高まり以外にも腰曲輪の可能性も考えられる段状の微地形が存在することから斜面の傾斜に沿って幅1.0m、長さ5.6mの第３トレンチを設定した。地表面の標高104.4mを測る。トレンチ南西高位で傾斜の変換部がありその下位に第７層黒褐色粘質土が堆積するが、明確な段状の加工痕は認められなかった。検出したピット状の遺構(P01～04)についても、根の攪乱の可能性がある。出土遺物はなかった。

小結

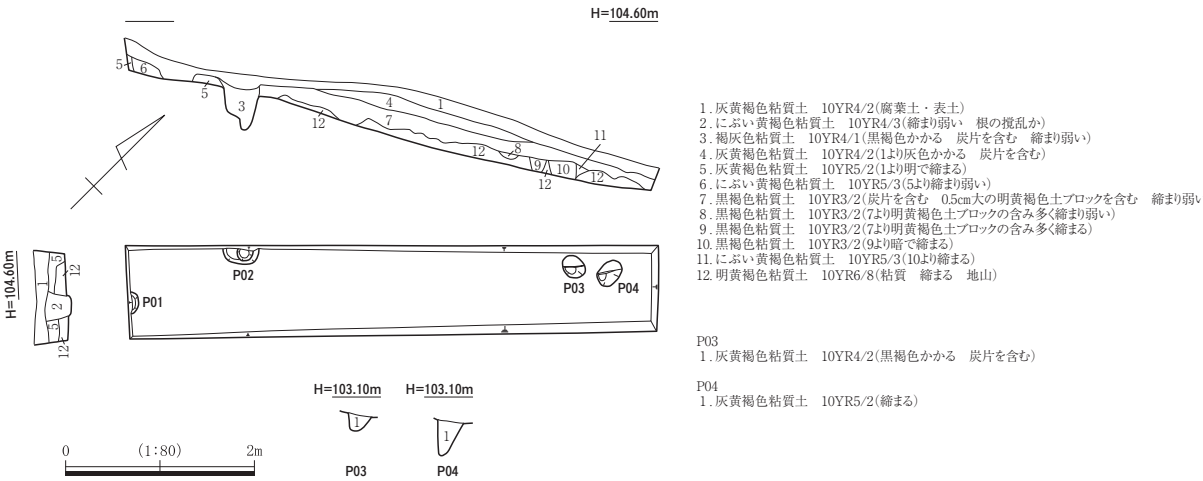
以上、今回の調査対象地である第１トレンチと第２トレンチからは古墳の周溝の可能性が想定される掘り込みが確認され、第３トレンチからはピット状の遺構が検出された。前述したが、周辺の主稜線上には下味野古墳群が展開し、後世には城郭として利用されている。現在、確認されている古墳などの遺構以外にも遺存している可能性が十分考えられる。今後も調査対象地周辺の開発工事等にあたっては、きめの細かい確認調査が必要である。

参考文献

鳥取県『新鳥取県史(資料編) 考古２ 古墳時代 』2020年



第36図　下味野古墳群　第２トレンチ実測図



第37図　下味野古墳群　第３トレンチ実測図

第10節　会下・郡家遺跡

調査期間　令和２年(2020)3月17日～３月19日

会下・郡家遺跡はＪＲ浜村駅から南西へ約700m付近、逢坂谷の河岸段丘上に立地する。弥生時代から近世にかけての遺構・遺物が多く確認される複合遺跡とされ、このうち弥生時代の住居域と墓域等の関係や平安時代の官衙関連遺構と想定される幾度も建て替えられた長大な掘立柱建物跡、西日本有数の検出数を誇る中世の地下式坑など貴重な資料が多くみられる。

今回の調査はトンネル内での電波状況改善のための携帯電話基地局設置に伴うもので、山陰道(鳥取西道路)の北側に隣接した耕作地に5.0m×5.0mのトレンチ１ヶ所(Tr１)を設定した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第39・40図、図版７・16〕

調査対象地は現状では畑作等に利用され、現況の表土にも土器類の細片が認められる。遺構の遺存が想定された。標高は18.8m程度で、設定した5.0×5.0mのトレンチを地山とみられる明黄褐色ローム層(標高17.9m付近)まで掘下げを行った。

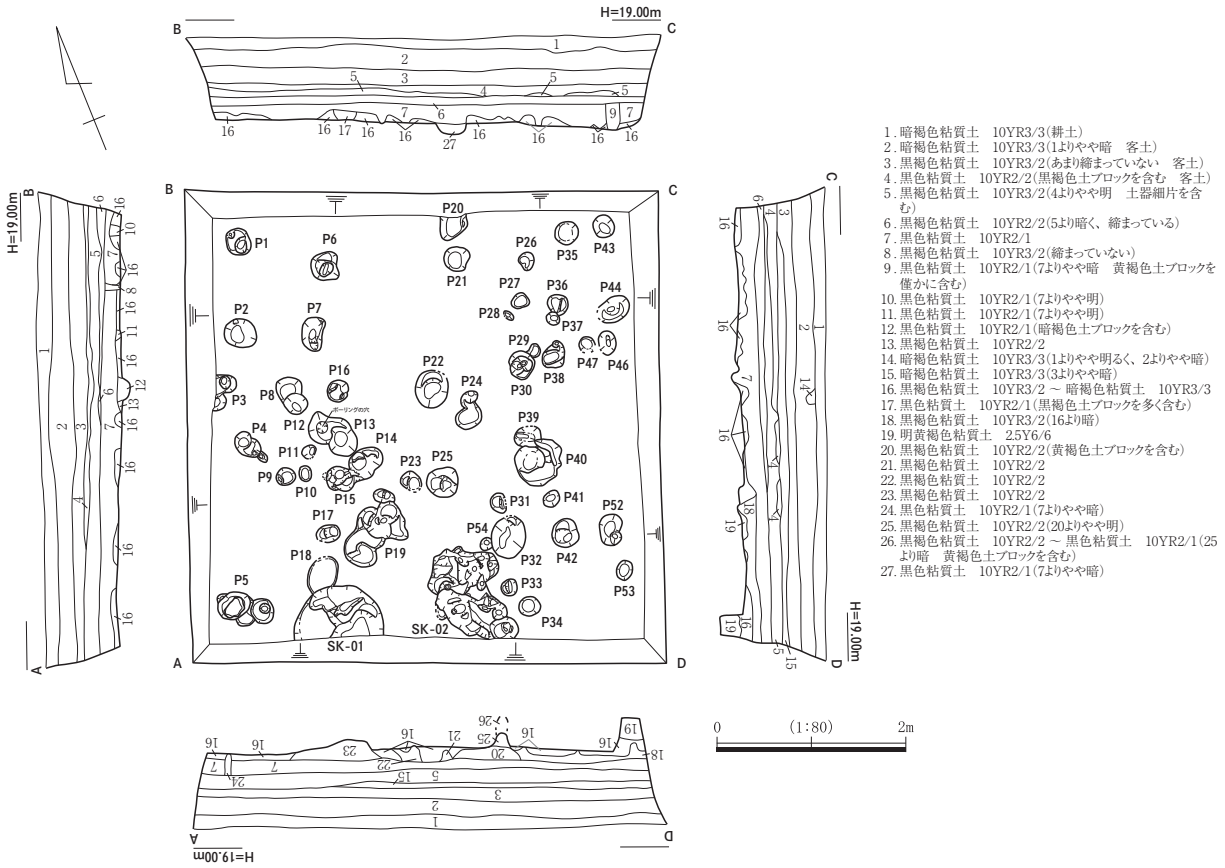
調査の結果、厚さ10～20cm程度の耕土(第１層)、以下はほ場整備時の客土(２・３層)、上面でキャタピラー跡の痕跡(第４層)、旧耕土(第５層)、よく締まって旧床土(第６層)と続く。地表面下70cm程度の標高18.1m以下には厚さ20cm程度の第７層が堆積し、その上面には稲株痕の可能性も考えられる径５cm程度、深さ５～10cm程度の痕跡がトレンチの南側を中心に多く検出されている。またこの第７層は遺物包含層で、古代の時期とみられる土師器片、須恵器片等が多く出土しており、さらに７層除去面の第16・18層上面からは複数のピットと土坑が検出されている。なお、第16層の下が上述のローム層である。検出された土坑のうちトレンチ南壁からトレンチ外に続く形で検出した南西側SK01の平面形はやや不定形ながら楕円形を呈する。規模は検出長0.95m、深さ0.22m程度である。また、南東側の土坑(SK02)は南北方向にやや長めで、複数のピットと切りあっており形状・深さとも不定形である。いずれもその性格は不明である。ピット状の土層の変化はトレンチの平面及び壁面から計54か所以上検出した。それぞれの確認掘削の結果、小さな凹みへの堆積と判断されるものを除いても28基程度はピット状遺構と考えられ、中には二段掘りで径約50cm、深さ32cm程度のＰ40等がある。ただし、調査範囲内では明確に掘立柱建物遺構として判断できるものは認められなかった。

なお、遺物はSK02から出土したミニチュア土器(第40図３)と第６層から出土した擂鉢(第40図６)、第７層から出土した弥生土器(第40図１・２)、土師器の椀(第40図４・５)を図化した。

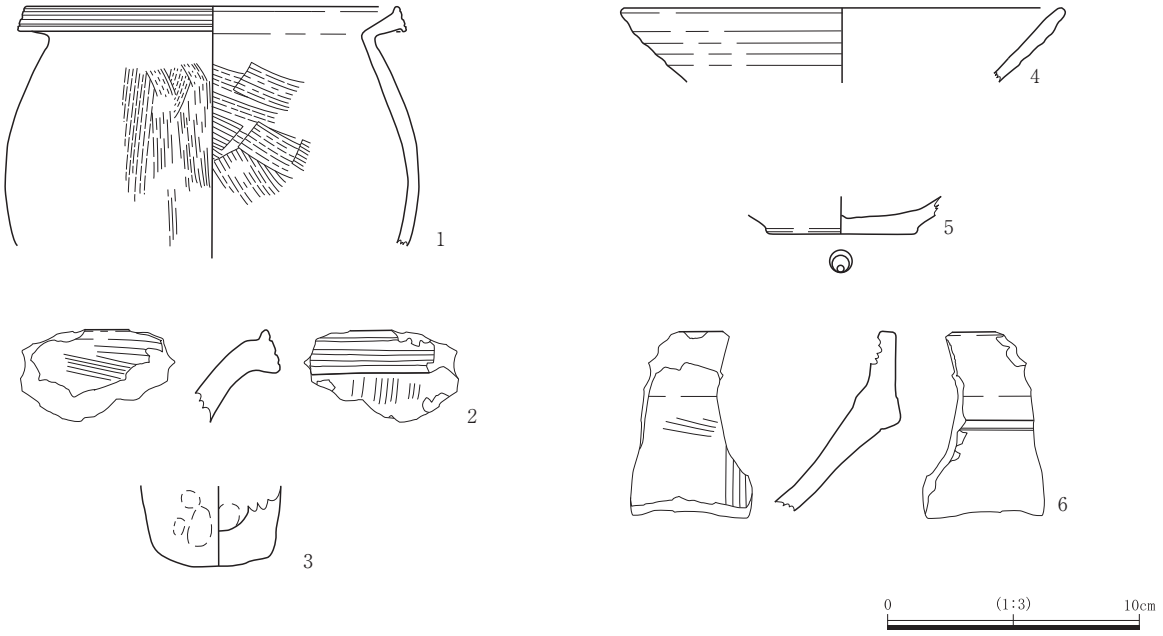
第38図　会下・郡家遺跡　調査トレンチ位置図

小結

今回の結果から調査対象地周辺には古代と想定される遺構面が遺存する可能性が想定される。今後も周辺の開発等を行う際にはきめ細かい確認調査が必要である。



第39図　会下・郡家遺跡　第１トレンチ実測図



第40図　会下・郡家遺跡　出土遺物実測図

第11節　良田所在遺跡

調査期間　令和２年(2020)３月23日～３月24日
令和２年(2020)５月14日～５月15日

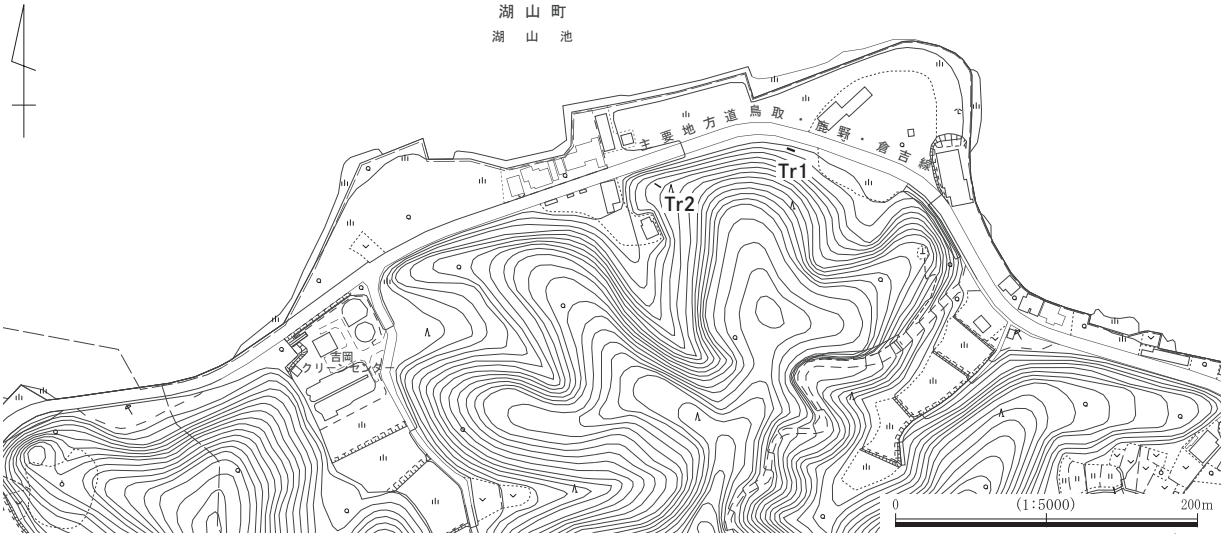
良田所在遺跡は鳥取市良田に所在し、鳥取平野の西側に広がる潟湖である湖山池の南岸、良田集落西側の丘陵先端部に位置している。調査対象地の北側は丘陵裾部が削られており、県道が湖岸を東西方向に走り崖面は一部補強工事が行われている。

調査対象地の周辺は旧鳥取市内の遺跡密集地として知られる地域で、古くは調査地から約1.6㎞東に位置する高住井手添遺跡から縄文時代早期前葉に位置付けられるネガティブ押型文土器が出土している。縄文時代前期において調査対象地周辺では、縄文海進の影響で海抜２ｍ近くまで海水面が上層したと想定され、縄文時代中期から後期にかけて海退が進み泥層や泥炭層が広がることから、中期から後期にかけて人々の活動が活発化したと考えられている。弥生時代では高住字宮ノ谷の丘陵から流水文銅鐸が、塞ノ谷遺跡から分銅形土製品が出土している。また松原田中遺跡では中期を中心とする玉作関連遺物が多く出土している。集落遺跡は弥生時代後期になると各地で増加する傾向がみられる。また、約500m西の丘陵上に松原１号墓は築かれ多量のガラス玉類が副葬された。この他にも布勢や桂見などの丘陵上に有力な墳墓が築造される。これらの傾向は古墳時代にも継承され、桂見や高住、松原などの丘陵上に広く古墳が展開する。なお、この時代の集落遺跡の調査例はまだ多いとは言えないが、弥生時代から続くものが多く丘陵裾の現在の集落と部分的に重複しているものと想定される。律令期、調査対象地の周辺は因幡国高草郡に属し、中世以降には因幡守護職となった山名氏が湖山池東岸の独立丘陵上に守護所として天神山城を築城した。調査対象地周辺は吉岡氏が拠点とし丸山城や防己尾城などが確認されている。

今回の調査は前述の湖山池南岸を走る県道の改良工事に伴うもので、現況の地形などから古墳を伴う遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。なお、2019年度は丘陵上に第１トレンチ(Tr１)を、2020年度は丘陵東側に第２トレンチ(Tr２)を設定した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第42図、図版７・８〕

現在竹林となっている広さ20×20m程の平坦面の北側に10～40㎝大の角礫の集石が観察されることから中世～近世墓の可能性を考慮し、集石の一部を含めた幅1.5m、長さ5.6mの第１トレンチ(Tr１)を設定した。トレンチ西側の集石は基本的に地表面に載っており、盛土状の高まりも認められなかった。地形的にはトレンチ東から西への傾斜が観察され、西側の高位から東側低位への地山削平と地山ブロック



第41図　良田所在遺跡　調査トレンチ位置図

を基本とする造成が認められる。トレンチ東側では旧表土とみられる第９層黒褐色粘質土上に盛り土が行われ、第９層下は第10層浅黄橙色粘質土の地山である。平坦地は丘陵を大規模に掘削し造成されたとみられる。出土遺物は第５層および第７層で陶器体部片１点、中世須恵器体部片１点が出土している。

第２トレンチ(Tr2)　〔第43図、図版８〕

調査対象地は湖山池南岸を走る県道を造成した際に北端側が削平された丘陵上に位置する。今回の工事予定地は現道に面した崖付近で周辺では古墳の遺存が想定され、標高16.4～18.5m付近の傾斜の変換部分に１ｍ×５ｍのトレンチを設定した。

調査の結果、10～20cm程度の表土(第１層)下には流入土とみられる堆積土(第２～６層)が20～40cm程度認められる。その下には断面皿状で深さ20cm程度、底面長1.1ｍ程度にわたって地山が掘削されており古墳の周溝の可能性が考えられる。また丘陵下方側には地山礫ブロックを含む墳丘盛土の可能性が考えられる第７層(黄褐色粘質土)が検出され、丘陵上方側の掘削(周溝)底部からは埴輪片が検出されている。

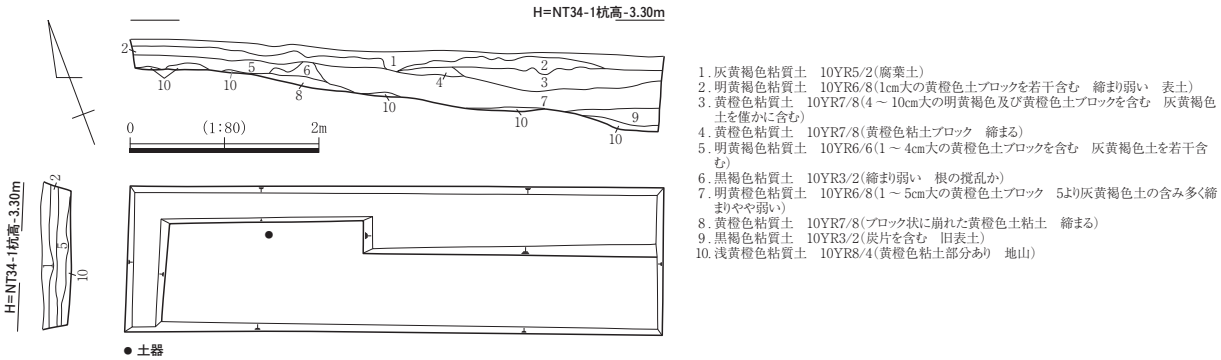
以上のことから当該地区には検出した周溝を伴った径10ｍ程度の古墳がその２分の１以上がすでに喪失しているものの丘陵の下方側に遺存し、かつ上方側にも径10ｍを超える古墳が遺存しているものと考える。

小結

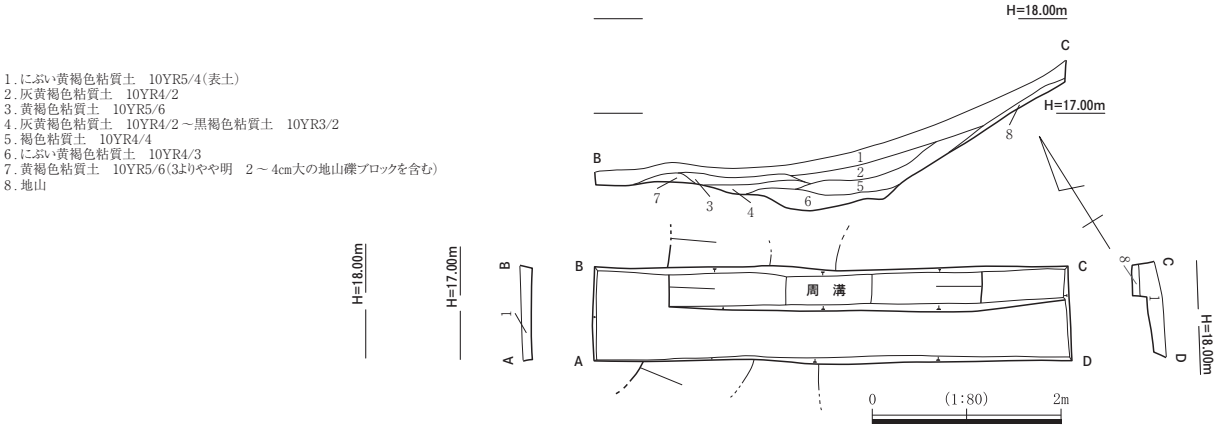
以上、今回の調査では第１トレンチから盛り土を確認し、第２トレンチから周溝状の掘り込みを確認した。盛り土の時期については不明であるが、この他にも周辺に墳墓などの遺構が遺存する可能性が考えられる。今後の開発工事等にあたっては十分注意が必要である。

参考文献

村田泰輔「鳥取平野の形成過程と人間活動」鳥取県埋蔵文化財センター編『調査研究紀要４』2012年



第42図　良田所在遺跡　第１トレンチ実測図



第43図　良田所在遺跡　第２トレンチ実測図

第12節　常松所在遺跡

調査期間　令和２年(2020)５月21日～５月27日

鳥取市気高町常松地区はJR山陰本線宝木駅の南約１㎞、南北に延びる丘陵の西側裾の小谷平野付近に集落が展開する。その西側には南の鷲峰山に端を発して北進し日本海にそそぐ河内川によって形成された幅１㎞程度、奥行６㎞以上の平野(宝木谷)が南北方向に長く展開している。この平野の外縁にあたる丘陵上には宝木、下光元、西山、下坂本ほか多数の古墳群が展開し、平野部では宝木高浜、戸島、馬場ほかの遺跡が知られている。また調査地の周辺は、近年の鳥取西道路に伴う発掘調査によって、常松大谷遺跡や常松菅田遺跡で縄文時代晩期から継続的に微高地及び周辺が利用されたことが確認されている。遺構としては水田跡や玉制作跡、建物跡等が検出され、遺物は墨書土器や木製祭祀具等が出土している。また、河内川の対岸に位置する下坂本清合遺跡も発掘調査行われ、弥生時代後期から継続的な土地の利用がみられ、とくに平安時代後期における低湿地の開発が確認されている。

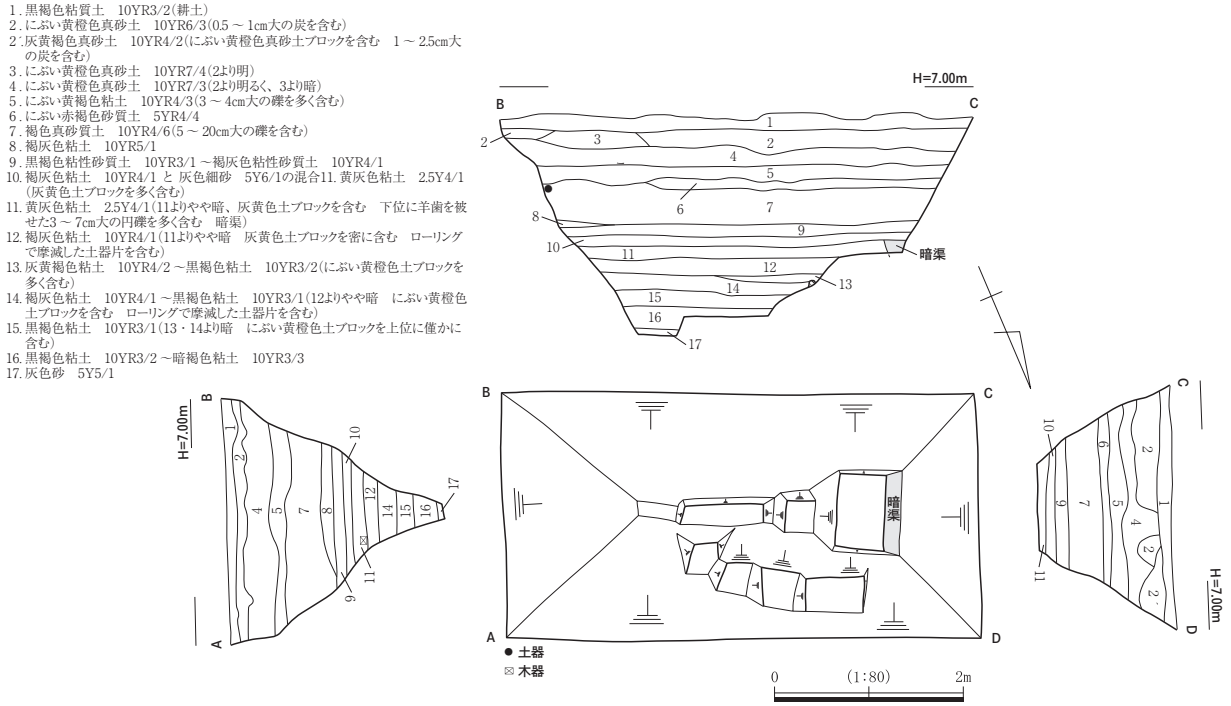
今回の調査対象地は宝木谷を南北に走る県道の通学路安全対策のための道路改良工事に伴うもので、常松集落とは県道を挟んだ西側耕作地に位置する。地形的には集落が位置する小谷地形からその西側の平野部へ合流する位置にあたり、遺構・遺物の有無確認に主眼を置いて調査を実施した。

第１トレンチ(Tr1)　〔第45図、図版８〕

調査対象地は周辺で営まれる水田部分に客土を行ってかさ上げした地所とみられ、標高6.6～6.7m程度の畑作地に東西方向に長い2.6m×5.0mの第１トレンチ(Tr１)を設定した。

調査の結果、地表面下10～20㎝程度の土師器片を含む耕土(第１層)の下に現代陶磁器やナイロン、銅線等を含む真砂土を主体とした客土(第２～７層)が標高5.5m付近まで1.0m程度にわたってなされていることが確認された。この客土の下は比較的順層で、厚さ10～20㎝程度の堆積層が標高標高4.3m付近まで続くことが確認された(第８～17層)。これらの中で遺構は第11層(黄灰色粘土)上面から掘り込まれる南北方向に延びる暗渠を検出した以外には明瞭な遺構は検出されなかった。ただその密度の多寡に違いはあるものの標高5.4～4.8m付近の第10～14層には灰黄色土やにぶい黄橙色土のブロックが比較的多

第44図　常松所在遺跡　調査トレンチ位置図



第45図　常松所在遺跡　第１トレンチ実測図

く含まれており人為的撹拌による旧耕土の可能性も考えられる。

また遺物については表土と客土中のものを除くと非常に少なく、客土前の旧耕土の可能性も考えられる第９層(黒褐色粘性砂質土～褐灰色粘性砂質土)から陶器片と小薄板片、第10層(褐灰色粘土と灰色細砂の混合)から土師器細片と小薄板、第12層(褐灰色粘土)から摩滅した土師器片と小薄板、第14層(褐灰色粘土～黒褐色粘土)から摩滅した土師器片と自然木がそれぞれ僅かに１～２点検出されたに止まった。

小結

以上の結果、調査地内からは明瞭な遺構は検出されず、旧耕作土の可能性が考えられる堆積層についてもローリングを受けた僅かな遺物の出土状況は混入遺物の域を出ず、また人為的撹拌層であったとしても現代とみられる暗渠の検出面等との関係から時期的には当該期より新しい可能性が考えられる。ただし、周辺の低湿地には遺跡が確認されており、現在は見えなくなっている微高地上には遺跡が遺存する可能性は高く今後も開発にあたってはきめの細かい確認調査が必要と考えられる。

参考文献

鳥取県埋蔵文化財センター 2018『下坂本清合遺跡(４～８区)』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2015『常松菅田遺跡Ⅰ』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2015『常松大谷遺跡Ⅰ』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2016『常松菅田遺跡Ⅱ』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2016『常松大谷遺跡Ⅱ』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2016『下坂本清合遺跡Ⅰ』
公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室 2017『下坂本清合遺跡Ⅱ』

第13節　広岡古墳群・祢宜谷所在遺跡

調査期間　令和２年(2020)６月８日～７月１日

今回の調査対象地である広岡古墳群および祢宜谷所在遺跡は、中国山地から北に延びる丘陵の縁辺部、鳥取平野の南東部にあたる生山、津ノ井、杉崎、桂木、紙子谷、広岡、船木、越路、古郡家、香取、祢宜谷などの低丘陵上に位置している。これらの丘陵上の一帯には小規模な古墳を中心とした古墳群が数多く展開されている。調査対象地に近い広岡48号墳の横穴式石室内からは金銅装圭頭大刀や馬具、玉類、多量の須恵器等が出土した。また、広岡11号墳(坊ヶ塚古墳)や広岡37号墳では、その横穴式石室内部に弓を引く武人などの線刻壁画が施され、調査対象地の南西に位置する空山古墳群などにもその石室内に鳥、木、葉などをモチーフとした線刻壁画を持つものが確認されている。

今回の試掘調査は電力会社の鉄塔移設計画に伴うもので、現況の地形等から主として古墳に伴う遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。なお調査地は広岡古墳群と祢宜谷所在遺跡にまたがるが、同一事業の調査のため最北部にあたる広岡古墳群のものを第１トレンチ(Tr１)とし、その南東に続く祢宜谷所在遺跡のものを第２、第３トレンチ(Tr２・３)とし、Tr２の北西約２mに追加設定したものを第４トレンチ(Tr４)と呼称する。

第１トレンチ(Tr1)　〔第48図、図版８〕

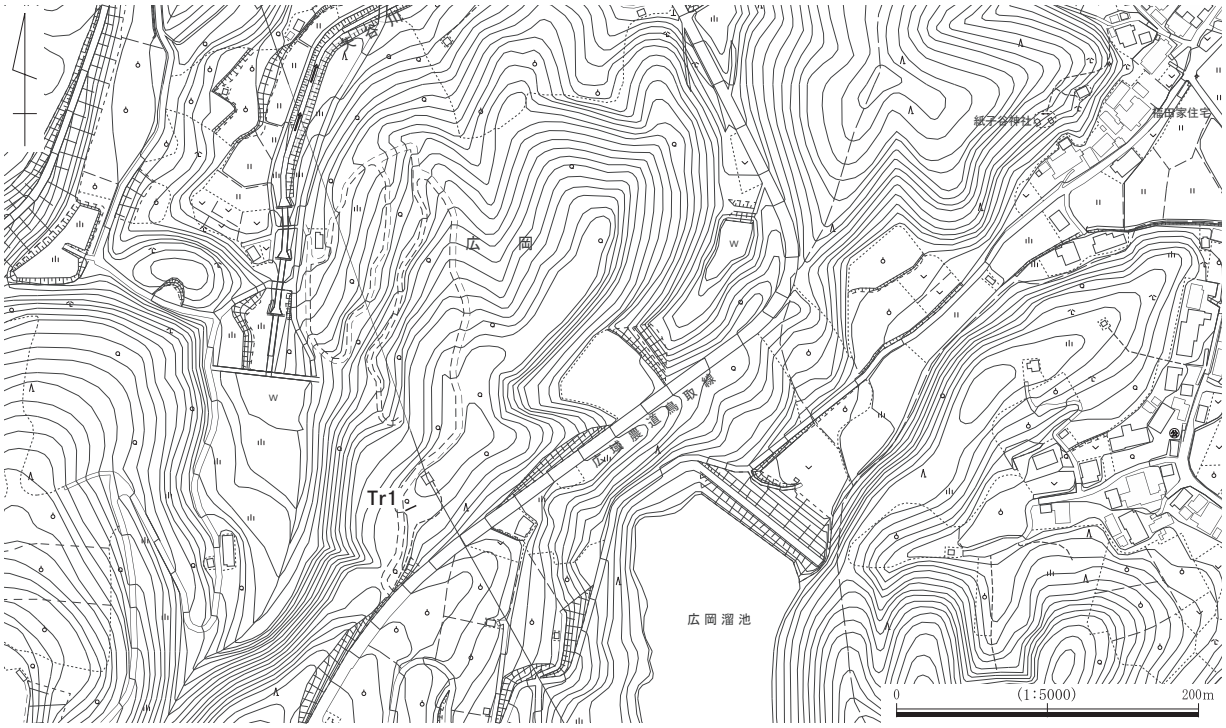
調査対象地は広域営農団地農道鳥取線の北西約30m程度の比較的なだらかな丘陵上で、現在の鉄塔の南西約10m、標高85m前後の緩やかな傾斜地に1.0×8.0mのトレンチを設定した。

調査の結果、表土の腐植土及びにぶい黄褐色粘質土層(第１層)下に10～20cm程度の比較的しまったにぶい黄褐色粘質土層(第３層)が見られ、その下は地山とみられる黄褐色粘質土層(第４層)が認められる。

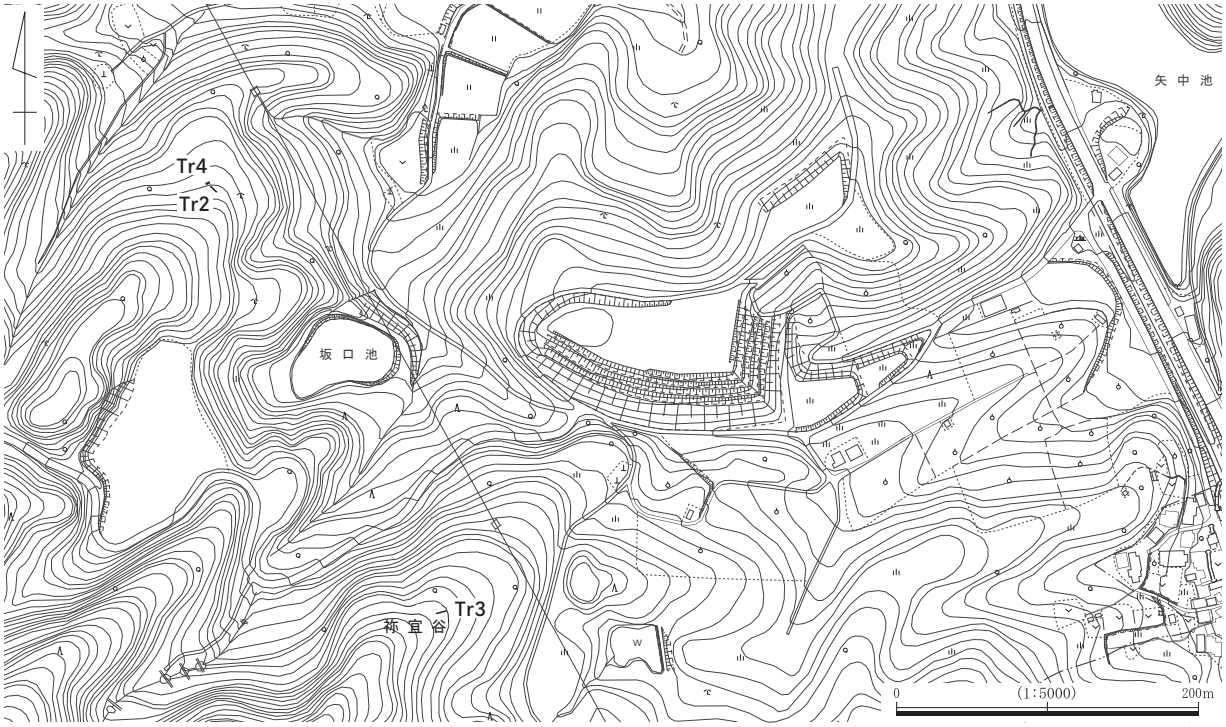
掘削平面、壁断面とも木根痕あるいは木根痕に由来すると見られるあまりしまっていないにぶい黄褐色粘質土層(第５層)が認められるが、地山の加工や盛土等の遺構は認められず、遺物も検出されなかった。

第２トレンチ(Tr2)　〔第49図、図版９〕

調査対象地は農道から40m程度上った、標高87～88m程度の比較的緩やかな傾斜地に1.0×6.0mのト



第46図　広岡古墳群　調査トレンチ位置図



第47図　祢宜谷所在遺跡　調査トレンチ位置図

レンチを設定した。

調査の結果、腐植土(第１層)と10～15cm程度の表土とみられる黄褐色粘質土層(第２層)の下に第２層よりやや暗い黄褐色粘質土層(第４層)が丘陵上位から流入して被るように認められる。その下には地山とみられる明褐色粘質土(第10層)との間に混じりの認められないオリーブ褐色粘質土層(第５層)や地山礫を含む黄褐色粘質土層(第６層)、オリーブ褐色粘質土層(第７層)、黄褐色粘質土層(第８層)が堆積するが、墳丘盛土あるいは周溝埋土と判断するには至らなかった。

なお遺物としては、トレンチ南東端近くの第２層中から土師器小片１点が出土したがそのほかには検出されておらず、表土とみられる堆積層からの出土である点や後述の第４トレンチの結果と合わせて積極的に遺構に伴うものと判断するには至らなかった。

第３トレンチ(Tr3)　〔第50図、図版９〕

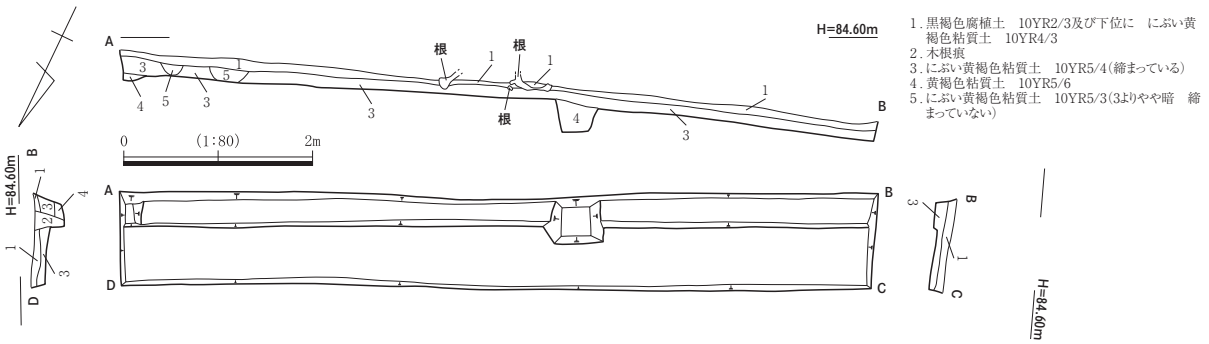
調査対象地は今回の調査地の中で最南端に位置し、かつての果樹園地を走る農道から約40m上った標高117m前後の丘陵斜面に1.0×7.0mのトレンチを設定した。

調査の結果、腐植土(第１層)の下に表土とみられるにぶい黄褐色粘質土層(第２層)が堆積し、地表面下約50cmの地山とみられる黄褐色粘質土層(第６層)までの間には黒褐色粘質土層(第４層)およびその漸移層とみられる灰黄褐色粘質土層(第３層)やにぶい黄褐色粘質土～黄褐色粘質土層(第５層)が堆積する。これらの堆積層の中には遺構を想定させるような変化は認められず、平面的にも木根に起因するとみられる変化以外には明瞭な遺構は認められなかった。また、遺物も検出されなかった。

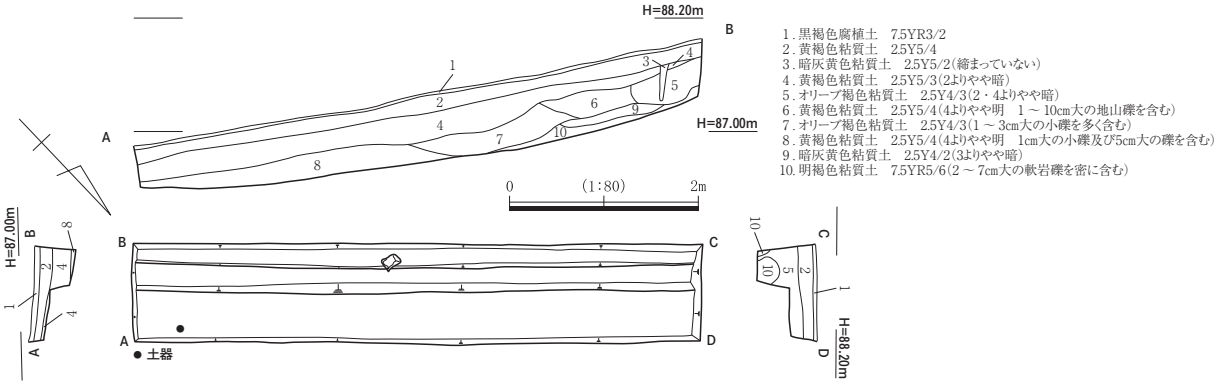
第４トレンチ(Tr4)　〔第51図、図版９〕

第２トレンチの北西約1.5mのやや平坦地に設定した1.5×3.0mのトレンチで、標高は88.5m前後である。第２トレンチで遺構(主に墳丘を想定)の有無がやや不明瞭であったため主体部等の確認を想定した設定した。

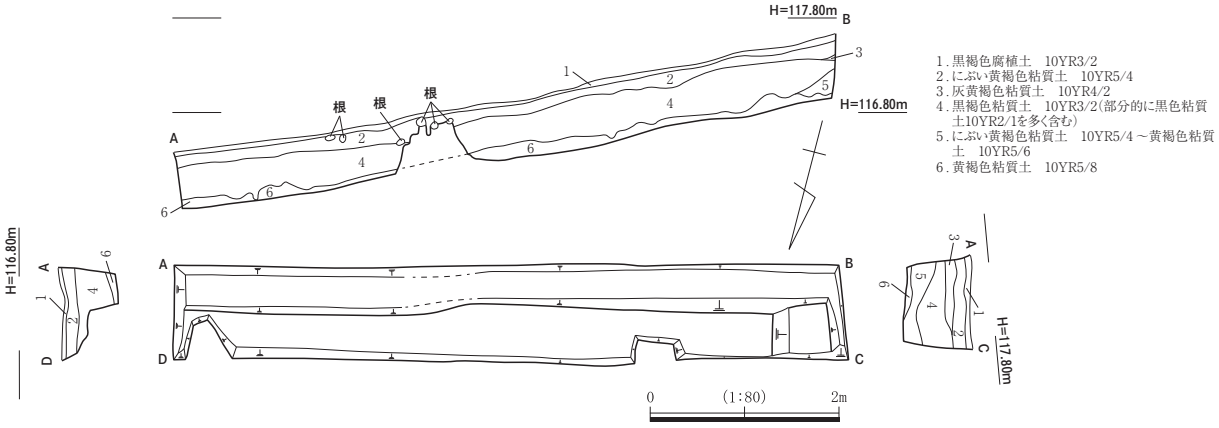
調査の結果、腐植土層(第１層)の下は厚さ10～15cm程度の黄褐色粘質土層(第２～４層)が順層で堆積し、地表面下約40cmで地山とみられる黄褐色粘質土層(第４´層)となる。遺構、遺物とも検出されず、周辺に古墳等の遺構は認められないと判断される。



第48図　広岡古墳群　第１トレンチ実測図



第49図　祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ実測図



第50図　祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ実測図

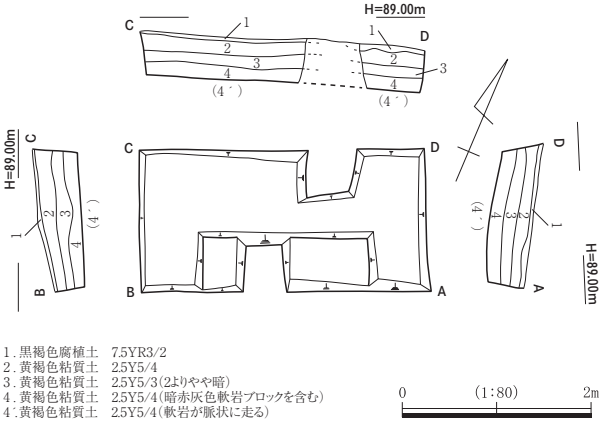
小結

今回の調査対象地からは明瞭な遺構は検出されなかった。しかし、調査対象地の周辺には多くの古墳群が展開し、集落遺跡も所在している。今後も周辺の開発等を行う際にはきめ細かい確認作業が必要であろう。

参考文献

鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団『広岡古墳群発掘調査報告書Ⅰ』1986年

鳥取県『新鳥取県史(資料編) 考古２ 古墳時代』2020年



第51図　祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ実測図

第14節　六部山古墳群

調査期間　令和２年(2020)９月８日～９月28日・12月１日～12月11日

今回の調査対象地は鳥取平野南東部の鳥取市久末に展開する六部山古墳群である。六部山古墳群は、鳥取市越路集落の北東側に位置し、空山(標高340m)から鳥取平野南東部へ枝状に派生する標高30～90mの丘陵上に展開する古墳群で、遺跡台帳の上では鳥取市久末地内に立地する93基築造されている。空山の丘陵から下った後、北側と北西側へ主稜線が派生し、西側と東側には谷平野が広がる。周辺の丘陵地は果樹栽培が盛んに行われていることもあり、それに伴う造成や耕作によって多くの古墳が発見され発掘調査も行われている。この古墳群の周辺には、越路古墳群や広岡古墳群などの古墳群も展開しており、鳥取平野の中でも多くの古墳が築造されている地域である。トレンチは北側へ派生する主稜線の東側に８ヶ所を設定し、現況の地形等から主として古墳に伴う遺構・遺物の有無に主眼を置いて調査を実施した。

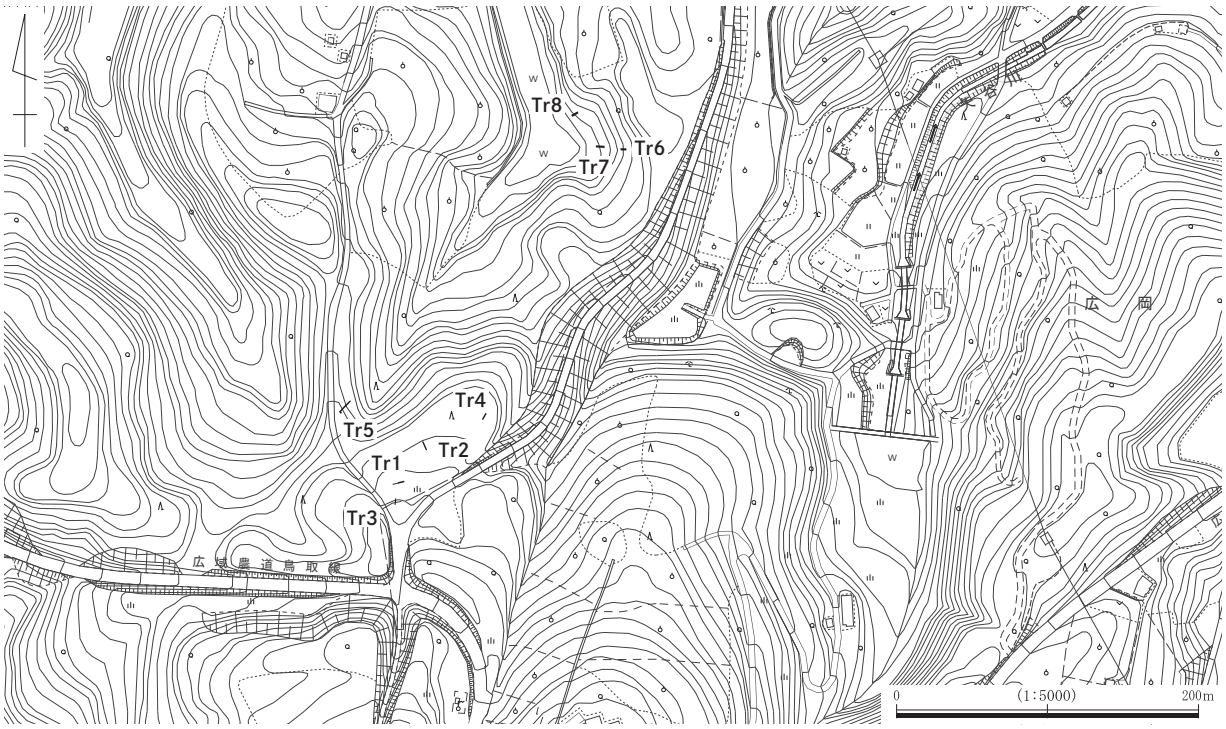
第１トレンチ(Tr1)　〔第53・61図、図版９・16〕

古郡家～広岡間の広域農道鳥取線で、舟木への分岐点より北へ下る果樹園への農道から北東へ10mの高まり(標高約81.0m)に、南西～北東方向へ7.0×1.0mのトレンチを設定した。地形の変換地には表土下に第２層の現代ゴミ混入層と第４・５層のピット状が堆積する。第10層～第13層は褐色粘質土、第14層(褐色粘砂質土)下では褐色粘質土(第15・22・24)を掘りこむ土坑状(第20・21層)がみられる。第24層は２～５㎜大の灰色土ブロックを多く含む地山と思われる。規模は断面観察で幅0.94×深さ0.40mを測り北側断面でも同様の褐色粘質土(第18・25・26層)がみられることから、土坑状は北西－南東への軸を持ち更に広がる可能性を持つ。

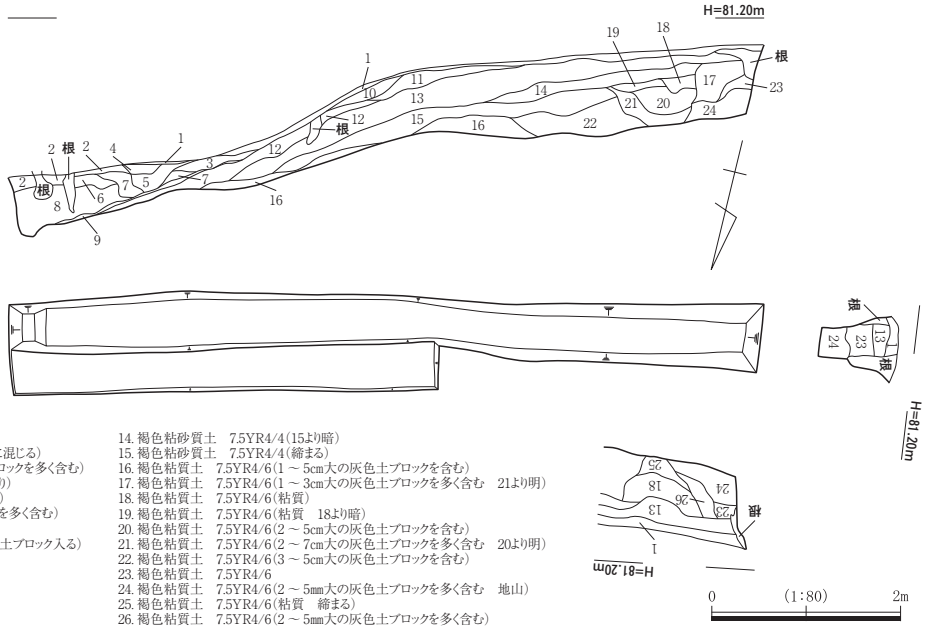
遺物は、表土下で土師器片１と礫層から雫状石器？（第61図１）を検出した。

第２トレンチ(Tr2)　〔第54図、図版10〕

第１トレンチから北東へ約25m、比高差約２mの傾斜地に6.2×0.9mの第２トレンチを設定した。頂部平坦面から傾斜する第４層下面の標高約78.60～78.30mで土坑を検出、遺存値0.45×(0.45)mの扁平な

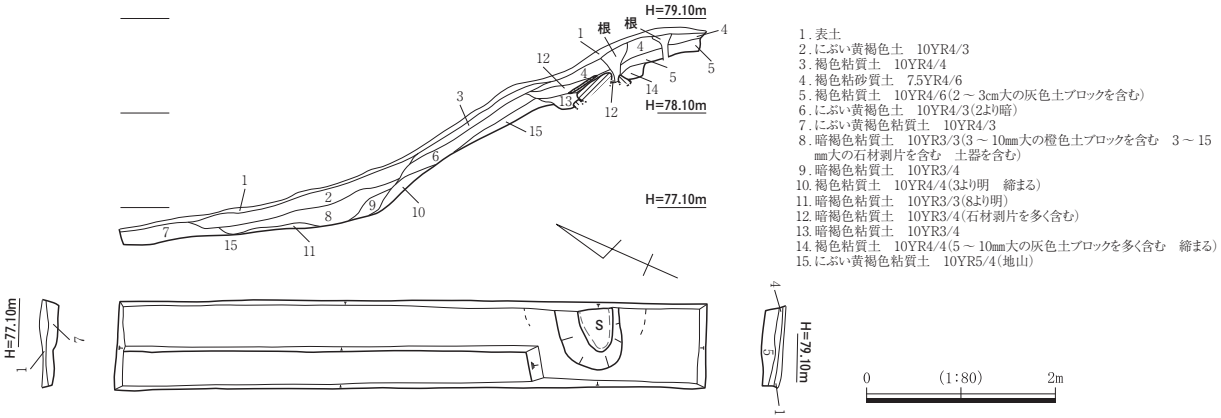


第52図　六部山墳群　調査トレンチ位置図



1. 表土
2. 褐色粘質土　10YR4/4(灰色土ブロックが僅かに混じる)
3. 褐色粘質土　10YR4/4(2～5cm大の灰色土ブロックを多く含む)
4. にぶい黄褐色土　10YR5/4(灰色土ブロック混じり)
5. にぶい黄褐色土　10YR4/3(5mm大の礫多く含む)
6. 褐色粘質土　10YR4/4(5cm大の灰色土ブロックを多く含む)
7. 褐色粘質土　10YR4/4(3～5mm大の礫を含む)
8. 褐色粘質土　7.5YR4/6(10～20cm大の黄褐色土ブロック入る)
9. 暗褐色粘質土　10YR3/3
10. 褐色粘質土　10YR4/6
11. 褐色粘質土　10YR4/6(10より明)
12. 褐色粘質土　7.5YR4/4
13. 褐色粘質土　7.5YR4/6
14. 褐色粘砂質土　7.5YR4/4(15より暗)
15. 褐色粘砂質土　7.5YR4/4(締まる)
16. 褐色粘質土　7.5YR4/6(1～5cm大の灰色土ブロックを含む)
17. 褐色粘質土　7.5YR4/6(1～3cm大の灰色土ブロックを多く含む　21より明)
18. 褐色粘質土　7.5YR4/6(粘質)
19. 褐色粘質土　7.5YR4/6(粘質　18より暗)
20. 褐色粘質土　7.5YR4/6(2～5cm大の灰色土ブロックを含む)
21. 褐色粘質土　7.5YR4/6(2～7cm大の灰色土ブロックを多く含む　20より明)
22. 褐色粘質土　7.5YR4/6(3～5cm大の灰色土ブロックを含む)
23. 褐色粘質土　7.5YR4/6
24. 褐色粘質土　7.5YR4/6(2～5mm大の灰色土ブロックを多く含む　地山)
25. 褐色粘質土　7.5YR4/6(粘質　締まる)
26. 褐色粘質土　7.5YR4/6(2～5mm大の灰色土ブロックを多く含む)

第53図　六部山古墳群　第１トレンチ実測図



1. 表土
2. にぶい黄褐色土　10YR4/3
3. 褐色粘質土　10YR4/4
4. 褐色粘砂質土　7.5YR4/6
5. 褐色粘質土　10YR4/6(2～3cm大の灰色土ブロックを含む)
6. にぶい黄褐色土　10YR4/3(2より暗)
7. にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3
8. 暗褐色粘質土　10YR3/3(3～10mm大の橙色土ブロックを含む　3～15mm大の石材剥片を含む　土器を含む)
9. 暗褐色粘質土　10YR3/4
10. 褐色粘質土　10YR4/4(3より明　締まる)
11. 暗褐色粘質土　10YR3/3(8より明)
12. 暗褐色粘質土　10YR3/4(石材剥片を多く含む)
13. 暗褐色粘質土　10YR3/4
14. 褐色粘質土　10YR4/4(5～10mm大の灰色土ブロックを多く含む　締まる)
15. にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4(地山)

第54図　六部山古墳群　第２トレンチ実測図

自然石と、石下の高位、低位には高さ10cm程度の風化した立石を検出した(石棺状遺構)。それぞれ北東断面内に延びることから、規模は北東側へ広がるものと思われる。埋土は第12～14層で北西側(低位)の石材は風化により押しつぶされた状態が確認できる。第12層には石材剝片を多く含み、西側への傾斜をみる。また、第２層下、標高約77.10～76.80mで暗褐色粘質土(第８・９・11層)を検出、断面観察では幅1.88×深さ0.58mの溝状になる。

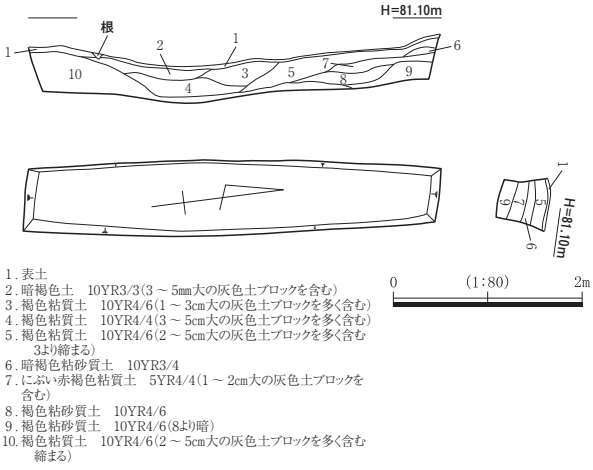
遺物は、石棺状遺構埋土から土師器片１点が出土した。

第３トレンチ(Tr3)　〔第55図、図版10〕

第１トレンチから南東へ約５mに4.4×0.6mの第３トレンチを設定した。表土下は基本的に灰色土ブロックを含む褐色粘質土層の堆積である。西側の農道建設の際に大きく掘削されているものと思われ、明確な遺構は確認できなかった。また遺物も出土しなかった。

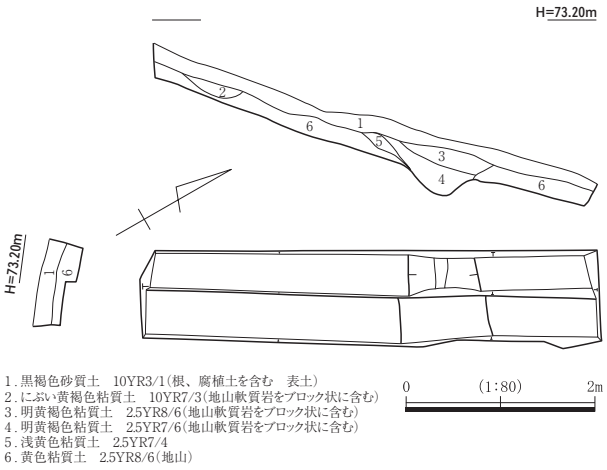
第４トレンチ(Tr4)　〔第56図、図版10・11〕

第４トレンチは、第２トレンチから北東に約45mの地点、南北に延びる丘陵に沿って南北に細長いトレンチ(0.9×4.7m)を設定した。



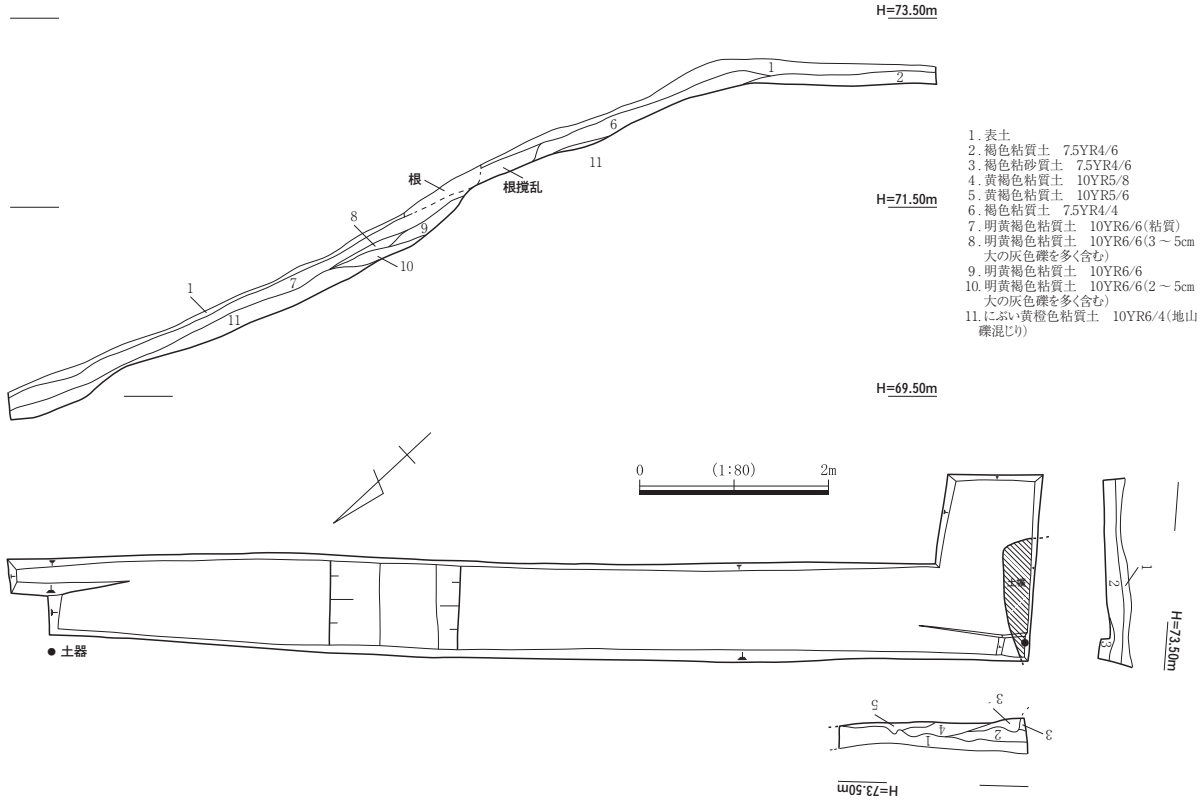
1.表土
2.暗褐色土　10YR3/3(3～5mm大の灰色土ブロックを含む)
3.褐色粘質土　10YR4/6(1～3cm大の灰色土ブロックを多く含む)
4.褐色粘質土　10YR4/4(3～5cm大の灰色土ブロックを多く含む)
5.褐色粘質土　10YR4/6(2～5cm大の灰色土ブロックを多く含む　3より締まる)
6.暗褐色粘砂質土　10YR3/4
7.にぶい赤褐色粘質土　5YR4/4(1～2cm大の灰色土ブロックを含む)
8.褐色粘砂質土　10YR4/6
9.褐色粘砂質土　10YR4/6(8より暗)
10.褐色粘質土　10YR4/6(2～5cm大の灰色土ブロックを多く含む　締まる)

第55図　六部山古墳群　第３トレンチ実測図



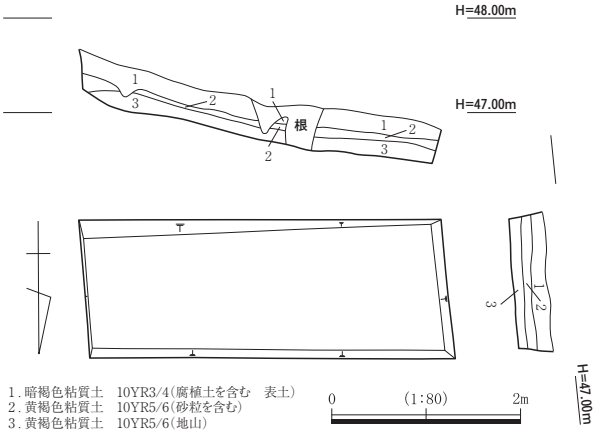
1.黒褐色砂質土　10YR3/1(根、腐植土を含む　表土)
2.にぶい黄褐色粘質土　10YR7/3(地山軟質岩をブロック状に含む)
3.明黄褐色粘質土　2.5YR8/6(地山軟質岩をブロック状に含む)
4.明黄褐色粘質土　2.5YR7/6(地山軟質岩をブロック状に含む)
5.浅黄色粘質土　2.5YR7/4
6.黄色粘質土　2.5YR8/6(地山)

第56図　六部山古墳群　第４トレンチ実測図



1.表土
2.褐色粘質土　7.5YR4/6
3.褐色粘砂質土　7.5YR4/6
4.黄褐色粘質土　10YR5/8
5.黄褐色粘質土　10YR5/6
6.褐色粘質土　7.5YR4/4
7.明黄褐色粘質土　10YR6/6(粘質)
8.明黄褐色粘質土　10YR6/6(3～5cm大の灰色礫を多く含む)
9.明黄褐色粘質土　10YR6/6
10.明黄褐色粘質土　10YR6/6(2～5cm大の灰色礫を多く含む)
11.にぶい黄橙色粘質土　10YR6/4(地山礫混じり)

第57図　六部山古墳群　第５トレンチ実測図



1.暗褐色粘質土　10YR3/4(腐植土を含む　表土)
2.黄褐色粘質土　10YR5/6(砂粒を含む)
3.黄褐色粘質土　10YR5/6(地山)

第58図　六部山古墳群　第６トレンチ実測図

地表面直下、10～20cmは表土(第１層)で、第６層の上面で遺構と思われる落ち込みを確認した(第３～第５層)。第３層～第５層は地山軟質岩をブロック状に含んでおり、斜面上位から流入したものと想定した。溝状遺構で幅は約１m、深さは約66cmを測り、東西方向へ延びる。遺構の全容を把握することが出来ず、遺構の性格については不明である。遺構を検出した付近は、傾斜がやや緩やかになる箇所であることから周溝の可能性も想定されるだろう。なお、遺物も出土しなかった。

第５トレンチ(Tr5)〔第57・61図、図版11・16〕

北へ下る果樹園への農道の東側、第１トレンチから北西へ約58mの標高約73.20mの平坦面から北東側の傾斜地に10.8×1.0＋1.0×1.0mの第５トレンチを設定した。トレンチ西隅の第２層(褐色粘質土)下、頂部平坦面の標高約73.0mで土坑を検出した。第５層(黄褐色粘質土)を掘り込んでおり埋土は第３層(褐色粘砂質土)で、埋土中から土師器片１点を検出した。土坑の規模は(1.26×0.40×0.16) mを測り、遺構は南西へ広がる可能性を持つ。また、第７層下面(明黄褐色粘質土)の標高約71.60～70.30m付近で幅1.42×深さ0.78mを測る溝状を検出した。埋土は灰色礫を含む第８層～第10層(明黄褐色粘質土)で、第11層の地山を掘り込みカットすることで傾斜を区画している。

なお、遺物は第２層で土師器(蓋摘部・器台裾部など)７点を検出した。

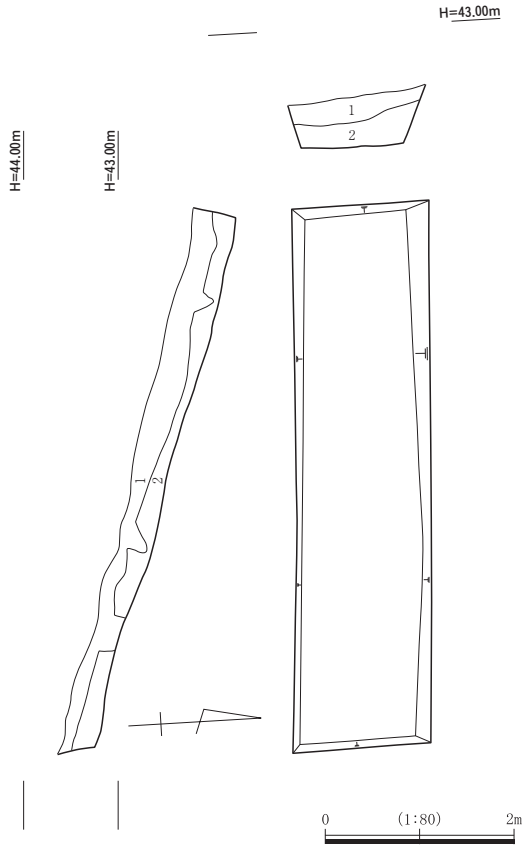
第６トレンチ(Tr6)　〔第58図、図版11〕

第６トレンチは、北へ下る果樹園への農道の東側、南北に延びる丘陵の西斜面に東西に細長いトレンチ(1.5×3.8m)を設定した。

地表面直下、約15～20cmは表土(第１層)で、第２層は砂粒を含み斜面上位から堆積した流入土と想定した。第３層は、地山に相当するものと想定されよくしまる。なお、遺構は検出せず遺物も出土しなかった。

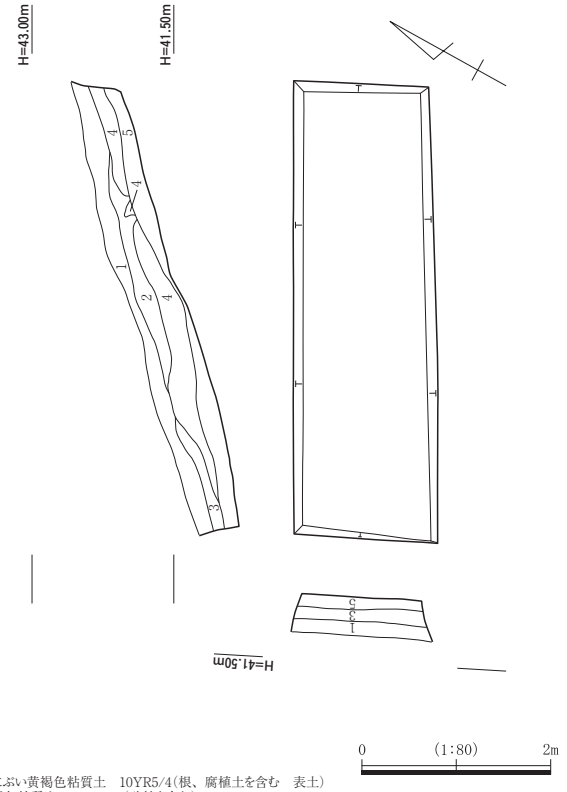
第７トレンチ(Tr7)　〔第59図、図版11・12〕

第７トレンチは、北へ下る果樹園への農道の東側、第６トレンチから西に約15mの地点、南北に延び



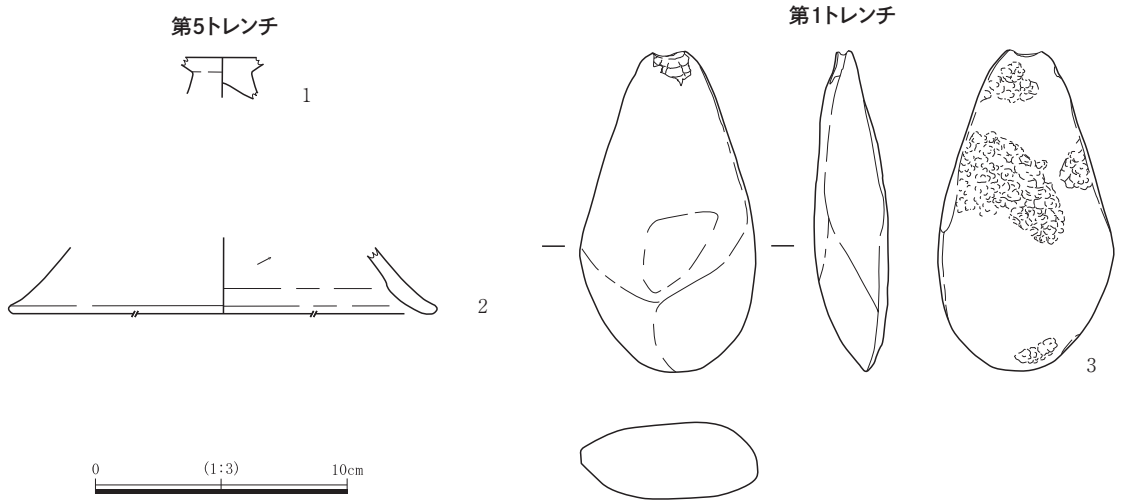
1.暗褐色粘質土　10YR3/4(根、腐植土を含む　表土)
2.明黄褐色粘質土　10YR6/6(よく締まる　地山)

第59図　六部山古墳群　第７トレンチ実測図



1.にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4(根、腐植土を含む　表土)
2.褐色粘質土　10YR4/4(砂粒を含む)
3.黄褐色粘質土　10YR5/6(砂粒を含む)
4.橙色粘質土　10YR7/8(炭化物をわずかに含む)
5.黄褐色砂質土　10YR5/6(地山)

第60図　六部山古墳群　第８トレンチ実測図



第61図　六部山古墳群　出土遺物実測図

る丘陵の西斜面にトレンチ(1.5×5.8m)を設定した。

地表面直下、約10～20cmは表土(第１層)で、第２層は、地山に相当するものと想定されよくしまる。なお、遺構は検出せず遺物も出土しなかった。

第８トレンチ(Tr8)〔第60図、図版12〕

第８トレンチは、北へ下る果樹園への農道の東側、第６トレンチから北西に約40mの地点、南北に延びる丘陵の西斜面に東西に細長いトレンチ(1.5×4.8m)を設定した。

地表面直下、約15～20cmは表土(第１層)で、第２層と第３層は砂粒を含み、斜面上位から堆積した流入土と想定した。第４層はわずかに炭化物を含み、土師器の細片が出土している。第５層は地山に相当するものと想定されしまる。なお、遺構は検出されなかった。

小結

以上、今回の調査対象地からは土坑状の掘り込みや石棺状遺構などが検出された。前述したが、周辺の丘陵上には、六部山古墳群だけでなく広岡古墳群や空山古墳群等が展開する地域である。現在、確認されている古墳など以外にも遺跡が所在している可能性が考えられる。今後も、調査対象地周辺の開発工事等にあたっては、きめの細かい確認調査が必要であると言える。

参考文献

鳥取県『新鳥取県史(資料編) 考古２ 古墳時代』2020年

第15節　松原谷田遺跡

調査期間　令和3年(2021) 1月18日～2月1日

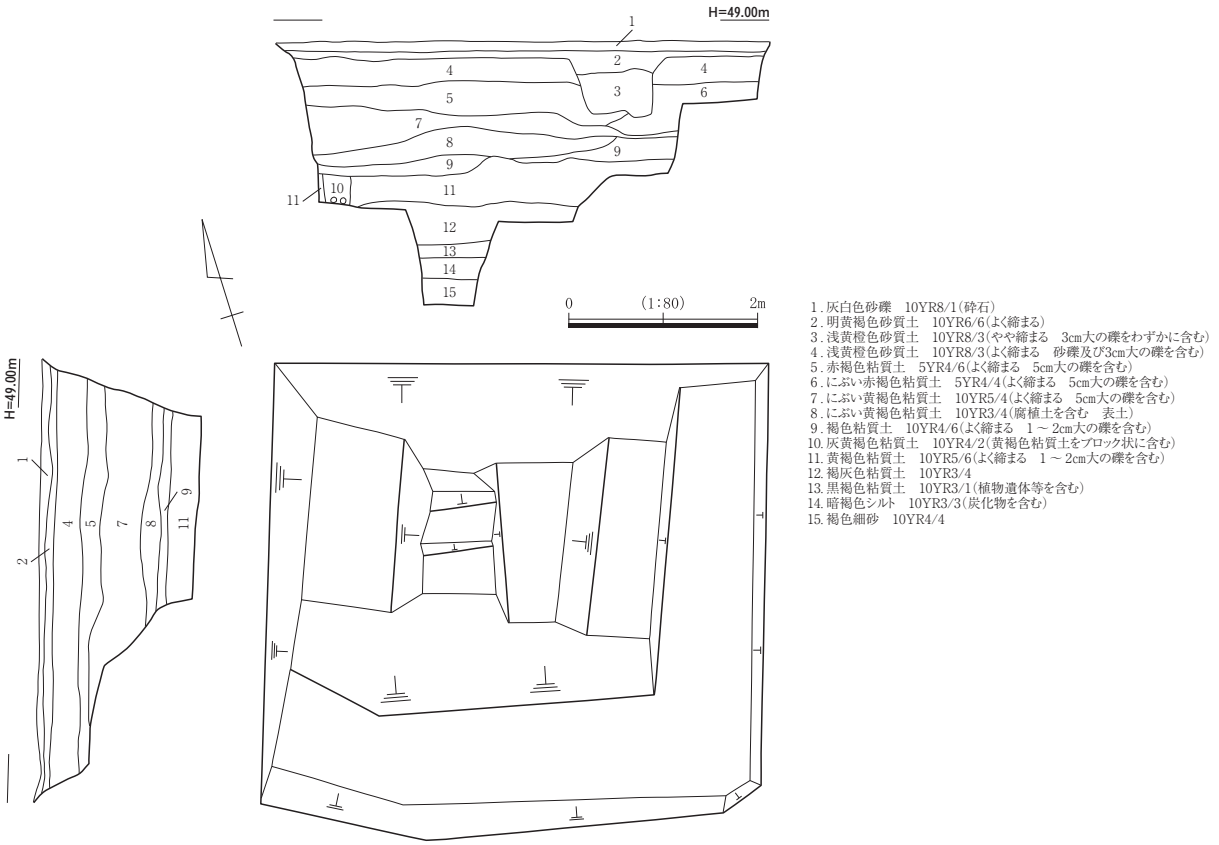
松原谷田遺跡は鳥取市松原地内に所在し、JR鳥取駅の西約８㎞、湖山池南西岸500m南に入った吉岡谷の東谷口部、標高５～10mの低丘陵台地に所在する。後背には標高約100mの山地が広がり、丘陵上には松原１号墓などの弥生墳丘墓群や松原古墳群、良田古墳群などが展開している。また眼下には田園地帯が広がり、松原田中遺跡や金沢坂津口遺跡などの集落遺跡が広がる。調査地は、「県立東部健康増進センター」および「国民年金保養センター」の建設に伴い、昭和49(1974)年・昭和50(1975)年の２度にかけて発掘調査が実施された。調査の結果、竪穴建物跡や掘立柱建物跡などの弥生時代後期から中世にかけての遺構が検出され、縄文土器や弥生土器、土師器、須恵器等などの遺物が出土した。また平成９(1997)年には試掘調査が行われ、溝状遺構や土坑が検出された。

第１トレンチ(Tr1)　〔第63・64図、図版12・16〕

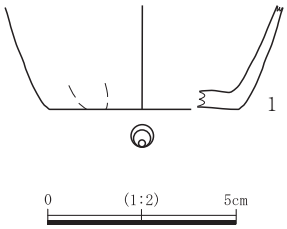
今回の調査地は倉庫建築に伴うもので、鳥取西道路吉岡温泉ICから南東に約100mの地点、以前はテニスコートとして利用されていた平地のほぼ中央に4.6×5.2mのトレンチを設定した。当初より整地による客土が見込まれたため、客土部分の除去を重機で行い、その後人力による掘削を進めた。

地表面直下、10cm程度の砕石が敷設されている(第１層)。第２層はよくしまり、テニスコートとして利用されていたころの地表と考えられる。第４層は３cm大の礫を多く含んでおり、テニスコートのころに排水としての役割を果たした層と想定される。なお、この４層から土師器片１点が出土した。以下、第５層～第９層では現代のビニール袋等のゴミがみられ、よくしまることから客土と想定される。第11層は水田として利用されていた頃の床土と想定され、11層上面を掘り込んで暗渠を確認された(第10層下面)。また、この11層からはガラス瓶の破片や土師器の細片等が出土し、第12層からも近世の擂鉢や土師器、須恵器、鉄片等が出土している。第13層は植物遺体を多く含み、13層下位で暗褐色シルトをブロック状に含んでいる。第14層は炭化物を含んでいる。12層で土師器が出土し、13層で人為的または動物等の影響がみられたため、12層～15層までの検出面ごとに遺構の検出を行ったが、遺構を確認す

第62図　松原谷田遺跡　調査トレンチ位置図



第63図　松原谷田遺跡　第１トレンチ実測図



第64図　松原谷田遺跡　出土遺物実測図

ることが出来なかった。なお、調査対象地から出土した土師器の杯身を図化した(第64図１)。(１)は体部がやや外傾気味に立ち上がり、底面に糸切りが施されている。

小結

今回の調査では、明瞭な遺構な意向を示す変化は認められなかった。ただし、炭化物や暗褐色シルト層をブロック状に含む層がみられ、人為的または動物の影響を受けている様子が確認された。

調査地の周辺にあたる湖山池南岸地域は、縄文時代早期から生活の痕跡が確認されている。さらに、湖山池は中世まで日本海とつながった内海であったと考えており、内海を利用した交流が行われていたものと考えられている。調査地の周辺は、低丘陵台地になっており遺跡が遺存する可能性が高いと思われる。今後周辺の開発にあたってはきめの細かい確認調査が必要だと考えられる。

参考文献

鳥取市松原谷田遺跡発掘調査団『谷田遺跡発掘調査概報』1975年
鳥取市教育委員会『松原谷田遺跡Ⅱ・大路川遺跡調査概報』1976年
鳥取市教育委員会『平成９年度鳥取市内遺跡発掘調査概報報告書』1998年
鳥取県『新鳥取県史 考古１ 旧石器・縄文・弥生時代』2017年
鳥取県『新鳥取県史(資料編) 考古２ 古墳時代』2020年

第16節　松上所在遺跡

調査期間　令和3年(2021) 1月26日～2月12日

松上所在遺跡は鳥取市松上に所在する。松上は野坂川の上流部に位置し、松上は上段・坂田・田中の三村の総称とされる。今回の調査は送電用の鉄塔建設に伴い実施され、松上北側の変電所から東に約400mの地点、県道49号線(鳥取河原用瀬線)沿いの東側の緩斜面に2.0×5.0mのトレンチを設定した。

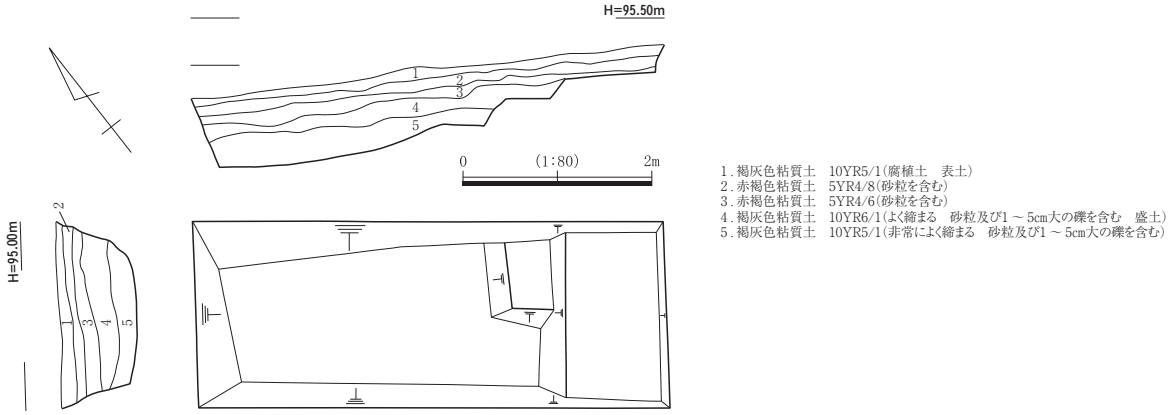
第１トレンチ(Tr1)　〔第66図、図版12〕

地表面直下、約10cmは表土(第１層)で、第２層及び第３層は砂粒を含んでおり、斜面上位から堆積した流入土と想定される。第４層は砂粒及び１～15cm大の礫を含んでおりよくしまる。包含物が第５層によく似るが、比較的にやや黒味掛かりしまりがやや弱く盛土と推測される。第５層は非常によくしまり砂粒及び１～５cm大の礫を含んでいる。なお、遺構は検出せず遺物も出土しなかった。

小結

今回の調査では遺構・遺物は確認されなかった。ただし、調査対象地の周辺には、金原所在遺跡や松上１号墳が所在しており、今後も周辺の開発等を行う際にはきめ細かい確認作業が必要であろう。

第65図　松上所在遺跡　調査トレンチ位置図



第66図　松上所在遺跡　第１トレンチ実測図

第17節　善田所在遺跡

調査期間　令和3年(2021) 2月12日～3月4日

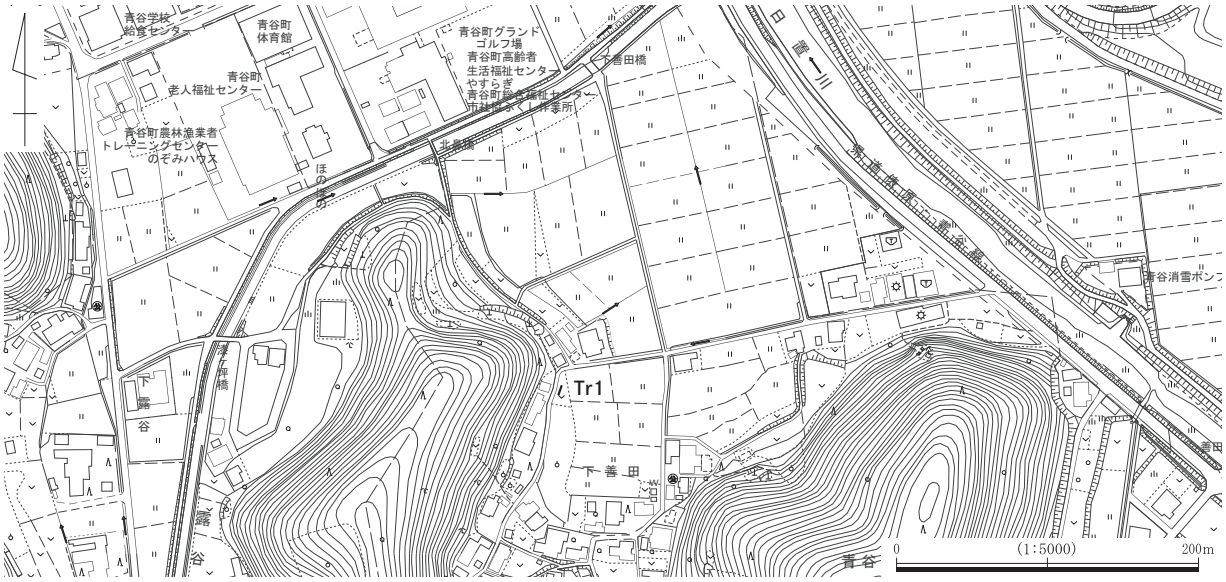
今回の調査対象地である鳥取市青谷町善田の周辺には、古代山陰道と想定される道路遺構が確認された善田傍示ヶ崎遺跡や、周辺には国史跡『青谷上寺地遺跡』が所在している。今回の調査は道路の拡幅に伴い実施され、トレンチは善田集落から北に約100mの畑地に1.5×6.9mのトレンチを設定した。

第１トレンチ(Tr1)〔第68図、図版12・13〕

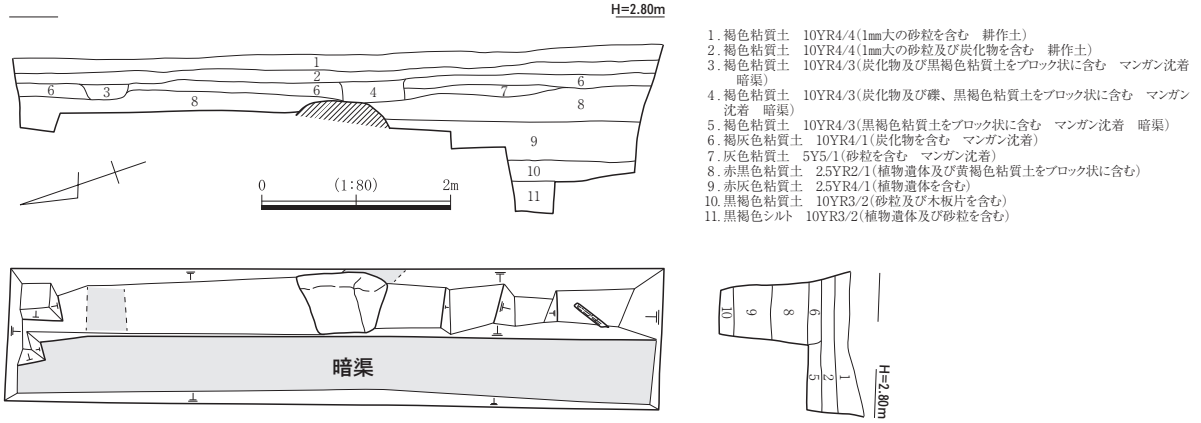
地表面直下、30cm程度は耕作土(第１・２層)で土器片や陶磁器片が出土した。第６層～第７層は床土と想定され、マンガンの沈着がみられた。また第６層上面を掘り込んで暗渠(３～５層)が確認された。第８層は客土と想定され、土器片や陶磁器片、木板片が出土し時期は安定しない。第９・10層は、植物遺体を含み土器片や須恵器片、木板片が出土し、特に10層で木板片などがみられた。第11層はシルト層で植物遺体を含む。９～11層検出面で遺構検出を行ったが、遺構は確認出来なかった。

小結

今回の調査では明瞭な遺構は検出されず、遺物もわずかな出土にとどまった。しかし、調査対象地の北側は古代山陰道の推定ルートとされており、関連施設などが埋蔵されている可能性が推測される。今後も開発にあたってはきめの細かい確認調査が必要と考えられる。



第67図　善田所在遺跡　調査トレンチ位置図



第68図　善田所在遺跡　第１トレンチ実測図

写 真 図 版

図版1

睦逢所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（南から）

睦逢所在遺跡　第１トレンチ西壁断面（東から）

睦逢所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（西から）

睦逢所在遺跡　第２トレンチ東壁断面（西から）

大桷遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（南西から）

大桷遺跡　第３トレンチ北壁断面（南から）

大桷遺跡　第４トレンチ調査後（南西から）

大桷遺跡　第４トレンチ横断面（南西から）

図版2

用瀬所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（北東から）

用瀬所在遺跡　第１トレンチ西壁断面（東から）

用瀬所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南東から）

用瀬所在遺跡　第２トレンチ西壁断面（東から）

海士所在遺跡　第２トレンチ完掘状況（東から）

海士所在遺跡　第２トレンチ北壁断面（南西から）

佐貫所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（北東から）

佐貫所在遺跡　第１トレンチ北壁断面（東から）

佐貫所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南西から）

佐貫所在遺跡　第２トレンチ北壁断面（南から）

佐貫所在遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（南西から）

佐貫所在遺跡　第３トレンチ北壁断面（南東から）

佐貫所在遺跡　第４トレンチ掘下げ状況（北東から）

佐貫所在遺跡　第４トレンチ北壁断面（東から）

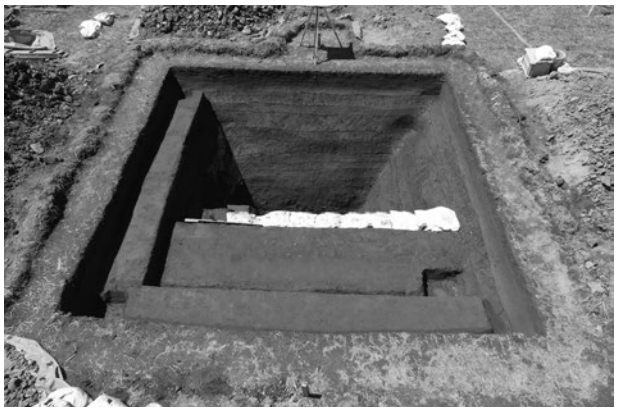
図版4

佐貫所在遺跡　第５トレンチ掘下げ状況（南西から）

佐貫所在遺跡　第５トレンチ北壁断面（南から）

青谷上寺地遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（北西から）

青谷上寺地遺跡　第１トレンチ南東壁断面（北から）



青谷上寺地遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（北東から）

青谷上寺地遺跡　第２トレンチ北西壁断面（南東から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第１トレンチ南壁断面（北東から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第２トレンチ西壁断面（東から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（北から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第３トレンチ西壁断面（東から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ調査後（東から）

善田傍示ヶ崎遺跡　第４トレンチ北断面（南から）

上町所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）

上町所在遺跡　第１トレンチP01断面（西から）

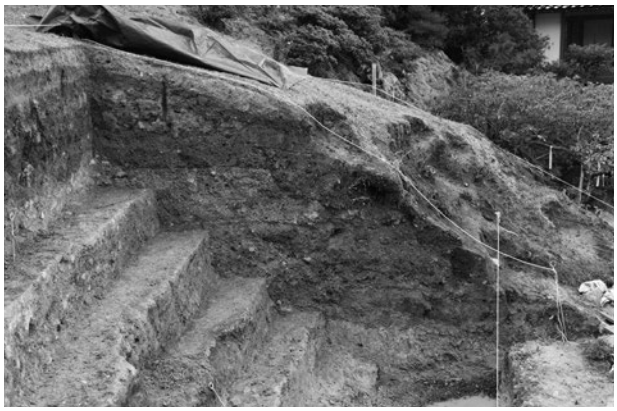
図版6

上町所在遺跡　第１トレンチ南壁断面（東北から）

上町所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南から）

上町所在遺跡　第２トレンチ東壁断面（西から）

上町所在遺跡　令和２年度調査区東壁（西から）



上町所在遺跡　令和２年度調査区南壁（北から）

下味野古墳群　第１トレンチ掘下げ状況（東から）

下味野古墳群　第１トレンチ南壁断面（北東から）

下味野古墳群　第２トレンチ掘下げ状況（北から）

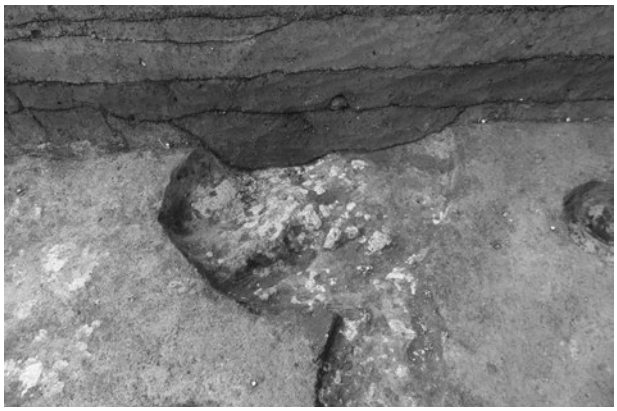
下味野古墳群　第２トレンチ西壁断面（北東から）

下味野古墳群　第３トレンチ掘下げ状況（北東から）

下味野古墳群　第３トレンチ北壁断面（東から）

会下・郡家遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（東から）

会下・郡家遺跡　第１トレンチ西壁断面（東から）


会下・郡家遺跡　第１トレンチSK01掘下げ状況（北から）

会下・郡家遺跡　第１トレンチSK02掘下げ状況（北から）

良田所在遺跡　第１トレンチ遠景（北東から）

図版8

良田所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（南東から）

良田所在遺跡　第１トレンチ北壁面（南から）

良田所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（東南東から）

良田所在遺跡　第２トレンチ北壁断面（南東から）

常松所在遺跡　第１トレンチ掘下げ状況（西から）

常松所在遺跡　第１トレンチ東壁断面（西から）

広岡古墳群　第１トレンチ掘下げ状況（東から）

広岡古墳群　第１トレンチ南壁断面（北西から）

祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ掘下げ状況（南東から）

祢宜谷所在遺跡　第２トレンチ南西壁断面（東から）

祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ掘下げ状況（東から）

祢宜谷所在遺跡　第３トレンチ南壁断面（北西から）

祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ掘下げ状況（西から）

祢宜谷所在遺跡　第４トレンチ北壁断面（南から）

六部山古墳群　第１トレンチ調査後（東から）

六部山古墳群　第１トレンチ断面（北から）

図版10

六部山古墳群　第２トレンチ完掘状況（南から）

六部山古墳群　第２トレンチ断面（西から）

六部山古墳群　第２トレンチ石棺状遺構検出（西から）

六部山古墳群　第３トレンチ掘下げ状況（北から）

六部山古墳群　第３トレンチ断面（北東から）

六部山古墳群　第４トレンチ完掘状況（南から）

六部山古墳群　第４トレンチ西断面（東から）

六部山古墳群　第５トレンチ調査後（北から）

六部山古墳群　第５トレンチ南側調査後（北から）

六部山古墳群　第５トレンチ土壙（南東から）

六部山古墳群　第６トレンチ調査後（西から）

六部山古墳群　第６トレンチ断面（北から）

六部山古墳群　第７トレンチ調査後（西から）

図版12

六部山古墳群　第７トレンチ断面（北西から）

六部山古墳群　第８トレンチ調査後（西から）

六部山古墳群　第８トレンチ断面（南から）

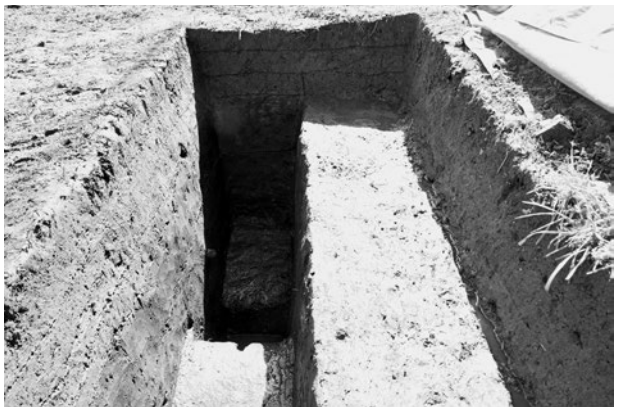
松原谷田遺跡　第１トレンチ調査後（東から）

松原谷田遺跡　第１トレンチ断面（南から）

松上所在遺跡　第１トレンチ調査後（南東から）

松上所在遺跡　第１トレンチ断面（南から）

善田所在遺跡　第１トレンチ完掘状況（北から）



善田所在遺跡　第１トレンチ断面（北から）

海士所在遺跡　出土遺物２

海士所在遺跡　出土遺物１

青谷上寺地遺跡（第１トレンチ）　出土遺物

青谷上寺地遺跡（第２トレンチ）　出土遺物１

図版14

青谷上寺地遺跡（第２トレンチ）　出土遺物２

善田傍示ヶ崎遺跡（第１トレンチ）　出土遺物１

善田傍示ヶ崎遺跡（第１トレンチ）　出土遺物２

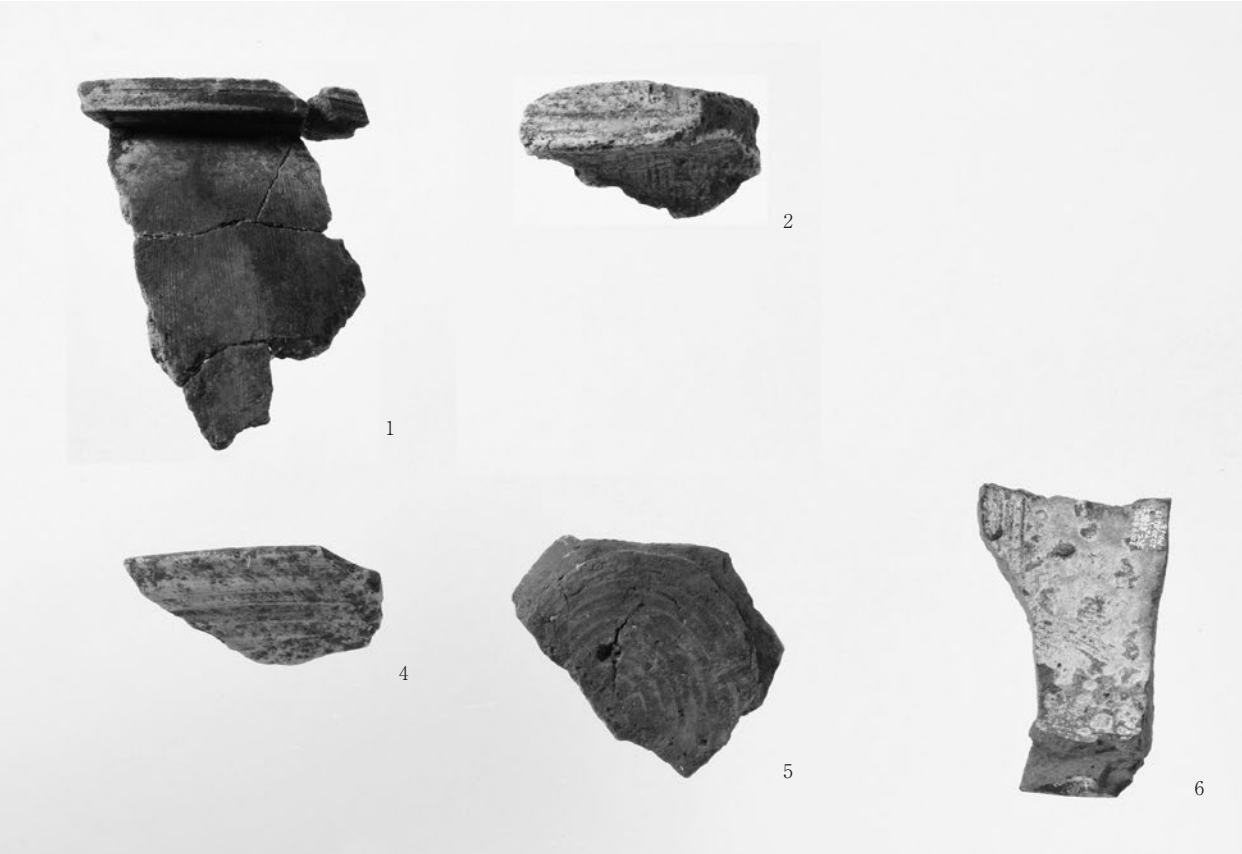
善田傍示ヶ崎遺跡（第１トレンチ）　出土遺物３

善田傍示ヶ崎遺跡（第３トレンチ）　出土遺物

善田傍示ヶ崎遺跡（第２トレンチ）　出土遺物１

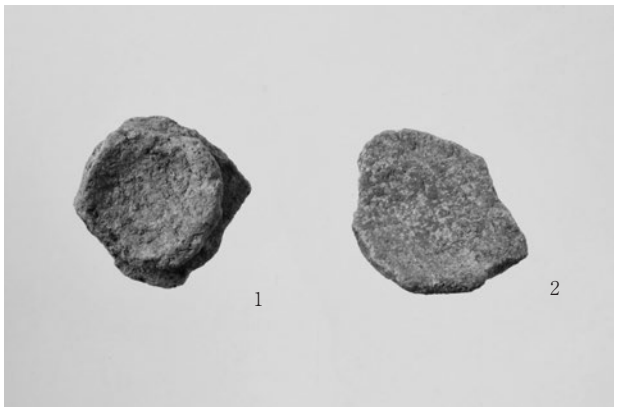
善田傍示ヶ崎遺跡（第２トレンチ）　出土遺物２

図版16



会下・郡家遺跡　出土遺物

会下・郡家遺跡（SK01）　出土遺物



六部山古墳群（第５トレンチ）　出土遺物

六部山古墳群（第１トレンチ）　出土遺物１

松原谷田遺跡（第１トレンチ）　出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	れいわ４ねんど　とっとりしないいせきはっくつちょうさがいようほうこくしょ
書名	令和４(2022)年度　鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	鳥取市文化財調査報告書
シリーズ番号	第36集
編著者名	
編集機関	鳥取市教育委員会
所在地	〒680-8571　鳥取県鳥取市幸町71番地
発行年月日	令和５年(2023)３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
むつおしょざいいせき 睦逢所在遺跡	とっとりしけたかちょうむつお 鳥取市気高町睦逢	31201		35°29′11″	134°2′6″	2019/4/15～5/10	40.0	鉄塔建設
だいかくいせき 大桷遺跡	とっとりしみやだに 鳥取市宮谷	31201	1-0261	35°29′14″	134°10′59″	2019/5/10～16 2019/11/27～29	17.5	道路敷設
もちがせしょざいいせき 用瀬所在遺跡	とっとりしもちがせちょうもちがせ 鳥取市用瀬町用瀬	31201	12-0018	35°20′34″	134°12′38″	2019/5/27～6/4	35.8	水道配水池建設
あもうしょざいいせき 海士所在遺跡	とっとりしふくべちょうあもう 鳥取市福部町海士	31201		35°32′52″	134°15′57″	2019/6/11～20	31.8	個人開発
さぬきしょざいいせき 佐貫所在遺跡	とっとりしかわはらちょうさぬき 鳥取市河原町佐貫	31201		35°22′31″	134°11′43″	2020/1/14～2/13	80	道路敷設
あおやかみじちいせき 青谷上寺地遺跡	とっとりしあおやちょうよしかわ 鳥取市青谷町吉川	31201	18-0082	35°30′41″	133°59′23″	2020/2/4～14 2020/4/23～5/8	50.41	個人住宅建築 ガイダンス施設建築
よしだぼうじがさきいせき 善田傍示ヶ崎遺跡	とっとりしあおやちょうつゆだに 鳥取市青谷町露谷	31201	18-0438	35°30′37″	133°59′50″	2020/1/20～3/6 2021/3/11～3/24	64	河川改修
うえまちしょざいいせき 上町所在遺跡	とっとりしうえまち 鳥取市上町	31201		35°29′46″	134°14′31″	2020/2/25～3/12 2020/11/17	10.5	庭園整備
しもあじのこふんぐん 下味野古墳群	とっとりししもあじの 鳥取市下味野	31201		35°28′20″	134°11′48″	2020/3/17～3/19	11.04	鉄塔建設
えげこおげいせき 会下･郡家遺跡	とっとりしけたかちょうこおげ 鳥取市気高町郡家	31201	15-0477	35°29′54″	134°2′19″	2020/3/17～19	25	鉄塔建設
よしだしょざいいせき 良田所在遺跡	とっとりしよしだ 鳥取市良田	31201		35°29′53″	134°8′48″	2020/3/23～24 2020/5/14～15	13.4	道路敷設
つねまつしょざいいせき 常松所在遺跡	とっとりしけたかちょうつねまつ 鳥取市気高町常松	31201		35°30′17″	134°4′53″	2020/5/21～27	13.0	道路敷設
ひろおかこふんぐん 広岡古墳群 ねぎだにしょざいいせき 祢宜谷所在遺跡	とっとりしねぎだに 鳥取市祢宜谷	31201		35°26′18″	134°14′53″	2020/6/8～7/1	25.5	鉄塔建設
ろくぶやまこふんぐん 六部山古墳群	とっとりしひさすえ 鳥取市久末	31201		35°26′41″	134°14′31″	2020/9/8～28 2020/12/1～11	52.85	野球場建設
まつばらたにだいせき 松原谷田遺跡	とっとりしまつばら 鳥取市松原	31201	1-0102	35°29′33″	134°8′3″	2021/1/18～2/1	23.92	倉庫建築
まつがみしょざいいせき 松上所在遺跡	とっとりしまつがみ 鳥取市松上	31201		35°26′26″	134°7′58″	2021/1/26～2/12	10	鉄塔建築
よしだしょざいいせき 善田所在遺跡	とっとりしあおやちょうよしだ 鳥取市青谷町善田	31201		35°30′33″	133°59′55″	2021/2/12～3/4	10.35	道路敷設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
睦逢所在遺跡	散布地			土師器、須恵器、陶磁器類	試掘調査として実施
大桷遺跡	散布地		旧川床	土師器、陶磁器、染付皿	試掘調査として実施
用瀬所在遺跡	散布地	中世～近世	土坑、溝状遺構	土師器、陶磁器	試掘調査として実施
海士所在遺跡	散布地	古墳時代後期～古代	ピット	土師器、須恵器、鉄製品(鎌)	試掘調査として実施
佐貫所在遺跡	散布地	中近世か	ピット	土師器、須恵器、陶磁器、瓦、鉄製品	試掘調査として実施
青谷上寺地遺跡	散布地		溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器類、木製品	試掘調査として実施
善田傍示ヶ崎遺跡	散布地		道路遺構、杭、石敷き状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、漆器、木製品	試掘調査として実施
上町所在遺跡	散布地	中世か	土坑、ピット	土師器、陶磁器、瓦	試掘調査として実施
下味野古墳群	散布地	古墳時代	周溝、土坑、ピット		試掘調査として実施
会下･郡家遺跡	散布地	古代	土坑、ピット	土師器、須恵器、陶磁器類	試掘調査として実施
良田所在遺跡	古墳	古墳時代	周溝	埴輪、陶器	試掘調査として実施
常松所在遺跡	散布地			土師器、陶磁器	試掘調査として実施
広岡古墳群･祢宜谷所在遺跡	散布地			土師器	試掘調査として実施
六部山古墳群	古墳	古墳時代	周溝、石棺、土坑、溝状遺構	土師器、石製品	試掘調査として実施
松原谷田遺跡	散布地			土師器、須恵器、陶磁器	試掘調査として実施
松上所在遺跡					試掘調査として実施
善田所在遺跡	散布地			土器、須恵器、陶磁器、木片	試掘調査として実施

令和４(2022)年度
鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書

令和５年(2023)３月31日

編集
発行
鳥取市教育委員会
〒680-8571 鳥取県鳥取市幸町71番地
TEL(0857)30-8421

印刷
日ノ丸印刷株式会社
〒680-0813 鳥取県鳥取市寿町915
TEL(0857)22-2248